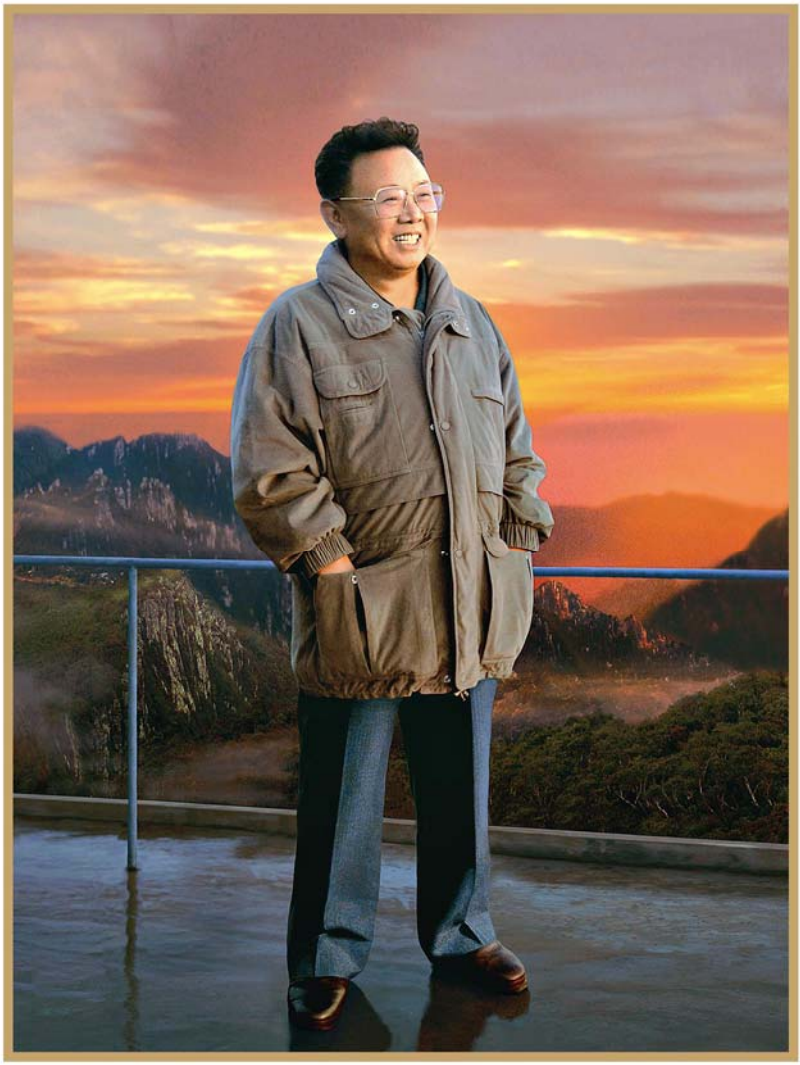
金正日逸話集

2

金正日逸話集

2

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ104（2015）



三水発電所の建設現場を現地指導する（2006.3.3）

沙里院市媚谷協同農場を現地指導する（2006.12.3）

竜城機械連合企業所を現地指導する（2006.11.12）

長淵湖養魚場を
現地指導する
(2007. 2. 6)

高山果樹農場を現地指導する（2008.5.4）

咸州屏風台地ヤギ牧場を現地指導する（2008.8.7）

元山青年発電所の除隊軍人家庭を訪ねる（2009.1.5）

龍岳山遊園地の法雲庵を見て回る（2009.1.17）

金津江旧倉青年発電所を現地指導する（2009.11.6）

目　　次

1　愛と信頼 …… 1
「泣いていちゃ写真がきれいに撮れないよ」 …… 1
遊戯場の笑い声 …… 2
返された拳銃 …… 4
お金の計算は後で …… 6
〝100 メートル美人〟が〝器量よし〟に …… 8
忘れるべきでない根 …… 10
蜂蜜代 …… 11
引き抜かれたコンクリート柱 …… 12
非常措置 …… 13
〝水の乾杯〟 …… 15
総書記と在日同胞たち …… 16
〝欲張り〟の総聯議長 …… 16
「乾杯！」 …… 17
信　頼 …… 19
いわれの深い釣り竿 …… 22
例のない勤務交替 …… 23
兵士の側だ！ …… 25
「早く発とう」 …… 26
除隊軍人家庭を訪問 …… 27
叶えられなかった願望 …… 29
一番うれしい知らせ …… 30

「晩は怖いだろう」 …… 31
にわかに丈が伸びた分場長 …… 33
生みの親の心情 …… 34
　「早く蓋をしなさい」 …… 34
　極冷凍室の温度 …… 35
旋盤工の囁き …… 37
「歯がみな折れてしまうだろう」 …… 38
すすがれた〝汚名〟 …… 39
松岩洞窟の女性講師 …… 41
　花は真っ盛り …… 41
　娘のおのろけ …… 43
表彰観覧 …… 44
「あまりにすばらしくてね」 …… 46
「気の置けない友人だと考えればいい」 …… 47
「見なくてもいい」 …… 49
国宝を授かった画家 …… 50
〝ソルチェ嶺中隊〟 …… 51
未来か現在か …… 53
今日だけは例外 …… 54
立ち退き世帯問題 …… 55
農民休養所にて …… 57
念を押して聞いたわけ …… 58
なくされた階段 …… 59
「匂いが香ばしくていい」 …… 60

2　魅力とあこがれ ····· 63
川辺で起きた笑い声 ····· 63
カットされたフィルム片 ····· 65
結い紐の調和 ····· 66
「……ありがとうございます」 ····· 68
中国訪問の日びに ····· 69
機雷でなく爆雷 ····· 69
燕窩〝論争〟 ····· 70
キリストの復活は信じないが ····· 72
ウマラトワの激賛 ····· 73
ひんぱんに訪ねれば友情は厚くなる ····· 75
海上での午餐 ····· 75
こだわりなくひんぱんにおいでなさい ····· 77
自慢が過ぎると ····· 79
返した〝借り〟 ····· 80
6・15 統一逸話 ····· 82
撮り直した記念写真 ····· 82
世界に回答を ····· 83
〝離散家族〟 ····· 84
〝出演料〟 ····· 85
〝正真正銘の一家〟 ····· 86
自民族のための共助 ····· 87
ロシアの極東にて ····· 88
失業したのでは ····· 88
〝偵察兵〟たちは実によくやった ····· 89
午餐会が終わる時に ····· 90

3　献身の足跡 …… 93
「旧石器問題、研究してみること！」 …… 93
フグの仇敵 …… 95
米軍情報収集艦の末路 …… 97
遺言を残すわけにはいかない …… 99
田野におけるスポーツ競技 …… 101
どこから送られたセメントか …… 103
正真正銘の間抜け者 …… 104
〝密林の中の兵器廠〟 …… 105
地下の名勝―龍門大窟 …… 108
記念撮影は軍人たちと一緒に …… 111
民族史に残る傷 …… 113
待った１時間 …… 114
軍隊が先に投げたボール …… 115
「ただではない」 …… 117
「ブタ宮殿」 …… 118
「大いに自慢すべきです」 …… 119
顔のほっそりした歌手 …… 121
仙女峰 …… 122
〝ポンプ味噌〟 …… 124
「一日中こんな仕事をするのは大変だろう」 …… 125
林産労働者の〝抗議〟 …… 127
人民軍の功績 …… 129
　かれた声 …… 129
　最高司令官の感謝を …… 130
「それは当然です」 …… 131

「小白水にキジがいるのか？」 …… 132
〝黄金山〟に大豆はない …… 133
安仏寺のイチョウの木 …… 135
麻服と毛織りの衣服 …… 138
このような人が愛国者だ …… 139
〝悪夢の時間〟 …… 140
強者は挑戦者を恐れる …… 142
屏風台地ヤギ牧場にて …… 143
　より高いレベルで …… 143
　アイディアはいいが …… 145
「〝南無阿弥陀仏〟を唱えなくちゃ」 …… 146
チョウザメは海へ …… 148
愛国者も英雄も多い国 …… 149
48 年後に撮った記念写真 …… 151
ＣＮＣに宿る偉人像 …… 153
　支配人の告白 …… 153
　ＣＮＣの〝いとこ〟 …… 156
昔の地主が目を回すことだろう …… 157
「大きな顔をすることができる」 …… 158
「ここの製品はみなわたしが買おう」 …… 160

1　愛と信頼

「泣いていちゃ写真がきれいに撮れないよ」

1976年３月12日、平壌（ピョンヤン）サーカス学校第１期養成生の卒業作品発表会に臨席した金正日（キムジョンイル）総書記は、大したものだ、彼らの技量は古参の俳優たちにまさるとも劣らない、として興味深く観覧した。

かなり時間が流れて昼時となった。残りの演目は改めてご覧になってはという随員の進言に、総書記は、新進俳優たちの見事な演技を見ていると時間の経つのが分からない、いいからしまいまで見ようと言った。

空中高くで優雅な律動を見せる『空中３人ぶらんこ』が披露された。

総書記は、新作のサーカスだが、なかなか見ごたえがある、３人が同じ１人のように動いている、まるで三つ子のようだと言って、真っ先に拍手を送った。

観覧中総書記は、チュチェサーカスの発展方向についての助言も行った。

発表会が終わり、総書記が席を立とうとした時、養成生たちが駆け降りて来て、お願いがあります、と口ぐちに言った。総書記はにこにこして、どんなことかね、とやさしく聞いた。

「親愛なる指導者同志と御一緒に卒業記念写真を撮れたらと思

います」

「うん、そうだな。今日のようなめでたい日には写真を撮るべきだ。みんなで一緒に撮ろう」

養成生たちはうれしさのあまり、涙を流した。総書記はそんな彼らの肩をやさしく叩いた。

「さあ、涙をぬぐってここへ並ぶのだ。……泣いていちゃ写真がきれいに撮れないよ」

それでも涙で顔を濡らしている養成生たちを見回して促した。

「さあさあ早く撮ろう。……まずモノクロで撮り、次にカラーで撮ることにしよう」

撮影後総書記は、卒業作品をもっと立派に仕上げて、金日成(キムイルソン)同志にご覧に入れよう、立派に育った新人サーカス俳優たちの姿を金日成同志にきっとお目にかけなくちゃ、と言って別れを告げた。

遊戯場の笑い声

1977年10月２日、竣工なった大城山(テソンサン)遊戯場を視察した金正日総書記は入り口で、遊戯場の全景を長いこと眺め、なかなか立派だ、市民や子どもたちがきっと喜ぶことだろうと、たいそう満足し、時間をかけて遊戯機械と施設をいちいち見て歩いた。

いつしかたそがれが迫り、大城山の旧城址に冷たい秋風が吹き始めた。随員たちは、二度、三度もうこれくらいにして帰ってはと勧めた。

「いや、われわれが遊戯機械の状態を確かめもしないで、どうして平気で子どもたちに乗れと言えよう。

たびたび出て来られるわけでもないから、ちょっとばかり遅くなってもこの際、みんな見て帰りましょう」

こう言って、次の遊戯機械はどこか、早く行ってみようと、一行を促し、マッドマウス遊戯場に着くと、早速それに乗ろうとした。随員たちはあわてて駆け寄り、もう暗いから、マッドマウスに乗るのは控えるようにと押しとどめた。

総書記は笑って、みなさんの中にマッドマウスに乗ったことのある人がいるか、と質問した。答える者がなかった。

総書記はそれ見たことかと言わんばかりに笑い、人民が乗って楽しむ遊戯機械をわたしが乗れないわけはない、心配には及ばない、むしろこのように暗い時に乗ったら恐怖心も起こらないだろうからいい、と言って、マッドマウスに乗り込んだ。

マッドマウスがコースを回って無事停留所に帰り着くと、手に汗を握って見守っていた随員たちが近寄った。

マッドマウスから降りた総書記は一同を見回して、孫たちを連れてやって来たおじいさんやおばあさんは恐らく、空中を走行するこのマッドマウスが信用できず、「乗っちゃいかん。もしものことがあったらどうする」と反対するだろう、だが、わたしが乗って試したと知ったら、「早く乗ってごらん、早く」と積極的になるだろう、と言って豪快に笑った。随員たちも声を立てて笑った。

返された拳銃

いつだったか、革命事績担当部署の人たちは、抗日革命闘士崔賢（チェヒョン）に抗日武装闘争時代から愛用していた拳銃があると知って彼を訪ね、青少年教育にとって是非必要な事績物だから、拳銃を譲っていただけないだろうかと持ちかけた。

「な、なんだと。前にわしを丸めこんで琥珀のパイプ（抗日武装闘争時代に金日成主席から贈られた記念品）をせしめていき、今度は唯一大事な拳銃まで持ち去ろうと言うのか。いかん。つべこべ言わずに、とっとと消え失せるがいい」

崔賢は目に角を立てて怒鳴った。

眉をしかめて、いかん、いかんと手を左右に振っていた彼も、五度目の懇請には根負けしてしまった。

「しょうがない。持って行くがいい」

声を震わせ、ロッカーから拳銃を取り出した崔賢は、黒光りのする銃を長いことなでさすった後、前へ突き出した。

「そら、持って行くんだ。わしの大事な最後の財産だった。青少年教育に立派に役立ててくれ」

彼は、客が拳銃をカバンにしまうのが見るに耐えず、しかめた顔をそむけた。

金正日総書記は後日、このことを知った。

祖国解放直後のある日、金日成主席の邸宅を訪れた彼が、モーゼル拳銃を枕にして床に横たわっていた姿がまぶたに浮かんだ。

幼い総書記は、そんな彼に聞いた。

「……どうして枕があるのに、拳銃を枕にしているの？」

「ずっと前からの癖でね。小さい頃は木枕をしたが、遊撃隊に入ってからはいつも銃を枕にしていた。今も、このモーゼルを枕にすると、ぐっすり眠れるんだよ」

「今は国が解放されたのに、拳銃を枕にしないでもいいんじゃない？」

「そうじゃない。解放はなったが、38度線みたいなものが出来て、南側では李承晩（リスンマン）とかいうやつが北へ攻め込もうと、しきりにちょっかいを掛けているんだよ。どうもわしは、死ぬまで枕を高くして眠れるようには出来ておらん」

「モーゼル拳銃を枕にする闘士」とは、崔賢の別称であった。恋人のようにそんなにも愛し、肌身離さず持ち歩いていた拳銃を手放したのだから、どんなに寂しい思いをしているだろうか。……

総書記は１人の幹部を呼んだ。

「崔賢同志に拳銃をお返ししよう。……

崔賢同志に会ったら、青少年教育に役立てようと、拳銃を出して下さって感謝しているという、わたしの挨拶を伝えて下さい。それから、わが党は崔賢同志の拳銃をはじめ、一連の遺跡・遺物をしばらく日を延ばして展示することにしたので、一応お返しすることにして持って来たと言うのです」

「承知しました。けれども、いったんこうと決めたら自分のズボンさえ脱いで与えるような崔賢同志が、一度手放した拳銃を受

け取るでしょうか」

「この拳銃は、老闘士の若い革命同志が、わが革命武力の強化、発展に最後まで献身されることを望む信頼のしるしとして、崔賢同志に改めてお贈りする拳銃だと言うのです。

そうしたら、きっと受け取るでしょう」

彼は早速崔賢を訪ねて行き、拳銃を渡した。ケースを開けた崔賢は目を見張った。

「これは、わしの拳銃じゃないか」

「そうじゃありません」

「いや、わしの銃に間違いない」

「崔賢同志がいったん手放したからには、もはや同志の物ではありません。これは党から贈られる拳銃です」

「ふーむ。理屈からすればそうなるわい」

彼は総書記のことづけを伝えた。

おのれの物でありながらもおのれの物でない拳銃。もはや意味が全く違ってしまった拳銃に改めて見入る闘士は、総書記にただただ感謝するばかりであった。

お金の計算は後で

1980年２月24日、竣工間近い平壌（ピョンヤン）産院を視察した金正日総書記は、建物の内外を念入りに検分してたいそう満足した。

「平壌産院を立派に建てました。

……

金日成同志はかなり前に平壌に最新設備の産院を建てようとおっしゃっていましたが、これまで延び延びになっていたのを、今回党がじかに担当して産院の建設を進めたわけです」

産院の建設が決まった時、ベッド数が500台として設計され、これなら世界屈指の産院になるだろうと、関係者たちは自負した。現に、ヨーロッパでかなり大きいとされる某国の産院は、450台のベッドを備えていた。

ところが彼らの計画を聞いた総書記は、ベッド数を最低1500台にし、ここで成人用ベッドを1000台、新生児用ベッドを500台にすべきだと指摘した。

当該幹部は、ベッド数を増やすと、それだけ保育器の購入が必要となって外貨予算が大きく超過する、現在予定している保育器なら、平壌産院で生まれる早産児や未熟児の保育に支障はないだろうと思う、と説明した。総書記はかぶりを振った。

いや、もっと増やさなければなりません。党が子どもたちのことでお金を惜しんだ例は一度もありません。……

産院の設備は、必要なものを欠かさず備え、お金の計算はその後にしても別条ありません。

設備の明細書は即座に訂正された。

こうして、高価で入手困難とされた多数の保育器をはじめ、数千点の最新式内部設備が購入された。そこには、きわめてまれに見られる疾病診断用の、年に１度か２度しか使用しないような医療器具も含まれていたが、その価格は、高級乗用車数10台分に相

当するものであった。

〝100メートル美人〟が〝器量よし〟に

1981年８月13日、金正日総書記は竣工間近いアイススケートリンクの建設現場を訪れた。王冠のような形態の屋根、ロケット打ち上げ台を連想させる傾斜柱などを見てほほえみ、内装の仕上げが進められている屋内に足を踏み入れた総書記は、円錐形天井を見上げて、顔色を曇らせた。

天井には、トタン製装飾帯がひだをなすようにして巡らしてあった。外国の室内競技場などでは、天井に鉄骨の裏打ちを施しているが、この天井には特別に費用をかけて、新式のトタン製装飾帯を採用したのであった。ところが……。

建設者たちのいぶかしげな表情に気づいた総書記は、アイススケートリンクの外壁と内部の円錐形天井に同一形態のトタン製装飾帯を巡らせたのは褒めたことではない、円錐形天井の中心には蛍光灯を太陽光芒のように放射線状に取り付けると悪くないだろう、と指摘した。

総書記の勧告は続いた。

――出入り口のドアが気になる。大勢の人が利用するドアを招待所のそれのようにすると、長く持たない。リンクの外側と内側の壁に同一の塗料を施しているが、それはよくない。塗装面をきれいに仕上げるのが面倒で、簡便な蜂巣状スタッコで間に合わせ

たのだろうが、そんな安易な考え方をしてはいけない。フィギュアのような優美な運動をするスケートリンクは劇場と異ならないから、ホール一つにしても入念に仕上げるべきだ。内部も鉄板、外部も鉄板、外壁も塗料材、内壁も塗料材、そんなことではだめだ。……

建設を細部にわたって検分し、欠点を具体的に指摘する総書記の眼識に、一同は感嘆した。

総書記は、塗料材を施した内壁とタイルを貼った床は改装すべきだとして、こう言った。

スケートリンクが〝100メートル美人〟みたいになりました。〝100メートル美人〟とは、遠くから見ると美しいが、近寄って見ると醜いということです。

……

今のままではリンクの公開がはばかれます。スケートリンクはある誰か１個人の所有物ではなく、人民が利用する建物ですから、誠意を尽くして完成させなければなりません。

こうしてアイススケートリンクは作り直されることになった。

後日、リンクを視察した総書記は満足し、全般的に申し分なくよく出来た、これなら人民の前に堂々と公開してもよいだろう、と言った。

忘れるべきでない根

1981年11月５日のこと。

金正日総書記は一幹部に電話を入れ、抗日革命闘士張哲九（チャンチョル グ）女史の家を訪問してみたかと聞いた。声が沈んでいた。

「最近は訪ねておりません」

総書記の言葉が途切れた。

当時、張哲九女史は老齢で、家で休息を取っていたが、健康や生活上不自由しているという話は聞いていないので、彼は別に気にとめていなかったのである。

（女史に何かあったのだろうか……）

総書記の憂いを帯びた声が再び流れて来た。

――今、張哲九さんは患っており、古い冷蔵庫は故障で使えないそうです。……

「指導者同志、申しわけありません。わたしの不徳のせいで、女史の容態がすぐれないことに気づきませんでした」

「張哲九さんが患っていると聞いて、胸の痛みを抑えることができません。

張哲九さんは抗日革命闘争時代、金日成同志の食事を担当した方です。そのようなお方を黄金をもってして替えられましょうか。……今みなさんは幸せを享受していながらも、その根を忘却しているようです」

乳飲み子を他人に預けて抗日の戦いにはせ参じ、司令部づき炊

事兵として戦った張哲九女史。彼女のような、朝鮮革命第１世代闘士の血みどろの奮闘があったがこそ、朝鮮人民の今日の幸せがもたらされたのではなかろうか。……

彼は申しわけなさで胸が詰まった。そんな気持ちを察したかのように総書記は、早速張哲九さんを見舞い、容態と治療対策、それに生活の状況を丹念に確かめて報告し、必要な措置を至急講ずるよう強調した。

彼が女史宅に駆けつけた時、女史は、自分には別条がないから心配しないでもいい、わたしはひたすら主席と指導者同志の健康を願うばかりだ、と言った。

蜂蜜代

平壌（ピョンヤン）産院の開院後２年が経った1982年10月21日、幹部たちと談話を交わしていた金正日総書記は、産院では産婦たちに蜂蜜を出してあげているのかと聞いた。

それまでの蜂蜜の供給状況について説明を受けた総書記は満足してうなずき、ところで、産婦たちに蜂蜜をどう提供しているのかと今一度聞いた。質問の意味を取りかねて返答に窮している相手に、蜂蜜を提供して代金を要求しているのかと聞き直した。

「国定の価格を支払ってもらっていますが、それは微々たるものです」

総書記は、産婦たちに蜂蜜の代金を払わせるのはよくない、と

してこう続けた。

――わが国の女性は遠い昔から子を産むと蜂蜜を食べている。蜂蜜が産婦の健康回復に特効があるために、党は平壌産院の開院後産婦たちに蜂蜜を中断せず供給する措置を講じた。党がじかに産婦たちに提供する蜂蜜の代金を取っていいものか。産婦には蜂蜜を無料で与えるべきだ。金日成同志は、党が平壌産院の産婦たちに蜂蜜を提供しているのはとてもいいことだとして、お喜びになっておられる。……

そしてこう強調した。

わが党は、革命の未来のためには何物をも惜しみません。

引き抜かれたコンクリート柱

蒼光（チャングァン）通り第２段階建設工事がたけなわの1985年３月15日、建設現場を訪れ、住宅建設の進行状況を確かめていた金正日総書記は、その一角に住宅団地にふさわしくない建設対象があることに注意を向け、あれは何の建物かと聞いた。

車庫だという答えに、住宅団地になんのための車庫かと反問した。すると、そうせざるを得なかった事情を説明し、車庫のまわりに高い塀を巡らす予定だから、住民の生活に大して不便をかけることはないと思われると言った。総書記は、その前に建てられた高層住宅を指して、あれは何世帯用かと尋ねた。

「800世帯です」

それなら、子どもたちが2000名を超えるだろうに、高層住宅の裏側に車庫を建てたら、子どもたちの遊び場が取れないとして、総書記はこう言った。

「屏風式高層住宅の裏側に建てている車庫の敷地には、広場を作り、子どもたちの遊び場としなければなりません」

そして、車庫を移すことに異議はないかと聞いた。一幹部が、車庫はそのまま建てて、高層住宅と車庫の間に子どもの遊び場を作ってはと答えた。

総書記は笑みをたたえて、すでに打ち込んだコンクリート柱を引き抜くのがそんなに惜しいのかと言って、こう続けた。

「屏風式高層住宅の裏側には広場を作り、公園も立派に造成して、子どもたちが表通りに出ることなく、みなそこで遊べるようにすべきです」

そしてあれやこれやと考えずに、コンクリート柱を残らず引き抜き、そこで子どもたちが思う存分遊べるよう、広場を必ず作ってあげましょう、と強調した。

非常措置

ある石山で首都建設用石材の採掘に従事していた26歳の労働者が、不慮の事故で致命傷を負った。診断は重症脳挫傷、頭蓋底骨折、気管支肺炎であった。

1988年５月１日のことで、報告を受けた金正日総書記は、即

時ヘリコプターを送るよう指示した。

ところが、重傷者を乗せたヘリが平壌（ピョンヤン）へ向かう途中、思わぬ天候の悪化で航空不能になり、不時着を余儀なくされた。総書記は、悪天候にも飛行可能な大型旅客機を急派せよと、再度指示した。

あいにくその日はメーデーで、操縦士もスチュワーデスもみな休息中であった。こうして、戦争の勃発時にのみありうる非常措置が取られた。乗組員たちは取る物も取りあえず空港に駆けつけた。

大型旅客機は離陸し、首都の病院に運び込まれた患者は、15日目に奇跡的に蘇生した。

病院責任幹部は、生き返った労働者に一枚の紙を見せた。そこにはこう書かれてあった。

親愛なる指導者同志の指示で取られた非常措置

・患者の搬送に動員された運送機材

ヘリコプター１機、大型旅客機１機、その他救急車

・患者の治療と搬送にあたった機関

端川（タンチョン）市人民病院、平壌医科大学病院（当時）

朝鮮人民軍航空区分隊、平壌民航（当時）

・患者の治療を担当した医療チームの構成

院士・教授・博士など10余名、医者・看護婦10余名

・患者の治療に投ぜられた薬品の種類

麝香、広域抗生剤など高価薬72種

・患者に輸血された血液

５・７リットル（注　成人の肉体には約５リットルの血液

が流れている）

・無料治療費総額

約15万ドル

〝水の乾杯〟

ある年の建軍節（４月25日）の夕刻。

金正日総書記は、人民軍指揮メンバーと席を共にして建軍節を祝った。そこには退院したばかりの人民武力部副部長金光鎮（キムグァンジン）将官の姿もあった。

諸将官、軍官と談話を交わしながらも、絶えず心配そうなまなざしを金光鎮に向けていた総書記は、彼を近くに呼び、治療は完全に終わったのかと聞いた。

「はい、すっかりよくなりました」

総書記は、昨日退院したばかりでまだ体調がよくなかろうと思って迷ったが、今日は軍の祝日だから、やはり呼ぶことにした、膵臓炎の治療を決しておろそかにすべきでない、とりわけ食事の調節はきわめて重要だ、米飯を少なく食べ、肉類や脂肪も少な目にし、主に野菜類を十分に摂取することだ、といたわるように言った。

総書記は、朝鮮人民軍創建記念日を慶祝して、指揮メンバーの一人ひとりに酒を注いだ。順番が巡って金光鎮が祝杯を受けることになった。

彼の顔をじっと見つめていた総書記は、あなたは酒を飲んではいけない、としてこう続けた。

「しかし、今日は軍の祝日だから、祝杯は上げるべきです。あなたにはお酒でなく、水を注いであげましょう」

座中に愉快な笑い声が波打った。

杯に水を注いで、総書記は言った。

「これはお酒ではなく水だけれど、祝杯です。健康な身体で軍務に励むことです」

総書記と在日同胞たち

1992年４月28日、金正日総書記は、金日成主席の生誕80周年を祝って祖国を訪れた総聯の活動家をはじめ、在日同胞・芸能人たちを接見した。

〝欲張り〟の総聯議長　総聯芸術団の公演を観覧した総書記は、その後彼らと席を共にした。

すばらしい公演だった、総聯には人材が多いとたたえた総書記は、一人の男性声楽家に声をかけた。

あなたは歌を上手に歌いました。さっき歌ったのは『焼き栗タリョン』でしょう。

「はい、そうです」

「ほかにもう１曲歌いましたね」

一幹部が『ニルリリタリョン』ですと代わって答えた。

そう、『ニルリリタリョン』だった。『ニルリリタリョン』も上手に歌いました。祖国にはあなたのようなすぐれた民謡歌手はいません。

総書記は韓徳銖(ハンドクス)総聯議長に向き直り、今日の公演を見ると、議長同志が逸材は一人も祖国へ送って寄こさず独り占めしているようです、だから総聯には有能な人材が多いのです、確かに議長同志は欲張りです、多くの人が帰国しているのに、こんなに才幹のある人材は手放していません、と言って豪快に笑った。議長も笑い、芸能人たちも笑った。

「乾杯！」　その日の夜、総書記は総聯の活動家をはじめ在日同胞・芸能人たちを宴に招いた。

総書記は、彼らのお祝いの言葉に、**「ありがとう、ありがとう」**といちいち答礼し、みんな健康に留意し、仕事に精励するよう励ました。

そんな時。

「将軍！」という女性たちの声が末席のあたりから上がった。総聯傘下地方歌舞団の女優たちであった。彼女たちは、遠くの離れたテーブルに着いていたので、総書記に祝杯を献じることができないのであった。

「将軍！」と、また声が上がった。

幹部たちは当惑した。座中数百人の同胞みんなが総書記に献杯するのは、無理ではないか、と。

ところが、総書記に呼び掛ける声は、全同胞女性の合唱と化した。

総書記はいぶかしげに彼女たちを眺めた。

「あの人たちは総聯の地方歌舞団員と女性同胞ですが、将軍の健康を祈って献杯したいと願っているのです」

総書記はほほえんだ。

「みなさん！　こちらへどうぞ」

彼女たちは堰を切ったように、どっと前へ走り出した。その流れは整理しようにも到底しきれなかった。総書記は構わない、いいことだ、制止する必要はない、と言った。

総書記のまわりに集まった100余名の同胞女性たちは、祝杯を高々と上げ、半ば笑顔、半ば涙顔でわれがちに挨拶した。

「将軍、わたしは大阪から参りました」

「わたしは北海道から参りました」

「千葉から参りました」

「わたしは新潟からです」

「名古屋からです」

総書記は、**「うん、そうか、そうか」「ありがとう、ありがとう」**と答え、日本の全国各地から70万名がみんな来たようなものだと言い、彼女たち一人ひとりと杯を触れ合わせた後、自分の杯を高々とかざし、力強く叫んだ。

「乾杯！」

信　頼

1998年１月の大寒を前後して慈江道（チャガン）についで両江道（リャンガン）を現地指導していた金正日総書記の胸中には、一つのわだかまりがあった。２日間の慈江道現地指導の際、ある企業に寄れなかったことが悔やまれたのである。

報告によると、その企業は生産計画を果たせなかったかどで、支配人と党書記に罰則が適用される予定だという。

総書記はそのことが気にかかり、両江道から平壌（ピョンヤン）へ直行することにしていた日程を変更して、今一度慈江道へ向かうことにした。総書記は出発を前にして、無能な子にはどの誰よりも気を使えという格言もある、だから江界（カンゲ）市へ出直して企業の党書記と支配人に会い、彼らが受けることになっている懲戒処分についても検討してみよう、と随員たちに語った。

列車を降り、企業へ向かう車の中でも、そこの幹部や労働者たちは今どんな思いをしているだろうか、みなしょげていると思うと、昨夜もなかなか寝つかれなかった、早く行って彼らの気持ちをほぐしてあげようと言い、道を急いだ。

企業の労働者や幹部たちは思いもよらなかった総書記の訪問に歓喜し、挨拶の言葉もろくに述べられなかった。

総書記は、罪の意識にさいなまれている彼らの気持ちを慰めるかのように微笑をたたえて歓呼にこたえ、そのあと構内と生産現場を見て歩き、満足げに言った。

――自動加工ラインの機械に輸入品は１台も見られない。１から100まですべて自力更生の意気込みをもって作った自分たちの物だというからすばらしい。この工場には技術神秘主義がない。輸入病にかかっている人たちが来て見たら、みんな正気に返るだろう。構内も実に清潔だ。構内が緑化されているので、工場とは思えない。金剛山（クムガン）休養所や七宝（チルボ）山の休養所より立派だ。ここに部屋の空いた宿所はないだろうか。あったら一晩泊まって行きたい。……

一言の叱責もなく、称賛だけをくりかえす総書記に、企業の責任幹部はまごまごし、おそるおそる言った。

「将軍、わたくしどもがふがいないばかりに、いまだに生産の正常化を果たせず大きな罪を犯しました」

総書記は大様に笑い、計画を達成できなかったのは企業の責任だけではない、資材をきちんと供給されていなかったことにも問題がある、今後大いに奮発して頑張ればいい、と力づけて、その肩をやさしく叩いた。

彼はしゃくりあげ、肩を震わせた。

総書記は、なんたることだ、屈強な労働者階級が泣いたりなんかして、今後はわたしが責任を持って資材を確保し、ネックの解消にも努めるから、大いに生産に励むようにと、激励した。

総書記はそのあと、企業内に設けてある生産品展示場を見た。児童用玩具陳列台の前で、総書記は小さなピストルに目を止めた。ウサギの絵入りのこのピストルは、引き金を引くと、「ポーン」と音を立て、紙弾丸が飛び出す仕掛けになっていた。

総書記は、これはわたしが見本に送った物を真似て作ったピストルではないか、と聞いた。

「そうです、将軍」

そんなピストルの一つを取ってためつすがめつ眺めていた総書記が、不意にかたわらの随員の横腹に銃口を向けて引き金を引き、「パーン」と叫んだ。「ポーン」という音と共に紙弾丸が飛び出した。彼はわっと悲鳴を上げた。どっと爆笑が沸いた。

今一挺のピストルをつかんだ総書記は、もう一人の随員の横腹に突き付け、「パーン」と叫んで、また引き金を引いた。あっと驚く随員。またも起こる爆笑。……

生産計画の未達成で意気消沈していた企業の幹部たちも腹をかかえて笑った。

かなり時間が流れた。随員たちはいらいらと時計をのぞき、もう出掛けなければ、と注意した。

この時、先ほどから何か言いたげにもじもじしていた企業の一幹部が一歩踏み出し、思い切ったように口を開いた。

「将軍、将軍のお言葉通り、必ず生産計画を超過遂行致します。つきましては……」

彼は、次の言葉をあえて言い出せずに呑み込んでしまった。総書記と並んで写真を撮りたかったのである。

総書記は大きく笑った。

「わたしは、計画を達成できなかった人たちと一緒に写真を撮るようなことをしません。しかし、今年は……計画をきっと遂行するものと信じて、記念写真を撮ることにしましょう」

いわれの深い釣り竿

1967年夏のある日、金正日総書記は某海岸砲兵中隊を視察した。

その日、海上に出る総書記を乗せた小舟の櫓を取った兵士は、ふと、舟の上に置かれてある釣り竿に目を止めた。海辺の村に生まれ育った彼は釣りの名手であった。総書記の釣り竿に心を奪われていた兵士は、舟がある岸の曲り角の前でしばらく停止した際、そっと手を触れてみた。彼は自分のそんな行為を総書記に見られたことに気づかなかった。

それから30年余の歳月が流れた今、彼は当地革命事績館の館長を務めていた。

1998年３月10日、事績館を訪れた総書記は、一目で彼を見分けた。

数十年ぶりにここへ来て感慨が深い、あの日、中隊砲陣地視察のため、小舟に揺られながら海上に出ていた時、櫓を漕いだ社会主義労働青年同盟初級団体委員長は上等兵だったが、今は上佐の階級章を付けて革命事績館館長を務めている、屈強な気力にあふれた館長に会えて本当にうれしい、と言って、元兵士と肩を並べて写真を撮った。

その後総書記は随員に、用意してきた釣り竿を持って来るよう指示した。そしてあの時館長は櫓を漕ぎながら、わたしの釣り竿を羨ましそうに見ていた、それで今日、釣り竿を持って来たのだと説明し、館長を振り向いた。

「何年も前から釣り竿を持って来てあげようと思いながらも

時間が許さず、今日やっと念願を果たせました」

館長の目が涙でかすんだ。

「さあ、お受けなさい」

館長はうなだれ、肩を震わせた。

「どうしたのです。この喜ばしい日に涙を流したりなんかして」

総書記は館長の肩に手を置いた。

「今後とも誠実に働くのです。誠実にね」

「最高司令官同志、わたくしは一生……忠実に働きます。……なにとぞお体にお気をつけなさって……」

涙に頬を濡らしながら、切れ切れに言葉をつぐ館長。

「ありがとう。軍隊に長く服務するのです。健康な体で長く務めなければなりません」

「最高司令官同志、本当にありがとうございます」

「さあ、その手をいま一度取ってみましょう」

例のない勤務交替

1998年５月４日の昼時、ある最前線高地の陣地では、交替時間でもない不時に、歩哨勤務の交替が行われた。

そこには、次のような訳があった。

朝から最前線高地を視察していた金正日総書記は、昼時、軍人たちと記念撮影をする時間だと告げられた。それには答えず、延々と続く前線の山並みを黙然と見渡していた総書記はやがて、

あの高地にどの区分隊が配されているのか、と聞いた。

指揮官が、高地の各区分隊名と衛所の配置状況を説明した。

時間が許せば、高地で任務遂行中の将兵たちの衛所を残らず見たいが、そうできないのが残念だと言って、ちょっと考えていた総書記は、随行した将官たちを振り返った。

……諸君が兵士たちと勤務を交替し、高地の哨兵をみなここへ寄こすのです。最高司令官が最前線高地を視察しながらも、戦闘任務遂行中の兵士たちに会わずに帰ればどんなに残念がるでしょう。

軍人たち全員を呼んで会い、記念写真を一緒に撮ることにしましょう。

「えっ、哨兵を残らず呼ぶのですか」

総書記は軽くうなずき、時間が少しかかるだろうが軍人を残らず呼んで記念撮影をしよう、といま一度言った。

指揮官が一歩進み出た。

「最高司令官同志、本当にありがとうございます。わが部隊の全将兵は、寝ても覚めても将軍を慕い、この瞬間をいちずに待っておりました」

わたしも最前線陣地の軍人たちに会いたく思っていました。諸君が最高司令官を慕っているように、わたしも陣地の兵士たちに会いたかったのです。当高地のすべての衛所を見たいのがわたしの心情です。

兵士たちが立つ高地の衛所へ交替に向かう将官たちと彼らに衛所を任せて走って来る兵士たち。……

総書記は、哨兵たちを喜んで迎えた。

「元気でしたか。みなさんに会いたくてやって来ました」

兵士の側だ！

1998年５月10日、某軍官学校へ出掛けて学生たちの訓練を指導した後、金正日総書記は同校体育館で行われた兵士対軍官バスケットボールの試合を観戦した。

総書記は、プレーヤーたちのパスやドリブルなどスピーディーな動きに見入り、なかなか見応えがあると称賛した。

赤組の兵士チーム、ゼッケン６の選手が、最初のスリーポイントゴールをものの見事にあげた。

「バスケットボールでは、３点ゴールが一番だ」

総書記は喜んで真っ先に拍手を送り、兵士チームがスリーポイントゴールをあげるたびに、また成功だと言い、拍手を惜しまなかった。

時間が流れ、試合は終わった。総書記は審判を呼び、結果を尋ねた。

「17対26です」

「どちらが勝ったのかね」

「……」

審判は知らずに聞いたわけではなかろうにと首をかしげ、ためらいがちに軍官チームですと答えた。総書記は、赤組の方がもっと

よくやっていたようだったがなあ、と言って豪快に笑った。どっと爆笑が起きた。

試合には負けたが、兵士チームのプレーヤーたちは肩をそびやかした。

「将軍はいつもわれわれ兵士の側だ！」

「早く発とう」

1999年５月31日の正午近く、金正日総書記は峻嶺を越えて某中隊の野外練兵場を訪れた。

中隊の訓練状況を確かめた後、総書記は練兵場の一隅に設けられた野外食堂へ足を運んだ。

調理台一杯に置かれたさまざまの副食物を注意深く見た後、総書記は、熱い湯気をもうもうと立てている移動炊事車に近づいた。

「わが戦士たちが何を煮て食べるのか、ちょっと見てみよう」

総書記は炊事車の上へひょいと上がり、釜の蓋をいちいち開けては中をのぞいて見た。

車を降りた総書記は、一行を見回して言った。

――野外における訓練では、他の時よりも温かい食事を腹一杯食べさせることだ。野外で訓練すると、いつもより空腹を強く覚えるだろうから、量を増やしてたっぷり食べさせ、また、食事の時間を遅らせないようにすることが大事だ。兵士たちが空腹を覚えることがないように米と副食品を十分に用意しておき、炊事に

手間が掛からないようにすることだ。……

総書記は時計を見た。

「兵士たちの食事の時間だ。ぐずぐずしないで早く発とう」

「最高司令官同志！……」

誰だか喉を詰まらせて叫んだ。四方で嗚咽の声がした。

総書記は、兵士たちの食事を遅らせてはいけない、早々発とうと今一度促して、車に乗った。

除隊軍人家庭を訪問

1999年８月10日、大紅丹（テホンダン）郡総合農場を訪れた金正日総書記は、わが除隊軍人たちがどのように暮らしているか、様子を見てみようと言って、一除隊軍人の家庭を訪問した。周辺の風致と調和した２階建てのしゃれた家であった。

「お元気ですか。新宅の見物をしたくて参りました」

除隊軍人夫婦に丁寧に挨拶して中へ入った総書記は、どの部隊に服務したのか、故郷はどこか、分場ではどんな仕事をしているのか、と聞いた。

夫は海軍に務め、妻は海辺都市の生まれだという。

総書記は１階の部屋を見、台所では食器戸棚を開けて見もして、２階へ上がり、夫婦の寝室へ入った。壁には勲章や軍功メダルを付けた海兵服と軍帽が掛かっていた。

「勲章などたくさん貰いましたね」

総書記は、軍服の前に立って勲章やメダルをなで、彼が軍隊に服務中ある大会に参加し、金日成主席と一緒に撮った記念写真が壁に掛かっているのを見て、君はどの位置に立っているのかと聞いた。

「ここです」という答えにうなずき、君は海軍に長年服務して実に多くの勲功を立てた、その間誠実に生活したようだとたたえた。総書記はベッドに腰を下ろし、もう子供ができてもいいはずなのに、そのきざしはないのかね、と聞いた。

夫はにこっとし、妻は顔を赤らめた。

除隊兵士は、寝具や婚礼衣装を将軍から贈られ、外出着を５着も頂きました、と申し上げた。

総書記は、それはよかった、こんな立派な家に住んでいるのだから、建物にふさわしい高級テレビや家具調度をもっと贈ることにしよう、わが除隊軍人たちは昨日は祖国防衛の持ち場で輝かしい勲功を立て、今日は農業戦線でわが党の意図を花咲かせるべく献身奮闘している真の革命家、熱烈な愛国者だ、できることなら大紅丹の全除隊軍人に会ってみたいが、時間の都合をつけられないから、わたしに代わって全除隊軍人に挨拶を伝えて欲しい、除隊軍人たちは兵士時代のように革命的軍人精神を大いに発揮して、農作業や生活の面で手本を示し、人びとを先頭に立って導かなければならない、と激励した。

若い夫婦は、よく分かりましたと答え、こもごも語った。

「非常に遠い地なので、将軍からは婚礼の大膳を頂き、新宅と新しい衣服、家具調度などまで贈られていながらも、親たちはま

だここへ来れないでいます。それにもかかわらず、今日、将軍が先にわが家にお見えになりました」

「父なる将軍、本当にありがとうございます」

総書記は笑って答えた。

「そう、そりゃわたしが真っ先に訪ねて来なくちゃ、君たちの御両親に代わってね」

叶えられなかった願望

1999年12月5日、金正日総書記は、某人民軍部隊駐屯地に養魚場が新設されたという報告を受けて、現地へおもむいた。

以前は使い物にならないとして見捨てられていた沼沢地が、立派な養魚場に変貌していた。

総書記は、**「養魚場の面積はどれほどですか」**と聞いてその答えにすこぶる満足した。養魚場の中ほどにある島に立って、成魚池、幼魚池、ナマズ池の配置状況、それに養魚場一帯の地形と生産能力、建設状況などについての説明を詳しく受けた総書記は、すべてが不足し、困難を極めている時に、自力で40日という短期間に種魚システムまで備えた近代的養魚場を造成したのは奇跡に等しい、このような奇跡は、党の指示とあらば水火をいとわず奮闘し、山を崩し海をも埋める朝鮮人民軍将兵だけが生み出せる、と高く評価した。

勢い込んだ部隊の指揮官は、当養魚場の真価を味わえるのはこ

の腕ほどもの魚の群れがひしめく網を引き揚げる時の光景ではなかろうかと考え、総書記に、既に魚網を用意しておきました、投網を引き揚げるのには５分しか掛かりません、と言った。魚がいっぱい入った網を引き上げる光景を総書記にお見せしたいというのは指揮官と兵士たちの切なる願望であった。彼が魚網の置かれている方へ走って行こうとした時、**「いや、いけません」**と制する総書記の声が耳朶を打った。指揮官は足を止め、けげんそうに振り向いた。

「この寒い日に、軍人たちに魚網を引かせてはなりません」

一番うれしい知らせ

「昨年、ニジマスの漁獲量はどれほどでしたか」

2001年４月19日、「苦難の行軍」時に作られた某養魚場を視察した金正日総書記の質問であった。

返答は思わしいものでなかった。漁獲量が高くなかったのである。ニジマスは良質の飼料を要求する高級魚族で、それにかける費用は並大抵でなく、そのためにわずかばかり捕れたニジマスをホテルに売って得た外貨で飼料を求めるという有様だったのである。

「ホテルへ売っているとね……」

総書記は残念そうにつぶやいた。

「将軍、来年からはニジマスの漁獲量を高めて、人民に供給し

ます」

申しわけなさそうに決意を述べる幹部に、きっとそうするべきだ、ホテルには決して売ってはならない、みなさんがニジマス100トンを生産するというなら、必要な飼料はわたしが提供しよう、一匹もほかへ売らず、みんな人民に供給するのだ、と今一度強調した。

この時、一幹部が思い出したように、実は、今世紀に入って最初に迎えた太陽節（金日成主席の誕生日、４月15日）に際して、人民にニジマスを幾らか供給したところ、将軍のおかげでニジマスを味わえたという反響がおきていると報告した。

総書記は**「ニジマスを人民に供給したというのですね！」**と重ねて言い、それは本当によかった、これまで聞いたうちで一番うれしい知らせだと満足に笑みを浮かべた。

「晩は怖いだろう」

2001年５月23日、金正日総書記は、咸鏡（ハムギョン）南道新興（シンフン）地区革命戦跡地の白亜山（ペクヨクサン）密営を訪れた。標高1500メートル余の、烈風すさぶ山頂に登り、密営に向かって歩みを移しながら、若い女性講師（解説員）にどの学校を出たのかと尋ねた。彼女の答えにうなずき、まわりの山々を見回していた総書記は聞いた。

「こんな深い山の中で過ごして、怖くないかね」

「怖くありません」

「そうかい」

微笑を含んだまなざしを彼女に向けた総書記は、真剣に聞き直した。

「正直に答えてごらん。晩は怖いだろう」

「怖くありません」

講師はうなじをやや垂れ、消え入るような声で答えた。

その口ぶりから彼女の気持ちを察した総書記は、ここは深い山の中で、若い女性が、夜、戸外に出る時、どうして怖くなかろうか、このような山地には猛獣が出没しないとも限らないから、しっかり対策を立てなければならない、と強調し、ここには電気が入っているのか、講師たちはテレビを見ているのかと尋ねた。まだ電気を引いていないという返答に、それなら夜電灯が点かず、テレビも見られない、と声を曇らせた。

郡の責任幹部が、電気を入れるため、今密営の近くに小型水力発電所を建設中だと報告した。

この一帯の年間降水量はどれくらいかと聞き返した総書記は、小型水力発電所が出来ても、水量が少ないだろうから電気の生産は思わしくないはずだ、こんな所では風力発電機を設ける方が合理的だと指摘した。そして、深い山中で生活する講師や管理員の生活条件をあなたたちが保障すべきで、誰が代わってやってくれるだろうか、早く電気問題を解決し、生活物資の供給システムも改善しなければならない、とねんごろに説いた。

にわかに丈が伸びた分場長

咸興(ハムフン)市青年ヤギ牧場咸興農場分場長の妻は、夫の背が低いことで、いつもぼやいていた。

2001年５月24日、咸興市青年ヤギ牧場を現地指導した金正日総書記は、分場長の家庭を訪問した。

年は幾つか、どの学校を出たのかと質問し、**「咸興農場分場長が咸興農業大学獣医畜産学部を出て、党の畜産政策貫徹に寄与したいという抱負のもと夫人ともども当農場を志願したのは奇特なことです」**とたたえた総書記は、話題を変え、年が36にもなるのに、どうして背が低いのか、病気はしていないのかと気づかわしげに聞いた。

「体に別状はありません、将軍」

咸鏡南道の責任幹部が一言口をはさんだ。

「分場長の母親が年子ばかり産み、分場長は小さい時、母乳を十分に飲めなかったせいで、大きくなれなかったらしいです」

健康だというから気にすることはない、ヤギ乳をたくさん飲んで体をしっかり鍛えることだと、笑って慰め、やがて外へ出た総書記は、君たちがヤギの世話で苦労している、会った記念に一緒に写真を撮ろうと言った。

分場長は総書記の右側に、妻は左側に、男の子は前に立った。

カメラマンがシャッターを切ろうとした時、総書記は**「ちょっと」**と言って、左右の夫婦を交互に見た。

みな、どうしたのかと思っていると、総書記は、やや低くなっている地面に立った背の低い夫を左側の少し高い所へ、背の高い妻を右側の低い所に替わり合って立てた。すると一方に傾斜していた構図に安定感が生じた。背の低い分場長がにわかに大きくなり、貫禄がついたのである。

その後の新聞に載った写真を見て、大学の同窓生たちはこんなことを言い合った。

「あのちびっ子がいつこんなに大きくなったのだ」

「この男、ヤギ牧場を志願して行って、バターやチーズばかりなめてるんだろう」

彼らより気持ちがはずんだのは、妻だった。

（将軍のおかげであの人、背の高い人間として世に知られることになった！）

それ以来、妻の口から背が低いとこぼす愚痴は聞かれなくなった。

生みの親の心情

2001年９月18日、金正日総書記は某人民軍部隊を視察した。

「早く蓋をしなさい」　部隊内の処々を見て歩いた総書記は、給養活動に要する一切の施設を自力で立派に調えたことをたたえた。

調理室で、給養担当幹部が配膳口のかたわらにあるアイスクリ

ーム容器の蓋を開けた。

「最高司令官同志、部隊で作ったアイスクリームです」

総書記は感心して、アイスクリームを自分たちの手で作っているのかと聞いた。

「はい、わが部隊は毎日、軍人たちに各300グラムを供給しています」

「豆乳で作るのかね」

部隊が飼っているヤギの乳で作っているという返答に総書記は、部隊がアイスクリームを自製して軍人たちに供給するのはたやすいことでない、大したことだ、と言ってほほえんだ。

給養担当幹部は望外の称賛にぼうっとなり、容器の蓋をすることを忘れていた。総書記は、蓋をしないとアイスクリームがとけると言い、**「早く蓋をしなさい」**と注意した。彼はあわてて蓋をして、総書記の後を追った。

ところが、数歩歩いた総書記が急にアイスクリーム容器の方に引き返した。

一同のいぶかしげな視線を浴びながら、総書記は容器の蓋をきちんとした。

極冷凍室の温度　総書記は、部隊が自前で建設した坑道式冷蔵庫を見た。

指揮官が、ここには極冷凍室もあるとして、扉を開けた。室内をのぞいた総書記は、振り向いて聞いた。

「ここは温度が何度ほどかね」

「え……」

思いがけない質問に、彼はわれ知らず、答えにならない〝答え〟をした。総書記は、一行を振り返って、今一度尋ねた。

「温度がどれほどだと思うかね」

答える者がなかった。一指揮官が面目なげに言った。

「最高司令官同志、まだ室温を計っておりません」

総書記は、**「零下15度ほどだろうか」**とつぶやいて霜の張った室内に踏み入り、おぼつかなさそうに中の様子をうかがった。

「どうもよくない。こんな室温で肉類が何日持つでしょうか。肉の乾く程度を確かめたら、それが分かるのです」

こう言った総書記は冷凍肉に近づき、指で押さえてみた。

「肉類は本来、零下25度ないし零下30度でないと完全には冷凍しません」

零下15度で肉にこれほどの水分が感じられるなら、１、２カ月もすれば変質するだろうとして、総書記は肉類が変質しないように保管する方法を詳しく教えた。

極冷凍室を出た総書記は、一行を見回して言った。

「この極冷凍室の温度は零下15五度にしかなりません」

（？……）

総書記を送り出した後、極冷凍室の温度を計ってみた指揮官たちは、目を丸くした。温度計は確かに零下15度を指しているのである。

旋盤工の囁き

2001年12月21日の夕方、金正日総書記は、幹部たちを前にして、ある工場でのことを回顧した。

……総書記は労働者たちの働く様子を見ながらゆっくり歩みを移していた。

その時、20歳前後の若い旋盤工が機械を止めて総書記の前へ近寄り、ぴょこんと頭を下げた。その突拍子もない行為に、人びとはあわてた。それに、挨拶してそのまま帰ると思った若者が、目に涙をたたえてさらに一歩踏み出し、総書記の耳に口を寄せて小声で何かを話し出した。

総書記は腰をかがめ、機械の騒音でよく聞き取れない声に耳をそばだててほほえんだ。

一人の幹部が若者を制止しようと前へ出ると、総書記は、近づくなと手で制して青年旋盤工の話を最後まで聞いた。そして緊張している幹部たちに向き直って、この青年がわたしに感謝したのだ、と笑って言った。

一同のけげんな表情は消えなかった。

作業場をすべて見終えて外へ出た総書記は、彼らを見回して言った。

――さっきあの青年はわたしに何と言ったと思う。実にけなげな青年だ。当節手に入れがたい鶏肉と鶏卵を贈ってくれてありが

たいと言ったのだ。なかなか奇特な青年だ。

今、養鶏場で生産された鶏肉と卵の供給を受けた人民の反響は大変なものだ。

機械工場などへ行くと、どこでも最初の挨拶が、鶏肉と卵を贈って下さってうれしいという言葉だ。とりわけ労働者たちの喜びは大きい。……

話を終えた総書記はこう続けた。

「わたしはそんなにも喜ぶ労働者たちの様子を知って、彼らのために養鶏場を作ってよかった、苦労した甲斐があると考え、人民のために働く誇り、矜持を覚えました。わたしは人民が喜べばそれ以上に望むことはありません。人民の享受する幸せと喜びの中にわたしの幸せと喜びがあるのです。いろいろの部門を現地指導していて、今度のように気分がよかったのは初めてです。近頃は徹夜して働いても疲労を覚えないばかりか、むしろ力が沸くようです」

「歯がみな折れてしまうだろう」

2002年２月23日、大紅丹（テホンダン）ジャガイモ加工工場の新設飴職場を視察した時のこと。

固飴作業班の包装工程を見ていた金正日総書記は、包装工程に手労働が多い、今は飲食物の加工中それらに一切手を触れないのが世界の趨勢だ、食品の生産では手労働を決定的になくさなけ

ればならない、と指摘して、包装された飴包みを一つ手に取り、重さをおし量った。１キロの包みで、包装はあまり見栄えがしなかった。

「飴はどれも１キロずつ包装しているのかね」

「そうです」

「どうしてだね」

「世帯別供給が目的で、そうしています」

総書記は、この飴包みは幼児にも与えられることを考慮しなかったようだ、と言った。

工場の幹部は意味を取りかねて、黙っていた。

総書記は、飴は大人よりも子どもたちにもっと喜ばれている、にもかかわらずこんなに大きく包装して子どもたちに与えたらどうなるだろうかと言い、続けてこう語った。

「子どもたちがこれを全部食べたらきっと歯がみな折れてしまうだろう」

総書記は、何事をするにせよ、具体的でなければならない、飴は250グラムと500グラムに分けて包装するべきだ、と教えた。

すすがれた〝汚名〟

金正日総書記が人民軍の某女性中隊を視察した2002年３月１日のこと。

女性軍人たちの歓呼に答礼した総書記は、彼女たち一人ひとり

に目をこらし、みんな丈夫な体をしている、と満足した。

「軍官たちの体格がとりわけいい」

総書記は一部の女性軍人は体ががっしりしていて軍服がはち切れそうだ、と言って豪快に笑った。

総書記は中隊の訓練を見て、なかなかよくやる、と何度もたたえ、女性軍人は元来沈着だから、男性軍人より射撃術がすぐれるはずだ、と言って喜んだ。

中隊の学習室と寝室を見、新聞はどこから受けているのか、テレビは毎日見るのか、部屋は寒くないか、とこまごま尋ねていた総書記は、突然話題を変えた。

「兵士たちより軍官の方が体格がいいが、その訳は何だろうか」

「はい……それは……」

思いがけない質問に、女性中隊長はまごまごして、語を続けなかった。

総書記は今１人の指揮官にも同じ質問をしたが、彼女も答えられなかった。

１人の上級指揮官が、笑いを噛み殺しながら言った。

「どうも彼女たちは食事を別に取り、ピジ（ふやかした大豆を挽いて肉や野菜を加えて煮たもの）はお代わりまでしているに違いありません」

兵舎内に笑い声が上がった。女性軍官たちは顔を赤らめ、中隊長が腹立たしそうに一歩踏み出した。

「そうじゃありません。わたくしたちは……兵士たちと全く同じ食事を取っています」

中隊長の甘えるような〝抗弁〟に、また爆笑が沸いた。

みんなと一緒に笑っていた総書記は、彼女の肩を叩いて言った。

「おそらく、肉体的準備のよい女兵士たちの中から選ばれて軍官になったことと関わっているのだろう」

松岩洞窟の女性講師

松岩(ソンアム)洞窟は、1990年代中頃の「苦難の行軍」時、その一帯を現地指導していた金正日総書記があたりの山勢を注意深く眺め、地下に鐘乳洞がありそうだから調査するよう指示し、その結果発見されたものであった。

2002年４月19日、軍隊の手で松岩洞窟が発掘・整理されたという報告を受けた総書記は、現地を視察した。

花は真っ盛り　総書記に従って鐘乳洞を見て歩く幹部たちは、地下宮殿のあまりにも玄妙な様態に、さかんに嘆声を発した。

武陵桃源と名付けられた所に来た時、講師（解説員）は総書記に「ここを武陵桃源と呼んでいます」と紹介した。

総書記はこっくりして、天井を見上げた。天井一面に満開した大小の石の花は、あたかも朝露を含んだバラの花のようである。

「将軍、ここをうたった詩一首があります。わたくしが詠んでみます」

総書記は快くうなずいた。

赤子のような花は　大きくなろうと真っ盛り
姉様のような花は　咲きほころうと真っ盛り
母様のような花は　笑いかけようと真っ盛り
婆様のような花は　今もう散ろうと真っ盛り

総書記は愉快に笑い、詩がなかなかいい、誰が作ったのか、うまいものだと言った。

長いこと洞内を見て回った総書記は、好条件のもとで石の花は年に１ミリ程度成長するということだが、それは正しい見解ではなさそうだ、実際にどう大きくなり、どんなふうに成長するかを観察・研究し、科学的解明をなすべきだ、科学的研究を深めて、このような地下宮殿を実現させた石の花の風景がどのようにして生まれ、成長するか見物人たちに教えるべきだとし、名所の名に政治的表現のなされているものがあるが、そうしてはいけない、照明もカラー照明をするべきでなく、白色光灯を使って天然そのままの色を出し、洞窟本来の様相をはっきりと見られるようにするとよい、それに、鐘乳石や石筍ごとにいちいち名称を付けて説明するようなことは控え、見物人たちが自分なりに想像し名付けて楽しむようにするといいのではなかろうか、と助言もした。

総書記は、天井にぶらさがっている石筍のガチョウを見て、

「地下金剛（クムガン）の八潭で水浴びしている天女たちの様子をこっそり見ようと、逆さまに取り付いているあのガチョウは、どう見ても本物だ」

と声を立てて笑い、頭部に目まである、と感嘆した。

洞内は朗らかな笑いに包まれた。

娘のおのろけ　この日、総書記を案内・解説した講師は未婚の若い女性であった。

総書記は尋ねた。今何歳か、恋人はいるのか。

「27歳です。それから恋人は……」

彼女は顔を赤らめた。総書記はほほえみ、返答を促した。娘は思い切ったように話し始めた。

……最高司令官同志の命令で人民軍軍人たちが松岩洞窟の開発工事に着工したのは、「苦難の行軍」、強行軍の時期であった。軍人たちは食糧不足で空腹を余儀なくされながらも、命令の貫徹をはかり、夜に日をついで工事を進めた。

講師たちも彼らに協力して働き、空腹に耐えながら奮闘する軍人たちの姿に深く感動した。

ある日、彼女は自宅のトウモロコシを炒って持って来て、軍人たちに一握りずつ分け与えた。ところが、最後の一人を残して炒りトウモロコシは底をついてしまった。

（あ、どうしようかしら）

彼女は、配給に漏れた軍人が若い新兵ならどうしたものかと案じながら、肩章を見ると、幸いにも士官（下士官）だったので、やれやれと思った。古参兵ならば十分に理解してもらえるだろうからである。

「本当にすみません。今日トウモロコシをあげられなかった罪

滅しは、きっと何倍もします。信じて下さいね」

士官はにこっとした。

「今日炒りトウモロコシをもらえなかった代償はきっとさせる。君が今言った言葉は決して忘れず、きちっと覚えておくからな」

２人の間にはこうして愛が芽生え、開発なった鐘乳洞を将軍にお見せしたあと結婚しようと、約束するまでになった。……

総書記は、松岩洞窟と共に花咲いた愛だからいっそう美しく貴い、誇るに足るものだ、君と君の恋人は、党と祖国を支え守る道で、先軍時代の若い男女の高尚な内面世界を見せてくれた、とこうたたえた。

「君は先軍時代に青春の美しい愛を花咲かせた幸せな女性だ」

そのしばらく後、女性講師と昨日の士官は、総書記から贈られた祝膳を前に、人びとに祝福されながら式を挙げた。

表彰観覧

2002年６月５日、検徳（コムドク）鉱山を現地指導した金正日総書記は、クムコル分鉱山４・５坑採鉱第３小隊員たちと座を共にした。

40余年前、金日成主席が当鉱山を現地指導した年に生まれた鉱夫たちで組まれた小隊は、それまで６名の労働英雄を生み、毎年変わりなく生産計画を超過遂行していることで、全国に名を知られていた。

総書記は一同を見回して、君たちはもうみな41歳だから、鉱山のれっきとした主人、中核に成長したわけだ、君たちはわが党の中核であり、鉱山の柱だ、小隊英雄鉱夫の子たちが革命学院で勉強しているというから、喜ばしいことだ、と言った。

鉱山の一幹部が、この小隊員たちは鉱石の増産をめざして、切羽を離れず、休憩もろくに取らずに働くので、ひどくてこずったものです、と言った。

総書記は、鉱夫たちが切羽で寝起きして働くのを2度と許してはならない、と強くたしなめた。27年前、粗末なハギ編みのヘルメットをかぶって岩水のしたたり落ちるここ４・５坑の奥深い切羽に入り、鉱夫たちを大切にするようねんごろに強調したその日のことが記憶によみがえった。

総書記は、鉱夫たちは作業終了後坑外に出て、家族ともども文化生活を楽しまないといけない、新しい先進科学技術を積極的に導入して、楽に働きながらも生産を高めるべきだとした後、忠実に働く英雄鉱夫たちと一緒に公演を見ようと言い、鉱山機動芸能宣伝隊の公演を観覧した。

公演終了後、外へ向かっていた総書記はつと歩みを止めた。

「４・５坑採鉱第３小隊員たちをわたしの名で招待し、平壌（ピョンヤン）で催される大マスゲームと芸術公演『アリラン』を観覧させましょう。これは表彰観覧です」

こうして鉱夫たちは一家揃って平壌見学の途についた。

彼らは、「金日成賞」受賞作品・大マスゲームと芸術公演『アリラン』を観覧し、首都の名だたるホテルや料理店で盛大なサー

ビスを受け、市内の名所巡りもしながら楽しい日々を送った。

「あまりにすばらしくてね」

2002年10月18日、某女性中隊を訪れた金正日総書記は、視察後、中隊のサークル公演を観覧した。

万歳を連呼する女性軍人たちに手を振って答礼した総書記は、**「お座りなさい。座るのです。早く公演を見ましょう」**と言って椅子に腰をおろした。

公演を観覧しながら総書記は言った。

「女性軍人たちの兵士の舞踊は実に興味深く、見ごたえがあります。訓練と軍務生活の誇らしい兵士時代がリアルに形象化されています。わが兵士たちはなかなか楽天的です」

語り劇『懐かしき将軍はいずこに』が上演された。この作品は、数年前、中隊であった実話に基づいて作られたものであった。

総書記は、軍人たちの気高い内面世界を赤裸々に見せる劇に見入り、ハンカチで目じりを押さえた。

「内容がよく、形象も立派で、涙が出ます。中隊軍人のサークル公演は実にすばらしいです。

なんというすばらしさでしょう。興味深く見ました。

最近幾つもの部門を続けて視察し、ちょっと疲れていたが、このサークル公演を見て、疲労がすっかり取れるようです。気持ちがぐんと引き締まります」

公演後、外へ出た総書記は、中隊長と中隊政治指導員に笑顔を

向けた。

「君たちは田舎に閉じこもって、サークル活動ばかりやってるんじゃないのかね」

「いいえ、そんなことありません。訓練もし、副業もし、何でもしています」

「あまりにすばらしくてね。

サークルの形象化水準が高い。実に立派だ」

随員の一人が、女性軍人たちがかかとを鳴らしながらリズミカルに歌い踊る場面は本当に見ものでしたと言った。総書記はうなずいた。

「これまでに見た中隊サークル公演のうち一等すぐれているようです。

この中隊の生活状況を見ると、暮らしにばかり力を入れているように思え、サークル公演を見ると、サークル活動ばかりしているように思えます」

「気の置けない友人だと考えればいい」

2003年７月21日、ある通信兵区分隊を視察した金正日総書記は、無線講習室に入り、一番前の机に向かって座っている兵士に、にこやかに声をかけた。

「年は幾つだね」

「20歳です」

「身長は？」

「20歳です」

「いや、身長は幾らかね」

「１メートル80センチです」

「１メートル80センチ？　わたしには１メートル70センチほどにしか見えないがね」

指揮官たちは唖然とした。一指揮官が、この兵士はまごついて、返事をまっとうにできないようです、と口を添えた。総書記は笑って、兵士の肩を叩いた。

「うろたえないで落ち着くことだ。わたしをただ気の置けない友人だと考えればいい。最高司令官だって決して変わった人間じゃない」

のぼせていた兵士は、ようやく気を取り直した。顔色が明るくなった。

「最高司令官も人民の中から生まれ、兵士たちと苦楽を共にする人間だ。わたしは兵士たちといささかの間隙も置いていない。彼らがわたしにこっそり話すことにも耳を傾けている」

こう言って、総書記は再び尋ねた。

「身長が幾らだと？」

兵士は、今度はきびきびと正確に答えた。

「故郷はどこかね」

「黄海北道黄州郡黒橋里（ファンヘ ファンジュ フクキョ）です」

「うん、黄州だとね。御両親にはお変わりなかろうね」

「はい、みんな達者です」

「国元へ手紙を出しているだろうね」

「はい、しょっちゅう出しています」

「部隊の消息を終始伝えるんだよ」

「分かりました。敬愛する最高司令官同志」

最初の態度とうって変わって、こだわりなく元気に答える兵士の様子に、総書記は満足げにほほえみ、無線講習室を出た。

「見なくてもいい」

2003年12月12日、某人民軍区分隊を視察した金正日総書記は、区分隊が戦闘力の強化に力を入れて大きな成果を挙げており、軍人たちの食生活も豊かになされていることを知って大いに満足した。部隊の指揮官が総書記に言った。

「最高司令官同志、次の間は豆もやしの栽培場です」

彼の言葉には、寒さのきびしいこんな冬にももやしを作り、兵士たちに喜ばれていることを誇る気持ちがこもっていた。

ところが、軍人の食生活問題に関わることでは一つとして無心に対することのない総書記が、なぜかかぶりを振った。

「いやいや、もやしの栽培場は見なくてもいい」

みなけげんそうに顔を見合わせた。

総書記はそんな彼らに笑顔を向け、こう言った。

――ある部隊を視察した際、もやしの色が一様でないので、どうした訳かと尋ねたところ、人びとが栽培場に必要以上に出入り

し、そのたびに日光が射して変色したとのことだった。われわれのせいで中隊の軍人たちが日光に照らされたもやしを食べることになっては困る。……

その数日前、某区分隊を視察した際、総書記は、もやし栽培室の前で歩みを止めた。もやしの色が青いので不審に思ったのである。指揮官の弁明を聞いて、総書記は言った。

「豆もやしの栽培室へはみだりに出入りしない方がいいようです。もやしの栽培室に人びとが終始出入りすると、もやしが日光に当たって青くなり、味が落ちます」

国宝を授かった画家

2004年１月13日、人民軍某部隊を訪れた金正日総書記は、軍人会館に立ち寄った。

ホールと廊下の壁には、軍人の政治思想教育用の視覚宣伝物が掲示されていた。それらを注意深く見て歩いていた総書記は、『銃と共に青春時代を輝かそう！』と書かれた掛け軸の前で立ち止まった。

祖国防衛の気概がこもっているかのような書に見入っていた総書記は、名筆だ、五番目の〝青〟の字はとりわけ魅力があると言い、続けて**「あの〝青〟の字は、あたかも中に龍が伏せているかのように、力にあふれています」**とたたえ、誰の作かと聞いた。

本部隊所属の上級画家だという答えに、画家の腕前が一通りでない、今日この部隊でレベルの高い書家をいま一人見つけることができて本当にうれしいと言い、再び書に見入った。

「……部隊の上級画家のすぐれた作を表彰して、金日成同志がご愛用されていた筆墨一式を贈ることにしましょう」

人びとは驚いた。

金日成主席が書をたしなんでいることを知って、外国の人士たちの中には筆墨の贈り物をする例が多かった。主席は生前、多くの贈呈品はほとんど国際親善展覧館に送り、一部は幹部たちに惜しげなく与えもしたが、筆墨だけはすべて所蔵し、愛用した。

総書記は一幹部に、金日成同志が使っていた筆墨は現在幾揃い残っているかと聞いた。

もう少ししか残っていません、それらは国宝として残しておいては、という進言に、総書記はこう言った。

「……ただ保管するより、すぐれた書家に与えて利用するようにすれば、金日成同志はきっとお喜びになるでしょう」

〝ソルチェ嶺中隊〟

2004年４月１日、金正日総書記は朝鮮人民軍の某女性中隊を訪れた。

深い山中に瀟洒に建てられた兵営を見て回り、教育室や寝室が清潔で、よく整っているとたたえ、副食物倉庫、食堂、洗面所・

浴場、サウナなどものぞいて見て、この中隊の生活レベルはかつての山間地帯の地主より高いと満足した総書記は、女性軍人たちを見回して言った。

「ソルチェ嶺中隊は、以前からわたしとゆかりのある中隊です」

彼女たちはわが耳を疑った。総書記がここを視察したのは初めてであったし、いわんや世間に名を知られていてもしない平凡な中隊である。

総書記はほほえんだ。

「数年前、前線を視察して平壌(ピョンヤン)への帰途この嶺を通りかかった時、野花の束を持った女性軍人たちが道端に並んで敬礼を送ってくれたではありませんか。彼女たちを見てわたしは、この深い山中の嶺にあの女性軍人たちはなんのために花束を持って立っているのだろうかと考えました。あとで聞いたところでは、彼女たちはソルチェ嶺中隊の軍人で、万寿台(マンスデ)の丘に立つ金日成同志の銅像に花束を供えてもらおうと、平壌へ向かう車が通るのを待っていたといいます。この中隊の軍人たちは金日成同志の逝去後、これまでの10年間、山中に咲く野の花や自分たちが心をこめて栽培した花を毎年欠かさず平壌へ送っています」

前線視察の途上ちょっと目に触れた平凡な女兵士たちの所業を忘れず、記憶していたのである。

総書記は、目に露を宿している女兵士たちを見回し、辺鄙な山奥の兵営で金日成同志を慕い、変わりなく花束を捧げているソルチェ嶺中隊将兵の所業があまりに奇特で、一度必ず会ってみようと思っていた、と話した。

視察を終えて帰る時、総書記は、中隊名を記憶に残しておきたい、ソルチェ嶺中隊は名称が印象的で覚え易い、〝柿の木中隊〟と並んで〝ソルチェ嶺中隊〟という名高い中隊がまた生まれた、と意味深い言葉を残した。

未来か現在か

2004年５月２日、某人民軍区分隊の視察中、軍人食堂に足を踏み入れた金正日総書記は、壁に掲げられた区分隊別大豆生産競争グラフに目を止めた。そして指揮官に、大豆の栽培準備をどう進めているか、と聞いた。

「今は畑を掘り返し、堆肥を施したところで、数日後種子を播く予定です。わが部隊は本年の大豆生産に力を入れ、全軍的にきっと一等を取って見せます」

総書記は、決意はなかなかいい、何事であれ確信を抱くことが重要だと言い、一日当たりの糧食供給規定量表にある大豆の給食量を指して聞いた。

「これは未来か、それとも現在かね」

「今年の大豆生産に力を入れ、軍人たちに毎日出す目標を定めた数字です」

つまりそれは現在実施中の数字ではなく、未来の目標値だったのである。

指揮官の返答に、総書記は釘をさした。

「間違えてはいけません。その時になり決定通り供給できなかったら、軍人たちを愚弄することになります」

軍人たちには寸毫の約束違反もあってはならないときびしく要求する言葉であった。

今日だけは例外

2006年２月５日、遠隔の山間に駐屯する某人民軍区分隊に大慶事が生じた。年に何度か上部の指揮官がやって来る以外、絶えて訪れる人のない深い谷間の軍営を、金正日総書記が訪れたのである。

総書記は深い山中で勤務する軍人たちの孤独な生活を慰労し、時間をかけて隊内を視察した。寝室の壁に吊るされたこうじ玉を見てはその作り方を丁寧に教え、煙草の支給は切らしていないか、電気は十分に送られて来ているのか、といちいち尋ねもした。

そうした時、先ほどから何か言いたげにそわそわしていた区分隊政治指導員が、中隊芸能サークルの公演をご覧に入れたいのですが、とおそるおそる申し出た。

随員たちはあわてた。もはや出発すべき時間であったし、とりわけ総書記は午前中は歌声がきれいに出ないとして、サークル公演を見ないことにしていたからである。

ところが、意外にも総書記は声を立てて笑い、今日だけは例外として、公演を見ようと言った。

随員たちが顔を見合わせていると、総書記は語をついだ。

「ここは平壌(ピョンヤン)から遠く離れていて、人民武力部の幹部もあまり来ない所です。最高司令官が大隊を訪れて、軍人たちが用意したサークル公演を見ずに帰れば、彼らは寂しがるでしょう」

総書記は粗末な木椅子に腰掛けて公演を観覧し、他に先がけて拍手を送った。

立ち退き世帯問題

2006年３月３日、北辺の三水(サムス)発電所建設現場を訪れ、ダムの上に立って建設場を見下ろしていた金正日総書記は、ある一カ所を指さして尋ねた。

「あの区域もみな水に漬かるのですか」

そうですという答えに、立ち退き世帯はどれほどになるかと聞いた。

「数千世帯です」

「立ち退き世帯の処理はどうしているのですか」

道党責任書記が、これまで立ち退かせた世帯数は30％内外で、臨時に他家に同居させていると説明した。

「なんですって？」

総書記の声は鋭かった。

――撤去区域の住民をそんなふうに立ち退かせるのはよくない。家を建てて立ち退かせるならまだしも、他家に同居させると

はもってのほかだ。浸水区域の住民を立ち退かせることは重要な問題だ。三水発電所建設に関するいろいろな報告書を見たが、撤去住宅問題については一切触れられていないので、状況を確かめたくて、今日ここへ来てみたのだ。……

こう言ってちょっと口をつぐんでいた総書記は、言葉を続けた。

――撤去区域の住民に口先の説明だけで納得させようとしては絶対にいけない。この問題は実践的に解決しなければならない。両江(リャンガン)道の住民は日本帝国主義支配当時、どの地域の住民よりも苦しい生活をしたが、革命性が強くて、鴨緑江(アムロク)を渡り抗日革命闘争にも大勢参加した。日帝時代から苦労の絶えなかったこの地方の人民の生活問題を解決するのは、われわれにとっての最先決課題だ。道党執行委員会拡大会議を開いて浸水区域住居の移設問題を討議し、そのあと、この問題の重要性に鑑みて、党中央委員会との連合会議を行う必要がある。以前よりも立派な文化住宅を建てて浸水区域の住民に提供しなければならない。……

総書記はこう言っただけではまだ安心がならず、撤去世帯が数千世帯にのぼるそうだが、1世帯当たり平均3名だとしても大変な人数だ、数万キロワットの電気より人民の方がもっと貴重な存在だということを肝に銘じるべきだ、と強調した。

総書記は建設場を後にする時、発電所の建設と浸水区域住民の住居問題のどちらもおろそかにすることなく、共にしっかり推し進めるよう、今一度念を押した。

農民休養所にて

2006年11月14日、金正日総書記は咸州(ハムジュ)郡農民休養所を訪れた。

休養所前の庭で、松林を背景にして整然と並ぶ休養閣をしばらく眺めた総書記は、この地方は冬降雪量が多いのかと尋ねた。

そう多くは降らないという答えに、総書記は、じゃ、どうして屋根を尖塔状にしたのか、他の地方でもこんな屋根がまま見られるが、自分たちの地方色を大事にし積極的に生かすべきだ、こんな屋根はヨーロッパ式だとたしなめた。

折角建てるからにはユニークな建物をということで、全国各地の名の知られた建物を見学し、外国の休養所の形態も参考にして、尖塔状の屋根を取り入れたと説明した関係幹部をはじめ、一同は、改めて建物に目をこらした。すると、それらがわが国の地方色とはそぐわない、やはり自分たちの物ではない、と思われて深く恥じ入った。

総書記は彼らを慰労するかのように、**「ほかでも建物の屋根を尖塔状にするなど、外国の建築様式を真似ようとする傾向が見られるかどうかを確かめて、国家的対策を立て、是正するようにすべきです」**と言った。そして、前方に見える発電所従業員の住居を指さし、屋根をあんなふうにすると、なんと見よいだろうか、設計を見直し、建物の外形図案も研究してみるのがよかろうと指摘した。

念を押して聞いたわけ

2006年12月３日、金正日総書記は、沙里院（サリウォン）市媚谷（ミゴク）村に新しく建てられた農村文化住宅を視察した。

総書記は、金日成主席の現地指導事績碑と革命事績館を見て回った後、ある２階建て住居を訪れた。上下各2間からなり、壁を2重にするなどの防寒対策も取られていた。

主人夫婦としばらく話を交わした後、今一度居間を見回した総書記は、部屋が２間きりかと尋ねた。道の責任幹部が、２階にも居室が２間あると、代わって答えた。

総書記は２階の方に目をやり、この住居の長所と短所はどんな点かと、主人に聞いた。立派な新居に移ってすっかり満足していた彼は、欠点と言えるほどのものがすぐには頭に浮かばず、ちょっと考えてから、大きな声で答えた。

「家が本当に立派です。居室が四間で、2重壁ですから、冬も寒くありません」

いくら考えても長所しか思い浮かばず、うれしそうに答えるその様子にみんな笑った。

総書記は居間のテレビを見て、電気はちゃんと送られているのかと質問し、台所では、内部が立派に整っている、台所用品も申し分なく揃っている、昔の地主に劣らぬ暮らしをしている、と満足した。

外へ出て、あたりの住宅を見回した総書記は、主人を振り返り、今年の長雨で雨もりはしなかったかと聞き、雨は一滴ももれませんでしたという返答にうなずきながらも、こう言った。

いや、雨がもれるかどうかは来年の長雨の時、今一度確かめるべきです。

総書記は、飛び立つツルを思わせる朝鮮式の青い入母屋造りの住宅を見て、形式が多様で、設計と施工もよくできている、と大いに満足した。

総書記はいま一軒の住宅を見た後、村の全景を眺めながら村道をゆっくり歩いた。途中足を止めて、管理委員長に、農場員たちはどんな住宅をもっと欲しがっているか、と聞いた。

「現在の住宅にみなすっかり満足しています」と、管理委員長は深く考えずに答えた。

それでももっとよいと思う家があるはずでしょうがね。

管理委員長は、形式の異なる建物を指しながら説明した。

「あの家は恩情(ウンジョン)里式住宅ですが、農民たちにとても喜ばれており、都市側の人たちは、あんな２階建ての家を好んでいます」

農場員を農村側と都市側に分けて説明する管理委員長の言葉に、爆笑が起きた。総書記も楽しそうに笑った。

なくされた階段

2006年６月５日、改装なった大同門(テドンムン)映画館を視察した金正日

総書記は、たいそう立派に改装されたと、くりかえし称賛した。

ところが、中央ホールと観覧ホールをつなぐ階段の前で足を止めた総書記は、ここに階段を設けたのはよろしくないと言った。人びとは首をかしげた。観覧ホールは中央ホールより少し高いから、その継ぎ目に階段を設けるのは当然ではないか、と。総書記はいぶかる彼らに言った。

「映画館には年寄りや子どもたちも少なからず来るだろうに、そんな人たちは階段を踏み誤って倒れる恐れがあり、怪我をしないともかぎりません。映画館は年寄りや子どもたちにも不便のないように作らなければなりません」

その後、階段はすぐさまなくされ、老人や子どもも不自由なく歩けるよう、いくぶん傾斜した、安全な通路に直された。

「匂いが香ばしくていい」

2009年１月５日、竣工なった元山（ウォンサン）青年発電所を視察した金正日総書記は、発電所に働く除隊軍人新婚夫婦の家庭を訪問した。

庭に立って、果物の木が５株も植わっているのはなかなかいいとほめ、部屋では、３重ガラス窓の密閉をきちっとして、冷たい外気が入り込まないようにすることだと助言した総書記は、台所を見て、白色のガラス容器や壺がたくさんある、平壌（ピョンヤン）の人たちは壺を欲しがっている、この家へ来て貰って行くようにと話してあげよう、と笑って言った。また、結婚式の記念写真を見て、飾

りの花がとりどりで食べ物も多いとしてほほえんだ。

総書記はふと、奥の間の壁にずらりと吊るされているこうじ玉に目をやった。

（新居の部屋の壁に、すえた匂いを発散するこうじ玉なんかを吊るしておくなんて……）

幹部たちが眉をしかめて除隊軍人夫婦を見やった。夫は顔を赤らめ、妻は申しわけなさそうにうなじを垂れた。ところが総書記はにこにこして言った。

「奥の間の壁にこうじ玉をずらりと並べて吊るしたのはなかなかいい。農村でだけ見られる変わった風景です。ほかならぬこのようなものこそ社会主義仙境です。平壌市の住宅では壁にカーテンを掛けていますが、この家ではこうじ玉を一面に吊るしています。カーテンより見栄えがします。こうじのすえた匂いは香ばしくていい」

総書記は、こうじ玉を宝物でもあるかのように叩いてみたり、なでてみたりして、言葉を続けた。

――大豆こうじで作った味噌・醤油は、心臓血管の硬化を防ぎ、血栓を防止すると言われている。普通、かびはガンを発生させると言うが、大豆こうじで作った味噌・醤油は常食するとガンの発育を抑える効果があるとされている。それに、こうじには長寿に必要なすぐれた成分が多く含まれているそうだ。……ドイツ人医師たちがわが国の人たちの心臓冠状動脈の造影撮影をしてみて、血管がきれいだ、大豆こうじ製の味噌・醤油を食べれば、確かに健康によいと言った。今やヨーロッパの国ぐにでも、大豆こうじ

製の味噌・醤油を食べる朝鮮人の食事法を取り入れようとしているようだ。……

朝鮮特有の大豆こうじ製味噌・醤油についての〝現地特別講義〟であった。

総書記は話し続けた。

「福中にあって福に気づかないという言葉がありますが、わが国の人は、先祖たちが久しい前から大豆こうじで味噌・醤油を作って食べたことが、いかに文明の開けた、科学的なものだったかを十分には認識していないようです。こうじ玉を壁に吊るしているのを見ると、当家の奥さんはこうじ作りでは大変な先生のようです」

若妻はすっかりあわててしまった。一般的には、こうじ作りでは主婦が先生だと言えようが、当家では夫の方こそそれ以上の先生であった。壁に吊るされているこうじ玉は、夫の〝作品〟だったのである。総書記が前線視察を通して巻き起こした人民軍部隊の大豆生産ブームの中で、それまでこうじを作った経験のない若い男女兵士たちがこうじ作りを覚え、腕を上げるまでになったのである。

総書記は、除隊軍人夫婦と並んで記念写真を撮り、今後とも元気で幸せに暮らすよう祝福した後、そう、塩さえあれば、やがてこのこうじで醤油を作ることにもなろうが、君たちがおいしい醤油を作ったら、わたしがこのあたりを通る時、立ち寄って幾瓶かもらって帰り、味を見たいと思う、醤油をもらいに来るから、おいしく作っておくように、と言った。

2　魅力とあこがれ

川辺で起きた笑い声

咸鏡（ハムギョン）南道内諸部門の現地指導を続けていた金正日総書記は、ある日、長津江（チャンジンガン）発電所に至り、第五号発電職場のダム際であたりを見回した。たまたま下方の川辺では、１台のトラクターを止め、数人の労働者が河原の大石を拾ってトレーラーに積んでいた。

総書記はそこへ降りて行き、これらの石は何に使うのか、と話しかけた。

「ダム補修用の石です」

という返事に総書記は軽くうなずき、ダムを堅固に補修し、管理を手落ちなくおこなって、遠い将来にわたり揺るぎのない構造物にならせるよう心がけるべきだとし、重い石をトレーラーに積むような力仕事はなんとしても機械化する必要がある、と強調した。

その時。

「マスだ、マスの群れが上がって来るぞ」

という叫び声が上がった。見ると、銀色のうろこを光らせながら、マスの群れが川をさかのぼって来ていた。

１人の若者が川に入り、そろそろとマスの群れに近づき、一番大きなやつを狙って躍りかかった。

「バシャン」

岸では、わあっという爆笑が起こった。手ぶらの濡れねずみになって、きまり悪げににやっとした若者は、気を取り返してマスの群れに向き直り、今度こそはと身を躍らせた。

「捕ったぞっ」

誇らしげに叫ぶ若者の両手には腕ほどもの、ぴちぴち跳ねるマスがつかまれていた。

「おい、帽子が流れて行くぞ」

と、誰かが怒鳴った。若者の頭から帽子が落ちて、川下へゆらゆら流れていくのである。彼はあわてた。帽子を拾うにはマスを逃がすほかないし、マスを放さなかったら帽子をなくしてしまう。……

この時、総書記が靴も脱がずに、やにわに川の中へざぶざぶ入って帽子を拾い上げ、水を払い落として若者の頭にかぶせた。

そして、君はわたしのためにマスを捕り、わたしは君のために、流されていく帽子を拾ってあげた、なんと印象的なことだろう、こう言って明るく笑う総書記につられて、労働者たちは楽しそうに笑った。

時間がかなり流れた正午過ぎ、そろそろ出発しなくてはという随員の言葉に、総書記は、この人たちと一緒に愉快なひとときを過ごしながらも、このまま水臭く別れてしまったら、みんなどんなに名残り惜しい思いをするだろうか、と言い、続けてこう語った。

みんなで一緒に昼食を取ろうではないか。

総書記は靴と靴下を石の上に干して、コンクリート床に座り、持って来た弁当を広げるよう、随員に言った。

労働者たちは総書記をはさんで円陣を作った。

こうなると分かっていたら、ちょっと余計に持って来たものを、と残念そうに言った総書記は、パンを一個ずつ彼らの手に持たせた。

面映ゆい思いをしながらも、パンを手にして喜ぶ労働者たち。……

1967年８月７日のことであった。

カットされたフィルム片

1970年３月28日。

音楽を入れた劇映画『ある自衛団員の運命』のラッシュプリントの試写を見ていた金正日総書記は、あるシーンで映写機を止めさせ、画面と音楽に食い違いがある、なぜここの部位のフィルムをカットしたのか、と聞いた。

思い当たるところがなく、首をかしげている演出家と作曲家に向かって、今のシーンをもう一度写してみるようにと、総書記は言った。

緊張した面持ちでスクリーンを凝視し、耳をそばだてたが、やはりなんの変異も認められなかった。

総書記は、前より音楽に切れ目のあることがはっきり感じられるとして、**「間違いなくフィルムがカットされています。探してみなさい」**と言って、席を外した。

編集者たちは、フィルムのモンタージュ中にカットして捨てた

フィルム片を持ち出して、１枚１枚念入りに調べた。かなり時間が経った。探していたフィルム片が見つかった。それは23こまのごく短いものだった。

映写機によるフィルムの進行速度は秒あたり24こまであるから、23こまなら瞬時に流れ去ってしまうのである。

翌日、撮影所にやって来て、継ぎ合わされたフィルムによる画面を見た総書記は、**「見付けましたね。ご苦労さんでした。これで画面と音楽がぴったり一致しました」**と言った。

結い紐の調和

1971年１月11日、平壌（ピョンヤン）大劇場へ出向いた金正日総書記は、舞踊練習場に静かに入った。そこでは踊り子たちが稽古に励んでいた。

彼女たちの挨拶をにこやかに受けた総書記は、何を稽古しているのかと聞いた。

舞台監督が、舞踊『雪が降る』の稽古中だが、踊り子たちの動作にどうもまとまりがなく、全体的な調和が取れずに苦しんでいる、と答えた。

「調和が取れない……」

独り言のようにつぶやいた総書記は、一度見てみようと言って、かたわらの椅子に腰をおろした。

最初からやり直される稽古に見入っていた総書記は、だしぬけに稽古を中止させた。

「頭髪を束ねた紐がどうしてまちまちなのですか」

こう言われて、踊り子たちの束ねた髪の結い紐を見比べてみると、てんでんばらばらであった。彼女たちはみな自分なりに気に入った色の紐で髪を結わえていたのである。

総書記は笑って言った。

――踊り子たちが黒色の練習着に思い思いの色の紐で髪を束ねているので雑然として見えるのだ。以前、学校の運動会では、〝赤組〟と〝白組〟に別れ、各自赤鉢巻きと白鉢巻きをして対抗したものだが、それは、自方の強い規律と団結力を示威するためであった。舞踊も幾たりもの踊り子が出演してアンサンブルを保たなければならないので、ステージに立つ時だけでなく、普段の生活、とりわけ稽古の場でも全員の気持ちと動作の統一をはかることをおろそかにするべきでない。舞踊には人びとの生活が音楽的リズムに乗せてこめられ、短い時間に視覚的効果をもって観客の深い印象を呼び起こす芸術だから、そこに僅かな不調和が存在しても、舞踊作品全体を壊してしまうことがある。稽古でもステージでも常に全員の気持ちと動作が一つに溶け合っていてこそ、アンサンブルは保たれるのだ。……

こう説明した総書記は、一人の踊り子を指し、彼女のように黒色の練習着に白色の結い紐で髪を束ねると、さっぱりとしていい、赤色や青色は面白くない、と言った。

その後、総書記の指摘通り、黒色の練習着に白色の結い紐で統一して稽古に入ったところ、そこに神秘というほかないほどの変化が生じた。踊り子たちの動作が驚くほど調和し、きれいにまと

まったのである。

「……ありがとうございます」

1982年１月12日、この日、小さい頃から書道に磨きをかけてきた13歳の少女書家が、金日成主席と金正日総書記にその筆法をご覧に入れることになった。

高鳴る胸をおさえて少女は、唇を一文字に結び、一字一字心をこめて筆を運んだ。

「新年を迎え父なる金日成元帥の万年長寿を謹んでお祈り致します」

一斉に拍手が沸いた。総書記も喜んで拍手を送った。幼い書家は大きな幸福感にひたった。

総書記が、今度はもう少し小さい字を書いてごらん、とやさしく言った。少女はちょっと考え、胸中に独りごちた。

（親愛なる指導者金正日先生ありがとうございます）

彼女は息を大きく吸い込んで、筆を走らせはじめた。

「親愛」という二字を書いた時であった。

「いや、そんな字はよして……」

総書記の声が静かに響いた。筆が止まったが、すぐまた動き出した。

「親愛なる指」

総書記はまた制止した。制止はさらに２度、３度とくり返され

たが、筆の動きは止まらなかった。

「親愛なる指導者金正日先生」

総書記はたまりかねて少女の肩をやさしく叩き、もうそれでいい、ご苦労さん、と言って少女の手を取り、筆を止めさせた。

胸に秘めていた「ありがとうございます」（고맙습니다――コマッスプニダ）」という五字を最後に添えれば、わが思いが表現できたものをと惜しまれてか、少女は目に涙を浮かべた。

その様子にいたく心を打たれた金日成主席は、幼い書家を抱き寄せて、記念写真を撮った。

中国訪問の日びに

機雷でなく爆雷　1983年６月４日、青島の中国人民解放軍北海艦隊を訪れた金正日総書記は、停泊中の駆逐艦に上がり、艦の技術装備について艦長の詳しい説明を聞いた。

ところが、朝鮮語に堪能なはずの中国人通訳がひとかたならず難儀することになった。艦長が電子技術装備の機器・設備や計器、それに武器を指しながら行う説明を、彼はしどろもどろになって通訳した。軍事分野の技術用語に暗くて、しきりに首をかしげては、救いを求めるようにかたわらの朝鮮人通訳の顔色をうかがった。ところが朝鮮人通訳も複雑な軍事技術用語に辟易し、冷や汗をかくばかりだった。

艦の武装についての説明中も、はじめ水雷と言ったのを機雷と

言い直しながらも、通訳は自信が持てず言葉じりをにごしてしまった。まわりの幹部たちはあっけにとられ、顔を見合わせた。

総書記はいたわるような目を彼に向け、笑って言った。

「これは機雷でなく、爆雷というものだ。それからさっきあそこで見たのは音響探知機というものだ……」

総書記は随員たちを振り向き、駆逐艦の使命と武装について説明した後、まわりに停泊している大小の艦艇を指して、それらの種別名称やトン数、使命を具体的に教えた。そしてこう続けた。

――現代の海戦では海上に浮かぶ軍艦より、水中の潜水艦の方がより大きい危険な対象である。そこで、艦隊の中で駆逐艦は敵潜水艦の撃破に大きく利用されている。駆逐艦には音響探知機が装備されているので敵潜水艦の位置を確認でき、位置が分かれば、水中に爆雷を投下して潜水艦を爆破する。……

燕窩〝論争〟　この日、青島を後にした一行は、列車に揺られながら南京へ向かっていた。

途中出された食事に燕窩（エンカ）湯が供された。燕窩湯は中国でたいそう珍重される高級料理で、貴賓にのみ出されているという。燕窩とは、中国南方の木や草の一切ない砂利で覆われた島に棲息する特殊なツバメの巣で、これをもとにして作った料理を燕窩湯または燕窩菜と言っている。

この草木も土壌もない砂利の島で、ツバメは何をもって巣を営むのであろうか。これが話題となって、一同の間に〝論争〟が交わされた。

朝中両国の幹部を巻きこんだこの〝論争〟ではさまざまの主張が出されたが、大まかに言ってそれらは二つの意見に色分けされた。一つはツバメが唾液をもって作るというものであり、いま一つはツバメが小魚をくわえてきて巣を作るというもので、互いに主張を譲らなかった。

総書記は彼らを見回して、以前、朝鮮の代表が中国を訪れた際に出された燕窩湯に魚の目玉が混じっているのを見たという話を聞いたことがあると一言いった。すると随員の一人が、「そうです。確かにそんなことがありました。魚の骨屑もありました」と口を添えた。総書記が笑い、みんなも笑った。

燕窩〝論争〟はその後、上海から北京に向かう列車食堂で再燃した。

総書記は、まだ論争が収まっていないのか、もう中国訪問日程も終わりに近づいているから、この問題にもけりをつけるべきではなかろうか、と前置きして、自分の考えでは、ツバメが魚をくわえて来て、それを唾液でこねて巣を作っているようだ、こうしてみると、これは結局双方の意見の　折衷案　となろうが、この〝折衷案〟が正しいようだ、と言って豪快に笑った。

「総書記同志の折衷案が正答のようです」

「そうです。金正日同志が燕窩〝論争〟を立派に締めくくって下さいました」

両国の幹部たちは手を叩いて愉快に笑った。

キリストの復活は信じないが

金日成主席の逝去後ひと月ばかり経った1994年８月11日、平壌(ピョンヤン)市のモンラン館で在米同胞孫元泰(ソンウォンテ)の誕生80周年祝賀宴が催された。

（金日成主席がお亡くなりになったばかりのこの大国喪中に誕生祝いとは……）

人びとは驚いた。

これには次のような訳があった。

３年前のこと、金日成主席は米国在住の孫元泰を平壌に招いた際、その間先生の誕生祝いをしてあげられなかったが、80歳の誕生日には自分が兄としての心情で誕生祝いをしてあげよう、と約束した。

主席は彼の誕生日が近づくと、贈り物の大型宝石画『松鶴』を用意した。

ところが、その直後、思いもよらぬ主席の逝去が報じられた。

孫元泰は取るものも取りあえず平壌へ飛んだ。

遺体を守っていた金正日総書記は、孫元泰に会い、むせび泣くその手を取って言った。

「先生、遠い他郷からわざわざおいで下さってありがとうございます。

金日成同志は生前、先生の80歳の誕生日を盛大にお祝いしようと言っていたのですが、まことに申しわけないことになりました。

今後ともわが家のようなお気持ちで始終おいで下さい。わたしは金日成同志が懇意にしていたお方たちをどんな時も忘れは致しません」

その数日後、関係幹部を呼んだ総書記は、孫元泰先生の80歳の誕生日を金日成同志の生前の意図通り立派に祝うよう指示した。

当日早朝、総書記は孫元泰夫妻に自身の名義になる花籠と大型果物籠その他の贈り物をし、お祝いの言葉を伝えた。夕方は、金日成主席の心尽くしの大型宝石画を送り、モンラン館で誕生祝賀宴を催すようはからった。

宴には政府高官たちが参席し、アメリカから来た先生の子女や知己、それに海外同胞も列座した。

孫元泰は目に涙をたたえて真情を吐露した。

「主席のお志が生きており、その愛のぬくもりが熱く胸に残っていますのに、どうして主席が逝かれたと言えましょうか。わたしは、十字架にはりつけにされたイエス・キリストが復活するなどとは信じていませんが、主席の永生不滅は信じて疑いません。金正日将軍は金日成主席です」

ウマラトワの激賛

サージ・ザインジノフナ・ウマラトワは、ロシアの平和・統一党の委員長である。

1999年２月19日、金正日総書記は白頭（ペクトゥ）山麓で、正義感の強い

情熱的なこの女性政治活動家を接見した。

この日北国の寒さはとりわけきびしかったが、総書記は宿舎の外へ出て彼女を迎え、こんな遠くの地へ御足労願って申しわけありません、と挨拶した。ウマラトワは誕生日を迎えた総書記にお祝いを述べ、今年お国を訪れて、貴国のすべてが昨年よりいっそう活況を呈していることを知ったと述べた。

総書記は、今朝鮮人民は強盛国家建設を合い言葉にして、すべての問題を自力更生の革命精神をもって解いていこうと奮闘している、とりわけ食糧問題の解決をはかってジャガイモの栽培に力を入れている、以前、ソ連はソ独戦争の際、シベリアにジャガイモを大々的に植えて飢饉を克服し、ヒトラー軍との戦いに勝利した、と語った。

談話の席上、ウマラトワは、自党とロシア諸政党の活動状況に関する私見を述べ、総書記は、彼女の見解を注意深く聞いた。

総書記は、よもやま話では冗談もまじえて対話を進めたが、朝鮮の制裁・圧殺をはかるアメリカとその追随勢力に対しては強い怒りをこめて罪業を断罪し、次のように続けた。

――わたしはそれが誰であれ、わが国をあなどり、尊厳を冒そうとするならば、毫も容赦しない。そのようなやからとは乾坤一擲の決断をもって戦い勝利すべきだというのが、わたしの信念であり、意志である。それでわたしは、死を覚悟した人に打ち勝てる者はない、というスローガンをうち出した。アメリカ人はわれわれのこの信念と意志に気勢をそがれ、あえて手出しできないでいる。万一、それでも手を出せば、断じてけりをつけてみせると

いうのがわたしの腹だ。白頭山で戦った抗日遊撃隊が武力にすぐれて日本帝国主義百万の大軍と戦って勝ったのだろうか。不屈の革命精神をもって戦い、勝利したのである。白頭山の革命精神さえあれば、いかなる大敵を相手にしても恐れることはない。……

談話は３時間も続いた。

談話を終えた総書記は、白頭の雪景色を背景にして記念写真を撮ろうと言って、屋外へ出た。外では吹雪がうなりを上げ、銀白色の粉雪を飛ばしていた。

総書記は、当地ではこのような寒さはありきたりで、わたしはどうということはないが、初めての客にはこたえるだろう、しかし、寒さを恐れて身をすくめたりすると、寒さはいっそう暴威をふるう、だから白頭山は意志の試験場だ、と言って豪快に笑い、早く写真を撮ろうと、客を促した。

ウマラトワは総書記の接見を受けて平壌（ピョンヤン）に戻る途次、彼女を案内した幹部に所感を語った。

「敬愛する金正日同志は、卓越した政治家、偉大な軍事戦略家であり、天の降した偉人です。

金正日同志は、気性と信念も、意志と気骨も白頭山にそっくりです」

ひんぱんに訪ねれば友情は厚くなる

海上での午餐　朝鮮をたびたび訪問しているシベリア生まれ

の一ロシア人士は、旧ソ連時代、シベリアの某州党委員会第１書記を務め、のちにソ連共産党中央委員会の要職にあった古くからの政界人で、鷹揚ながらも気骨のある人物であった。

1999年８月２日、金正日総書記は訪朝中の彼を朝鮮東海上の船に招いて、昼食を共にした。

前日、総書記は担当幹部に、先年、今度来たら一緒に休息を取ろうと約束したのだったが、現地視察のスケジュールが詰まっていて時間が取れない、今度わたしに会えずに帰ることになったら、どんなにか残念がるだろう、明日午前、彼が泊まっている東海岸休養地の前に船を浮かべて招待し、昼食を共にしたいから、準備をしてもらいたいと指示した。

ところが、気象台に問い合わせてみると、明日は大雨が降り、風も激しいという。

総書記は、波が高く風雨の激しい海上で昼食を取れば、むしろ深い印象を残すだろうから悪くはない、気にしないで昼食の用意に抜かりがないようにと念を押した。

海上の午餐に招かれたロシア人客は、事情を聞いて感激した。

それに、彼をいっそう感動させたのは、テーブルに着いた時、総書記が、今度来られたら休息を共にしようと約束しておきながらも、スケジュールに縛られそうできなくて申しわけない、今日以外に会える機会がなさそうだから、悪天候を承知の上で戦闘的に午餐を準備したから、印象深く追憶して欲しい、こんな日はお酒の味も格別だろう、と言って酒瓶を取り上げた時だった。

「おや、それはグルジアコニャックじゃありませんか」

「先年あなたから頂戴した物です。一人で飲んでは味気ないので、今度あなたに会ったら一緒に飲もうと思って取っておいたのです。今日こうしてお会いできた記念に飲みましょう」

笑顔でこう言った総書記は、瓶の栓を抜け、客の杯に注いだ。

自分が贈ったグルジアコニャックを大事にしまっておいて贈り主の自分に先に注いで下さることにとまどい、彼は、手を出すのがはばかれた。

「どうなされたのです。シベリアの人たちは嬉しい時にもお酒を飲み、悲しい時にもお酒を飲むそうじゃありませんか。さあ、一緒に飲みましょう」

こだわりなくひんぱんにおいでなさい　金正日総書記はある年、このロシア人客と数時間もの間談話を交わした。

席上、次のような談話が行われた。

総書記 ： シベリアの人たちは強いウォッカを好んでいるが、あまり強い酒は健康によくない。そのようなお酒を好むのなら、朝鮮特産の蛇酒を幾瓶かあげるから持って帰りなさい。

客 ： ありがとうございます。尊敬する金正日同志。

総書記 ： 今度おいでになる時は一人で来ないで、御夫人をはじめ一家全員を伴って来ると約束しなさい。

客 ： それは、ちょっと……。

総書記 ： そうされたら御夫人の手料理を賞味できるではありませんか。御夫人の料理の点数は気前よく付けますから、心配せずきっとお連れになるのです。

客 ： 料理の採点などは気にかけませんが、家族を全員連れて来るとなれば、１個小隊にはなりますが、この老いぼれが小隊長の役目を果たすのはちょっと骨が折れますから、何人かだけを連れて参りましょう。

総書記 ： われわれに負担を掛けるようでそうおっしゃるのでしょうが、歓迎すべき人たちなら小隊ならぬ中隊であってもおなかを空かせるようなことはしませんから心配御無用です。旅客機の切符はわたしが送って上げます。ところで、御夫人の趣味はなんでしょうか。

客 ： 読書とオペラです。

総書記 ： それなら、平壌（ピョンヤン）では『血の海』や『花を売る乙女』のような革命歌劇を見、ポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルの公演も存分に楽しむことです。ただ、われわれの気に入る客は観覧料を高く取り、招かざる客からは安く取ることにしていますが、２の足を踏むようなことはないでしょうね。

座中に笑いの声が巻いた。

時間が経つのを忘れていた客は、ふと、自分があまりに長居していることに気付いて恐縮した。

総書記は、そんなことを気に掛けなくてもよい、わたしは時間を取られても補うすべを心得ている、今後とも平壌へはわが家と心得て、こだわりなくひんぱんにいらっしゃい、そうしたら友情も厚くなる、と言った。

「ありがとうございます。きっとまた参ります」

自慢が過ぎると

1999年９月14日、長江（チャンガン）３号軍民青年発電所を視察した金正日総書記は、もうこれで電力が生産でき、風致もよくなった、魚類の養殖も可能になったとして喜び、この川では今どんな魚が取れるのかと聞いた。

「コイ、フナ、記念魚（ハクレン）、ニジマスなどです」

郡の一幹部が声をはずませて答えた。そこには、山間の郡で魚類の養殖を行う誇りがこもっていた。まわりの人たちも互いにうなずき合った。

ところが、総書記は不思議そうに彼を見返して、この川にコイ、フナ、記念魚、ニジマスがいるとしたら、水温はいかほどか、どうにも分からん、と独り言のようにつぶやいた。

彼は言葉に窮した。水温に注意を向けなかったこともさることながら、総書記の意中をはかりかねたのである。他の人たちも同様だった。

総書記はそんな彼らを見回した。

「ニジマスは水温が10～12度の川でよく育ちます」

総書記を見送ったあと、彼らは好奇心も手伝って、早速川の生態を調べたが、ニジマスはどこにも見られなかった。コイ、フナ、記念魚は24～30度水温で成育するために、共棲することはないのである。

返した〝借り〟

平壌（ピョンヤン）をたびたび訪れ、金日成主席の接見を受けもした在米同胞女流ジャーナリスト文明子（ムンミョンジャ）は、西側世界で朝鮮の実情にかなり詳しい「北朝鮮通ジャーナリスト」として広く知られている。

彼女は30年にわたるホワイトハウスの出入り記者として活躍し、世界の名望ある人物にはほとんど会っていたし、日本のある有名女性誌による、世界を動かす女性12人の１人に選ばれたほど知名度が高かった。

金日成主席が逝去し、朝鮮の国家首班推戴問題に世界の耳目が集中していた1995年春、「本年10月10日、主席職承継」という予想記事を書いた彼女は、予想が大きく外れたことについて、後日、その心境をこう語った。

「一国の大統領職を一日や二日でなく、１年以上も空席にしておけるだろうか。わたしはこういった常識的な判断から、権力の年内承継を予言した。しかし、それは全くの見当違いだった。１年は３年となり、そのうえ、主席職が廃され、金日成主席は唯一無二の主席となった」

とりわけ、朝鮮の錦繡山（クムスサン）議事堂が錦繡山記念宮殿（当時）となり、人工衛星の打ち上げに成功したというニュースは、彼女の予想とはまるでかけ離れた驚くべき出来事であった。

彼女は、金正日総書記に是非会いたいと思った。

1997年７月13日、総書記は、主席の３回忌行事に参加すべく祖国

を訪れた彼女の数次にわたる会見要望に対し、現地指導先の咸興(ハムフン)で次のような手紙を書いた。

「わたしは、あなたが今回祖国を訪問された機会に時間を割いてお会いし、談話を交わしたく思ったのですが、いろいろの事情が持ち上がり、ひまを見いだせなかったことをたいそう残念に思います」

続けて総書記は、生前あなたにお会いした金日成同志が、正義の筆鋒をかざして海外で愛国愛族活動を展開しているあなたのように著名な女流ジャーナリストがいることは民族の誇りだとした言葉を忘れていない、わたしは、あなたが金日成同志の生存時も逝去後も変わりなく、祖国と人民のため、国の統一のために大いに活躍していることをよく承知している、今後祖国をまた訪問されればその機会には必ず会えるものと希望している、と記した。

総書記は彼女との約束を忘れなかった。

それから３年後、祖国を訪問した彼女を接見した総書記は、今日は朝鮮民族衣装を着ておられるのでずいぶんお若く見えるとし、**「わたしは以前からあなたにお会いするとした〝借り〟を背負っていましたが、今度その返済をしたくてひまを作りました」**と言った。そして、彼女が知りたがっている問題について長時間説明したうえ、昼食を共にした。

後日、彼女はこう振り返った。

「金正日国防委員長は意志が強靭でありながらも気さくな方であった。すぐる1992年と1993年の二度にわたりお会いして下さ

った金日成主席にそっくりそのままだった」

6・15統一逸話

2000年６月13日～15日、平壌（ピョンヤン）では世界を驚倒させる出来事が生じた。歴史的な北南首脳対面と北南最高位級会談に臨むべく、南朝鮮の金大中（キム デ ジュン）大統領が平壌を訪れたのである。その間にさまざまの逸話が生まれたが、ここにその一端を紹介する。

撮り直した記念写真　６月13日、空港における迎接行事を終え、金大中大統領を宿所の百花園迎賓館に案内した金正日総書記は、平壌対面を記念して大統領一行と記念撮影を行った。

総書記を挟んで大統領夫妻が立ち、撮影がなされたが、３人の位置は夫妻の意向で決められていた。

撮影が終わった時、総書記がだしぬけに、写真をもう一枚撮ろうと言って、大統領を中に立てた。

南側の随員たちは、今しがた撮った写真が公開されたら、大統領の体面に傷が付く、ソウルに帰ったら口うるさい保守勢力の非難にさらされかねないと憂慮していた。総書記はそんな彼らの心情を察したのである。彼らは空港で、総書記が大統領に、長官たちを同伴して困難で不安な道を訪ねて来られた、と言った言葉を思い出した。してみると、それも四方に気を配らざるを得ない彼らの不安に思いを致してなされた思慮深い言葉だったと気づいた。

世界に回答を　金正日総書記と金大中大統領の初の会談は、白花園迎賓館で初対面を兼ねて行われたが、これは異例の措置であった。

1945年の解放以来鋭い政治・軍事対決を続けてきた北と南の間の史上最初の首脳対面であることからして、大統領一行はかなり緊張していた。

総書記はそうした緊張を和らげるかのように、金大統領が今朝の食事を豆もやし汁に半熟の卵半分で済ましたとの報道を聞いたとして、「**大統領は平壌で昼食をうんと取るつもりで、今朝減食されたのではなかろうかと思いました**」と言った。

場内は愉快な笑いにそよいだ。

緊張した空気を瞬時にほぐした総書記は、この度の金大中大統領の平壌訪問をわが人民はみな心から喜んでいる、先日、南側特使が来た時、われわれは金大統領を平壌に迎えたら決して寂しい思いをさせないと言っておいたが、われわれは今日、口よりも実行を重んじて困難な道をやって来られた金大統領を寂しがらせるようなことはしない、今、世界がわれわれを注視している、金大統領がなんのために平壌を訪れようとし、わたしがなぜ平壌訪問を承諾したかについて疑問を抱いている、われわれは格式にこだわらぬ対話を行い、２泊３日の間に世界の疑惑に回答を与えようと言った。

こうして、会談は順風に帆を上げてすらすらと運び、一気に対話の核心的問題で合意がなされたことは、承知の通りである。

〝離散家族〟　６月14日、モンラン館で、金大中が答礼宴を張った。

席に着いた総書記は宴会場を見回し、金大中夫人はどこにいるのかと聞いた。南側長官が、夫人は次のテーブルに着いていると答えた。総書記は、すると、この宴は金大統領夫妻を〝離散家族〟にならせる宴になるところだったとして、**「離散家族問題の解決をはかるとしながら、また離散家族を生もうというのですか」**と言った。

金大中ら南側の一行はけげんな表情をした。そんな彼らに向かって総書記は言った。

――大統領夫妻を同じテーブルに着けるべきだ。無理に引き離す必要がどこにあろうか。お互い離ればなれになって食事を取っては味がまずくなるではないか。大統領夫妻まで離散家族にならせたら、それこそ世の評判になる。……

爆笑が渦まいた。

そんな中を話題のヒロイン金大統領夫人が総書記のかたわらへ押されるようにして進み出た。総書記はにこやかな顔を向けて、夫人に大統領のかたわらの席を勧めた。

夫人は、国防委員長のあまりに深い配慮に、ただ当惑するほかありません、もうわたくしどもの　家族問題　は解決されました、わたくしの体は宅のそばにあっても、気持ちはずっと国防委員長のもとにはべっています、と言った。

総書記は、いや、それはいけない、身体も心もみな御主人のもとにいなければならない、さもないと大変なことになる、と言っ

て豪快に笑った。

またまた爆笑が沸いた。

夫人は手を叩いて、国防委員長はどうしてまあ、わたしたちをそんなに楽しませて下さるのでしょうか、お話を実に興味深くなされるので、今、座中の視線が国防委員長に集中しているのですよ、とこだわりなく言った。

〝出演料〟　会場の雰囲気はいやがうえに盛り上がった。

そうした時、１人の幹部が入って来て、北と南が合意してまとめた北南共同宣言文の草案を総書記に手渡した。

総書記は草案に目を通し、文書が立派に出来たとして、相手側随員に渡して大統領に見せるようにと言った。

金大中は、「共同宣言文の草案に異見はありません。同意します」と言い、双方が共同宣言に合意したことをこの場で公表することにしてはと提案した。

総書記は大きくうなずいて、大統領ともども演台の前に立ち、彼の手を取って頭上高く上げた。

「歴史的な北南共同宣言が合意されたことをお知らせします」

宴会場は嵐のような歓呼と拍手に沸いた。

ところが、南側の記者たちがあわてて、弘報首席秘書官の脇腹を突っついた。総書記が大統領の手を取って上げた場面をカメラにとらえることができなかったのである。

秘書官は総書記に近寄り、申しわけなさそうにささやいた。「お二方が一緒に手を上げた場面を撮れなかったので、記者たちが困

惑しています」

総書記は、俳優になってくれと言うなら、自分は要請を容れる用意がある、だが金大統領の承諾がないとね、と言った。

「国防委員長がいいとおっしゃるなら、わたしも同意します」

総書記は笑って、**「それなら、われわれは一度俳優になってみましょう」**と言い、演台の前で再び大統領の手を取って上げた。

カメラから立て続けに閃光がひらめいた。

撮影が終わると総書記は、われわれが俳優役を演じたのだから、〝出演料〟を頂かなければ困る、と言って場内に笑いの渦を巻き起こした。

〝正真正銘の一家〟　６月15日、金正日総書記は国防委員長の名で、金大中一行を招き、歓送午餐宴を催した。

前夜、総書記は金大中に、南側がわれわれに宴を設けて下さったのだから、われわれは明日昼食を共にしたい、南朝鮮では〝相互主義〟を標榜する風があるが、われわれもちょっと相互主義に走ってみようと思う、と言って場内を大笑いさせたのだった。

宴たけなわの頃、金大中が思い出したように、国防委員長はどの金氏かと聞いた。始祖の生まれを知りたかったのである。総書記は笑って、全州（チョンジュ）金氏だと言った。

「わたしは金海（キムヘ）金氏ですが、委員長はやはり全羅（チョンラ）道の方だったのですね」

金大中がこう言った時、かたわらで両人の話を聞いていた大統領夫人が手を叩いて言った。

「わたくしは全州李氏ですのよ」

「だからわれわれは正真正銘の一家だったのですね。今度初めてわが一家が揃ったわけです」

こう言って総書記は豪快に笑った。

顔を見合わせる金大中夫妻を眺めながら、みな大笑いした。

金正日総書記が全州金氏だという噂は、南朝鮮でかなり前から囁かれていたが、それが確認されたのは、この時であった。

こうして、南朝鮮全羅北道完州郡九耳面にある全州金氏の始祖墓は一躍有名になり、それ以来、連日大勢の人が参詣しているという。

自民族のための共助　歓送午餐宴は和気あいあいとした雰囲気の中で続けられた。

客たちと談笑していた総書記はやがて真顔に戻り、北南間の信頼と団結をはかり、祖国の統一を早めるためには、互いに誹謗中傷し相手を刺激するような行為を一切控えなければならない、10日後には6・25（朝鮮戦争勃発の日）を迎えることになるが、南側でも敵対感情をさらけ出さないようにすることが重要だと強調した後、長官たちを見回して、金大統領とわたしが体面を失することのないようコントロールしうる人はあなた方だ、と言った。

「正しくコントロールできなければ、長官の座を明け渡すようにし、代わってわたしがソウルへ行き、長官を兼任しましょう」

愉快な爆笑が渦巻いた。

長官たちは、共同宣言の履行に全力を尽くすとこもごもに確言

した。金大中も、「おっしゃるまでもありません。あまりご心配なさらないで下さい」と、くり返して言った。

宴が終わりに近づいた時、総書記は長官たちに向かって強調した。

――今回、金大統領と南側政治家たちが平壌に来られて大事をなし遂げた。今日の成果をもって、南の旧政治家たちが嘆息し、ほぞを噛むようにしよう。北南共同宣言を忠実に履行すべき民族史的任務がわれわれの双肩にかかっている。過渡に急いだり、せっかちになることなく、一歩一歩着実に前進しよう。われわれは常に民族問題を優先視すべきだ。南側当局が他の国ぐにと共助するのをわれわれは頭から反対しているのではない。問題は、わが民族同士が仲よくし、団結する前提に立って他の国ぐにと共助すればよい。自民族に反対するための国際共助は許されるべきでない。われわれはわが民族のための共助を行うべきである。……

ロシアの極東にて

2002年８月、金正日総書記がロシア極東地方を訪れた時のこと。

失業したのでは　総書記は、８月21日、ガガーリン名称コムソモルスク・ナ・アムーレ航空生産コンビナートを訪問した。

新鋭航空機の生産を行っている当企業は、最先端航空技術と軍需産業に占める重要性からして、外来者の出入りを一切禁じ、秘密を固く守っていた。

ここで製作された各種航空機の年代順展示場で総書記は随員たちに、これは第２次大戦で大きな功績を立て、これは去る朝鮮戦争の際、朝鮮人操縦士たちが乗って戦った飛行機と同じものだ、などと説明した。

総書記は企業の幹部に先端技術で装備された最新型航空機の性能と諸元について具体的に質問し、企業が国防力の強化と航空運輸の向上に大きく寄与していることを評価した。

総書記は総支配人の案内で、それまでどの誰にも見せたことのない生産現場を見て回った。

航空機生産の第１の工程である設計室では、何人かの設計士がコンピューターの前で新型航空機の設計を行っていた。総支配人は、ここでは以前数百人の設計士が働いていたが、今はコンピューターの導入で、少人数の働き手がいるにすぎないと言った。

では〝解雇〟された設計士たちはどうなりましたか。彼らは失業したのではないでしょうか。

総書記は、堅苦しい儀礼的な雰囲気を一瞬にして和らげ、明るく笑った。ロシア人たちは申し合わせたように顔をほころばせた。総支配人はこう答えた。

「〝解雇〟された設計士たちはほとんどが新しい技術を学び、それぞれ希望した業種で働いています。ありがとうございます、金正日同志。わが設計士たちの御心配をしていただいて」

〝偵察兵〟たちは実によくやった　翌８月22日、総書記は極東軍管区傘下のウォロチャエフカ師団を訪問した。

戦闘栄誉博物館に案内されて戦闘技術機材を見た後、若い軍人たちには何をさておき腹一杯食べさせることだと言って、軍人食堂にも入ってみた。

総書記は、師団訪問を記念して、所感を書き残した。

別れを前にして、師団指揮官は総書記に石写真工芸のウスリー虎を贈った。朝鮮代表団も師団に贈り物をした。朝鮮虎の絵であった。

偶然ではあったが、虎と虎との交換、つまり一方はウスリー虎を贈って朝鮮虎をもらい、もう一方は朝鮮虎を贈ってウスリー虎をもらったのである。折角の誠意がなんとなく矮小化されたようで、双方がぎこちない思いをした。

ところが、総書記はまわりに漂うそのぎこちない感情を瞬時に吹き飛ばしてしまった。

わが方の〝偵察兵〟たちが虎の交換を考えついたのはでかしたことだった。われわれは貴方が贈り物に虎を選んでいることを承知していたのです。

ロシア人も朝鮮人も声を立てて笑った。

午餐会が終わる時に

金正日総書記が中国を訪問していた2011年５月20日。

鏡泊湖上遊覧船内における午餐会では、雰囲気を盛り上げるべく閉会を間近にして牡丹江市民族楽団の公演が行われた。ここで

は中国の歌に続いて朝鮮の歌も熱っぽく歌われた。

微笑して拍手を送っていた総書記は、ふと、琴を弾いている女性演奏家の指先の琴づめに目を止め、あれは何かと中国人幹部に聞いた。

「熱帯の海に棲むタイマイの甲羅で、べっこうと呼ばれているものです」

べっこうとね。だから今は人間の爪で弦楽器を演奏していた時代は過ぎてしまっているわけですな。……すばらしい歌をいろいろとお聞かせいただいて感謝します。

にこやかに語る総書記に向かって、黒竜江省の１幹部が言葉をかけた。

「総書記同志、琴をもって中国の名曲をいま１曲演奏してご覧に入れたいのですが、いかがでしょうか」

「他の歌ならともかく、中国の名曲なら、どうして時間を惜しみましょうか。聞いてみましょう」

彼は喜んで女性演奏家に目くばせした。

琴独特の音が流れ出し、聞く人たちの興趣をそそった。

ところがメロディーに耳を傾けていた総書記が、幾小節も聞かずに、これは中国の名曲ではない、と言った。

思いがけない指摘に人びとは驚いた。舞台の演奏者たちも同様だった。

総書記は笑って言った。

これはイギリスの名曲です。

「あっ、そうですか。わたしはずっと、中国の名曲だとばかり

思っていました」

　総書記の深い音楽的造詣に舌を巻いた中国人幹部は、てれくさそうに頭をかいた。

3　献身の足跡

「旧石器問題、研究してみること！」

金正日総書記が金日成総合大学に入学してしばらくたったある日のこと。

朝鮮史の講義時間、教師は、朝鮮には旧石器時代が存在しなかったとして、新石器時代から話を始めた。

総書記の胸には、以前伏せておいた疑問が蘇った。

高級中学時代の１時期この問題について深く考え、同窓生と論争したこともあったが、結論が得られず、そのままにしていたのである。ところが今また大学の講義で旧石器時代が朝鮮にはなかったと断定されてみると、じっとしていられなかった。

総書記はノートにこう書き込んだ。

「旧石器問題、研究してみること！」

その数日後の1960年９月29日、学生たちの間で朝鮮に旧石器時代が存在したか否かという問題をもって熱い論争がたたかわされた。ここではいろいろな意見が出されたが、誰一人明確な論拠を持って討論していたわけではなかった。

彼らの主張に耳を傾けていた総書記はこう言った。

――君たちは大変重要な問題をもって論争しているが、朝鮮に旧石器時代が存在したか否かについて正しい理解を得るために

は、必ず主体的立場に立って問題を考察すべきだ。今、一部の考古学者は朝鮮で旧石器時代の遺物が出土していないとして、旧石器時代が存在しなかったと主張しているが、これは科学・理論的に極めて誤った見方である。以前、日本帝国主義の御用学者たちは、朝鮮半島に旧石器時代の遺跡がないとして、朝鮮には旧石器時代がなかった、従ってその当時人間は住んでいなかったと主張した。彼らの主張は、朝鮮民族の〝劣等性〟を〝論証〟するために意図的になされた荒唐な論理である。旧石器時代の遺物が発掘されていないとして朝鮮に旧石器時代が存在しなかったと見るのは早計だ、東アジアのさまざまの地域で旧石器時代の遺物が少なからず出土しているが、それらの中には朝鮮人居住地域に近い所がかなりある。そうした遺跡は、朝鮮の近辺地域における旧石器時代人の存在を語るものだ。だから朝鮮の旧石器時代問題については、その遺跡がまだ発掘されていないだけのことで、太古の昔から朝鮮に人間が住んでいたという見地に立って考察すべきである。

総書記は、旧石器時代の遺物がまだ発見されていない原因も一部史学者の事大主義的観点と結びつけて考察し、朝鮮の旧石器時代の存在に関する問題は、必ず主体的立場に立って考察すべきだとして、こう続けた。

「そうしてこそ旧石器時代の遺物や遺跡も多く探し出すことができ、わが国の旧石器時代についての科学的な理解を得ることができるのです」

総書記の指摘はただちに学部から全大学に、更に社会科学院の

考古学者たちにまで伝わり、大きな波紋を起こした。

国際的に名の知られた考古学専門家たちも斬新、ユニークな総書記の主張に共感し、旧石器時代問題の解決に取り組みはじめた。

彼らは数次の学術セミナーをもって解決策を討議し、旧石器時代遺物の調査発掘隊を組んで各地へ送る措置を講じた。

その３年後、咸鏡北道先鋒郡屈浦里（当時）で旧石器時代中期の遺跡がまず発掘され、さらに数年後には平壌市祥原郡（当時）コムンモル洞窟で旧石器時代前期の遺跡が発見された。引き続き、平安南道徳川市勝利山洞窟と平壌市力浦区域その他で旧石器時代旧人の人骨化石と多くの遺跡が出土した。

フグの仇敵

1964年５月23日、金正日総書記は同志たちと連れ立ってある海辺で釣りをした。みんなうきうきとして釣りに興じた。

魚の種類は多く、フグもかなりかかった。

彼らの中にフグを初めて見る女性がいた。

足先でちょっと触れても腹がボールのように膨れ、パカッパカッと妙な音を出す魚。……

彼女の驚く様子に総書記は、あなたは山家育ちだからフグのような魚については何も知らないようだね、と言った。

「はい、初めて見ます。パカッパカッと妙な声を出して鳴く魚もいるもんですね」

総書記は笑ってフグについての笑い話がある、誰か話してあげないかと言ったが、誰一人知る者がなかった。

彼女は好奇心にかられて、その話をぜひ聞かせて欲しいと総書記にねだった。

「じゃ仕方がない。そんなに聞きたいなら話してあげよう」

総書記は話を始めた。

――以前はフグの朝鮮語表記が「복아지（ポクアジ）」であったが、いつしか発音通り「보가지（ポガジ）」と書かれるようになった。フグは日本帝国主義の朝鮮占領後より広く知られるようになった。日本の侵略者は朝鮮の美味な魚を手当たり次第に捕って日本へ持ち去った。ある時、彼らはこの奇妙な形をした魚を見つけて、珍しそうにいじくりまわした。怒った魚は空気を一杯吸い込み腹を大きく膨らませてぴちぴち跳ねては、パカッ、パカッと小さい口を鳴らした。

「なにっ、おれたちに向かって馬鹿だと？」

癇癪を起こした彼らは、フグを日本を侮辱するけしからん魚だとののしり、見つけ次第踏みにじって殺した。結局、日本帝国主義は朝鮮のフグの仇敵となった。……

みんなは腹をかかえて笑った。

総書記は話を続けた。

――フグについてのこの笑い話には一つの哲学、真理がこもっていることを知るべきだ。それは、罪を犯した人間には常に不安がつきまとって離れないもので、盗人は人を見ると、自分を泥棒と見ているのではないかとびくびくし、なんでもない自然現象を

見ても驚くものだ。フグが日本帝国主義に「悪態」をついたという笑い話が生まれたのは、朝鮮人民の反日闘争が激しく展開されていた頃だ。いかに魚が怜悧であっても日本語が分かるはずがないし、彼らを見分けることもできはしないのだから、日本帝国主義をののしることもありえないではないか。とんまな人間でないかぎりどうして魚の鳴き声を悪態と見なすだろうか。抗日革命闘争時代に日本軍警が何か異常な自然現象を見ても、金日成パルチザンが現われたと仰天し、ぶるぶる震えたという伝説じみたさまざまの実話も、ほかならぬ日本帝国主義者の口から出たものだ。

米軍情報収集艦の末路

米軍情報収集艦「プエブロ」号拿捕事件によって、朝鮮半島には一触即発の情勢がつくり出された。

1968年２月２日、金正日総書記は関係者たちに、アメリカの戦争挑発に万端の対応策を取るよう指示した。

総書記は、アメリカの盗人たけだけしい挑発によって、いつ戦争が勃発するか知れない緊急事態が生じた、戦争を恐れる修正主義者は朝鮮で戦争が起これば大変なことになるとして、われわれに「プエブロ」号を静かに送り返すよう勧告しているとして、こう語った。

「これは、アメリカ帝国主義者に譲歩せよということだが、わ

れわれは絶対にそうはできない。アメリカ帝国主義に対する譲歩はとりもなおさず屈従であり、投降です」

総書記の言葉は続いた。

――人民軍は「プエブロ」号をアメリカの領海上で捕えたのではない。わが国の領海を侵してスパイ行為を働いたから拿捕したのであり、したがってわれわれがアメリカにへつらい譲歩することなど夢にもあってはならない。アメリカ帝国主義に対するわれわれの立場と態度は明瞭で、不動だ。わが国の自主権を侵害し、わが国の領海に侵入してスパイ行為を働いた者たちは、それが誰であろうとも、わが国の法に従って処理すべきである。これは誰も否定できないわが共和国の自主的権利である。金日成同志がおっしゃっておられるように、もしアメリカがその罪を謝罪せず、不当な口実をもってわれわれに　報復　するならば、われわれもまた報復するであろうし、彼らが全面戦争を起こすならば、われわれも全面戦争をもって応えるであろう。……

結局アメリカは、その年もおしつまった12月、朝鮮民主主義人民共和国政府に正式に謝罪文を提出し、朝鮮は「プエブロ」号の乗組員を共和国の境外へ追放することで事件の幕は閉じた。

それから数十年経った1995年２月５日、某海軍部隊を視察した総書記は、軍港に抑留されている「プエブロ」号を見、艦の保管状況についての説明を受けた。そして、「プエブロ」号をこの軍港につないでおかずに、百数十年前、アメリカの侵略船「シャーマン」号を焼き討ちして沈没させた大同江（テドン）の岸に係留することにしよう、そうして、アメリカ帝国主義侵略者は百数十年前からわ

が国を侵略している、1866年には侵略船「シャーマン」号を大同江に侵入させて略奪行為を働き、あげくの果てに水葬された、1968年には情報収集艦「プエブロ」号を侵入させてスパイ行為を働き拿捕されたとして、アメリカの侵略的罪業を歴史的に暴露すれば、軍人や青少年の反米思想教育に有益であると語り、こう続けた。

「わが人民は『プエブロ』号という話を聞きながらも実物は見ていません。『プエブロ』号を軍港に係留しておくだけではなんの意義もありません」

総書記は、ここは軍港だから誰もが入って見ることはできないとして、「プエブロ」号を大同江に曳航する具体的な方途を教えた。

こうしてアメリカの武装情報収集艦「プエブロ」号は拿捕されてからおよそ30年後、大同江の岸に係留されたのである。

遺言を残すわけにはいかない

久しい歳月、人類と共に発展を続けた芸術部門には切実に解決を待たれる一つの懸案があった。

舞踊表記法がそれで、他の芸術作品は楽譜や台本などで後世に正確に伝えることができるのだが、舞踊作品は難題中の難題として残されていたのである。

金正日総書記は世界の舞踊部門に残るこの問題に深い関心を寄せ、創作家たちに解決方途を見出すよう課題を与えた。

舞踊専門家たちは長年苦心を重ねて表記案を作成したが、複雑多様な舞踊動作を正しく表現できなかった。

総書記は、1973年９月21日、万寿台（マンスデ）芸術団の創作家、芸能人たちと席を共にして次のように語った。

――現在作成されたという舞踊表記は、どの誰も理解できないと言っているので、全く実用性がない。こんなレベル、こんな状態の舞踊表記法を後代に残すわけにはいかない。完成された科学的な舞踊表記法がなければ、われわれが苦労して作り上げた舞踊『雪が降る』『祖国のツツジ』『リンゴの豊作』『箕の踊り』のような名作も後代に正確に伝えられないということになる。そんなことでは歴史的な恥辱となるだろう。舞踊表記法は労働党時代に完成しておくべきである。これはわれわれの果たすべき歴史的課題である。われわれはこの課題を誇らしくやり遂げなければならない。決心すればできないことはないというのが、革命家の信念であり、意志である。われわれには党によって教育、育成された人民俳優や創作家たちがいる。研究を一人か二人に任せて手工業的に行うべきではない。強力なチームを組んで集団の知恵を発揮するようにすれば、十分短期間に完成できるだろう。世界的に解決できないでいるものをわれわれが解決し、われわれの子孫だけでなく、後代の人類に残さなければならない。われわれが解決できずに「孫子たちよ、舞踊表記法はわれわれが解決できなかったから、おまえたちがきっとやれ」というような遺言を残すことは絶対に許されない。……

総書記は最後に、人民俳優や功労俳優たちも舞踊表記法を作れ

ないと言うのなら、わたしが時間を割き、六カ月間、大学通信用テキストで舞踊技術の自習をしたうえで、じかに手をつけてみる、と冗談まじりに言った。

その後、強力な研究チームが組まれて、再び集中的な研究が進められた。

総書記は、科学的な検証法をもって表記法のささいな欠陥も見逃さずに指摘し、補充・完成するようはからうなど、彼らの研究を精力的に指導した。

こうして舞踊表記法は立派に作成されて出版・公表され、科学映画も作られた。それはパリのユネスコ事務局に送られ、大きな反響を呼んだ。

田野におけるスポーツ競技

稲の取入れがたけなわの1974年10月６日、青山里（チョンサン）を訪れ、稲穂がそよぐ田野を見渡していた金日成主席は、農場管理委員長にヘクタール当たり予想収量はどれほどかと聞いた。その返答にたいそう満足して、よくやった、青山里が全国に先駆けて凱歌をあげることになったと高く評価し、稲刈りはいつ終了する予定かと尋ねた。

稲の取入れを早く済まさなければと、それにばかり気を使っていた彼女は、後先も考えず、朝鮮労働党創立記念日の10月10日までに終えます、と答えた。

「10月10日……、ひとつやってみなさい」

主席はこう言って、農場を後にした。

その夜、彼女は頭をかかえた。

刈り残された田地の大きさからして、残る４日間に稲の取入れを全部終えるのは到底不可能であった。

彼女のあせりは農場員たちにも伝播し、みな心配した。

そんな時、自動車がヘッドライトを照らしながら長蛇の列をなして村に入って来た。

驚く管理委員長の前で、先頭車が止まり、青山里にしばしばやって来る芸術部門の幹部が車から飛び降りた。

「管理委員長同志、親愛なる指導者同志がわれわれを急遽こちらへ寄こして下さいました」

と挨拶した彼は、自分たちが大挙してやって来たいきさつを話した。

金正日総書記は青山協同農場管理委員長が10月10日まで取入れを全部終えると金日成同志に約束したが、農場員と当地の支援労働力だけでは困難だろうと案じ、こう言った。

「明後日から始めることになっている芸術部門と出版・報道部門のスポーツ競技大会を明日から始めることにし、最初の競技の一つに青山協同農場の稲刈り戦闘競技を入れるのです。

大会に出場する選手と応援団を青山協同農場の稲刈り戦闘競技に全員参加させることにしましょう」

総書記は、１本の稲穂も落ちこぼしてはならず、そのような団体は次の競技への参加権を剥奪するというルールを定め、競技判

定員たちの名も指名した。

こうしてスポーツ競技史上例のない青山里稲刈り戦闘競技が第１番目の種目として設定され、競技大会に出場する全選手と応援団員を乗せた大規模の自動車行列が、稲刈り戦闘競技場へ押しかけて来たのであった。

結果、青山里の稲刈りは10月10日まで立派に完了した。

どこから送られたセメントか

1974年12月28日、金正日総書記は信川（シンチョン）郡花山（ファサン）協同農場畜産作業班の新築なった畜舎を訪ねた。

１年前農場を訪れた総書記の指摘で、古い畜舎を崩して建て直したものであったが、屋根は以前と同様藁ぶきだった。前から顔なじみの管理委員長に、総書記は尋ねた。

「管理委員長さん、改築したというのはこの畜舎ですか」

「はい、そうです」

きまり悪そうに答える彼に向かって総書記は、畜産業は農場で変わることなく行うべき基本部門の一つだから、畜産にいっそうの力を入れ、畜舎をもっと立派に建てるべきです、それにはこの藁ぶきの屋根を瓦ぶきに変えなければなりません、と言った。

それからしばらく経ったある日、鉄道貨物駅から思いがけない通知が届いた。

農場宛てにセメント一貨車分（60トン）が届いたから受け取る

ようにというのである。

みな何事かと驚いた。

セメント購入の手配をしたことは別になかったのである。しかし、干天の慈雨とばかりに、みんな大喜びした。

総書記の指摘で建て直した畜舎は、セメントがなくて土ブロックと木材をもって建てたので、やはり見栄えがせず、総書記にまたまた心配をかけたとして、みんな残念がっていた。そんな矢先のことで、どこから送られたのか分からないセメントを確認もしないで使うのは一応はばかれたが、とにかく自分たちの農場に宛てて送られて来たのだからということで、セメント造りの畜舎の建設に取りかかった。

それ以来、農場では〝出所不明のセメントで建てた畜舎〟という言葉が代名詞のように使われた。

彼らがこのセメントについてのいわれを知ったのは、かなり後のことだった。

あの日、畜舎を見て帰った総書記は、土ブロックと木材で建てた畜舎が長持ちするはずはない、この際花山里にセメントを一貨車分送ることにしようと言って、出所を明かさずセメントを送ったのである。

正真正銘の間抜け者

1979年8月9日、外国製治療体育設備の展示品をいちいち注意深

く見た金正日総書記は、これらは患者の治療に使う前に技術的特性を確認したうえで、朝鮮人の体質に合うものだけを利用し、そうでない物は使ってはならない、今、ある人たちは、どこそこの国で作ったもので評判がよいと聞いただけで、つぶさに検分もしないで導入し、由々しい結果を招く例がしばしばあるとし、一幹部に、外国のものを見境いなく崇拝する人のことを何と言うのか、とさりげなく聞いた。

「事大主義者と言います」

総書記は、では事大主義者を指してなんというのかと聞き直した。

「え？…」

彼は返答に窮した。総書記は答えを待たずに、笑って言った。

「事大主義者は正真正銘の間抜け者どもです」

〝密林の中の兵器廠〟

平壌光復（ピョンヤンクァンボク）通りの建設が進んでいた1986年７月２日、金正日総書記は提出されたある文書から目を離さず、深刻な表情で**「えらい大金ですね」**と言って、文書を脇に押しやった。

それは、第13回世界青年学生祭典の開催準備に要する建設対象用輸入資材の明細書であった。

個々の対象が要求するものは１、２にすぎないが、260余の対象をすべて合わせるとなると、容易な額ではない。

（金正日同志はなんと決心されるだろうか）

総書記に呼ばれた幹部は気が気でなかった。

立ち上がって室内を行きつ戻りつしていた総書記は、やがて微笑をたたえ、以前金日成同志が聞かせて下さった〝密林の中の兵器廠〟についての話が思い出されるとして、こんな話をした。

――金日成同志は、革命活動の中心舞台を豆満江（トウマン）沿岸に移した時、間島地方の革命家たちがソ連に手榴弾工場を建てて欲しいという請願書を送ったことを知った。

しかし、ソ連からはなんの返答ももらえなかった。

金日成同志は、誰がわれわれにただで手榴弾を提供してくれようか、われわれは手榴弾を自力で作らなければならない、すべて自力更生をもって朝鮮革命の勝利を遂げなければならない、と決心し、馬村の谷間に鉄工所を設ける措置を講じた。この鉄工所は後日、〝馬村兵器廠〟あるいは〝小汪清兵器廠〟と呼ばれた密林の中の兵器廠であった。その兵器廠でのちに広く世に知られるようになった　延吉爆弾　が製造され、日本軍警を無数に殺傷した。……

話し終えた総書記は、金日成同志は〝延吉爆弾〟についての話をして下さった後、わたしに朝鮮革命が勝利するまで　延吉爆弾　のことを絶対に忘れず、自力更生の革命精神で生きるようにと言われた、わたしはわれわれ幹部たちが自力更生しようとは考えずに何々を出してくれと手を出すたびに、延吉爆弾　を思い起こす、と言った。

２日後、総書記は平壌市建設部門の関係者たちを呼び、彼らを伴って全国３大革命グループ技術革新展示場におもむいた。

そこには自力更生によって作られた創案品がいろいろと展示されていた。展示品の中には、輸入を計画していた物が少なくなかった。

それらを一つ一つ見て回りながらみんなは、深くおのれ反省し、必要な設備・資材をいくらでも自分たちの力で生産できるという確信を抱いた。

ところが、総書記はそのような彼らを見回して、みなさんが要求した外貨は全額支出することにする、と言った。みなけげんな表情をして顔を見合わせた。

総書記はそんな彼らに尋ねた。

「お金をもらったらどう使うつもりですか」

その一人が、対象建設に要する設備・資材を基本的に自力で生産し、すぐに生産することが困難な設備・資材だけを輸入したいと言った。

総書記は、祭典用建設対象に使われる設備・備品の購入には原則的に反対するが、仕上げ用建材工場と建具・金具工場の新設に資金を使うことには絶対賛成だとして、こう言った。

「外国から建築資材を輸入する場合にも、できるかぎり建材工場の建設に必要な設備・資材を輸入し、建材を自力で生産して使うようにすべきです。自分たちの建材工場を建てずに建材をただ輸入して使うだけでは意味がありません。今度大きな対象を建てながら新しい建材工場が一つ生まれたという賞賛の言葉を聞くのが本当であって、建設を終えたあと、空手しか残らなかったという言葉を聞くようではいけません」

彼らは一様にうなずき、もらった資金をもって、どんな膨大な建設も自力でやってのけるだけの強固な土台を必ず築きますと誓った。

総書記は、**「よろしい。建設をどんどん進めるに足る〝密林の中の兵器廠〟が多くなければなりません」**と力をこめて言った。

地下の名勝――龍門大窟

1996年３月26日、開発を終えて間もない鐘乳洞――龍門（リョンムン）大窟を訪ねた金正日総書記は、龍門大窟がすばらしいということを聞いて見に来たと言って、出迎えた管理所の幹部たちと挨拶を交わした。

龍門大窟の開発を終え、一般に公開したものの、見学コースのここかしこに岩水がしたたり落ち、床は水でじめじめしているという報告を受けた総書記は、それは当然であろう、地上と同じはずはないと言った。そして総合案内図の前で講師（解説員）の説明を聞いた後、洞内に入った。

鐘乳洞の最後のコースは龍門広場であった。

広場の総面積が3600平方メートルだという説明を聞いた総書記は、実に壮大だ、実際に見なくては、洞内にこんな広場があろうとは想像もできないだろうと言い、見学はここで終わるのかと聞いた。

一幹部が、コースが険悪でお見せできなかった支洞がいくらか

あるにはあるが、それらを除けば全部見ましたと答えた。

総書記はちょっと惜しそうに尋ねた。

「龍門大窟に支洞は全部で幾つありますか」

「２本の本洞に30余の支洞があります」

総書記はうなずいて、見学コースがこれで終わりだと聞いて何かもの足りない思いがしたが、説明を聞いてなるほどと思い安心したと言った。

そして、学術的に言えば、鐘乳洞は支洞の発達した洞窟とそうでない洞窟に大別される、世界的に見て、大きい鐘乳洞は支洞が多い、今日見て歩いたところでは、龍門大窟には名所ごとに深さのはかり知れない垂直洞があり、支洞も多い、これはたいそう興味がある、外国のある鐘乳洞は支洞が多く、調査研究を深めた結果、巨大な洞窟の規模が解明されたという、この鐘乳洞もそれにひけを取らないであろう、このように水平洞と垂直洞が処々に交差しているのは、支洞がまだまだ多いだろうということを示唆している、と言ってこう続けた。

「龍門大窟の調査がまだ完了しておらず、その終点がどこか分からないと言うが、地質調査の専門家たちを動員して洞内の調査をいっそう深め、龍門大窟を総合的に開発する案を作成すべきです」

総書記は随員の一人に、龍門大窟を見た感想はどうかと尋ねた。

あまりにすばらしくて何度でも来て見たいほどですという返答に、世界の名勝をいろいろと見たあなたがそう言うのを見ると、わが龍門大窟が名実共に世界的な地下名勝に間違いなかろうとして、**「対外活動部門の人たちはこのようなものを見たことがない**

ので、外国で鐘乳洞を見ると珍しい思いをするのです」と言った。

そして、今一部の人たちはわが国にこんな立派なものがあるとも知らずに、外国のどの山がどうの、どの鐘乳洞がこうのと言っているが、それはみな愛国心に欠けていることの表われだ、世界には特に名高い鐘乳洞が二つある、それらの鐘乳洞には名所が数百メートルに一つ、なかには数10キロメートルに一つあるという程度で、世界的な基準とされる万物が全部揃ってはいない、ところが、龍門大窟には短い区間内に名所が集中しており、国際的に指定されている11個の石灰石万物がすべて揃っており、歴史もたいそう古い、特に地下の広場と地下の滝は世界的なものだ、と語った。

総書記は、このような点を例を挙げて見物人たちに対照的に説明する必要がある、そうすれば、彼らの民族的自負と愛国心を高めることができる、と強調した。

かなり時間が経ち、鐘乳洞の外へ出た総書記は、早くもっと多くの人たちに見せよう、「苦難の行軍」を続けているわが人民にこのような所を見せれば、どんなに喜び、力をつけるだろうかとして、こう続けた。

「これまで龍門大窟の見学者数がおよそ１万名を数えたということだが、今後もっと多くの人が来て見るようにすべきです。そうしてこそ、わが国がいかに美しく誇るに足る国であるかをよく知り、愛国心を深めるようになるでしょう」

記念撮影は軍人たちと一緒に

1997年５月１日、金正日総書記は朝鮮の名山の一つ九月（クウォル）山のリゾート建設現場を視察した。

昨年秋にも来て見た所で、普請中の道路は険悪であったが、総書記は険しい山道を歩いて建設状況をいちいち確かめていった。

見学コース道路の普請はどれほどはかどったか、最近九月山にやって来るハイカーは多いか、彼らはどのようなコースを取って来るのか、休息はどこでどのように取っているのか。……

総書記は、ふと、九月山には水がどこどこにあるのか、と聞いた。水は総書記が昨年初めてここへ来た時、最も関心を向けた問題であった。

九月山と金剛山に違いがあるとすれば、恐らく九月山には水が不足していることだろうとして、九月山の景勝がいかにすぐれていても、水がないと見ごたえがしない、ここに休養閣を建てても運営はおぼつかないだろうから、必ず水源を探し出すようにと、その時強調したのであった。

建設を指導する人民軍指揮官が、七つの谷間で水源を見つけたとして、地図を指して報告した。

総書記はたいそう喜んだ。

――どうだ。わが国はどこへ行っても水のないところはない。それでわたしは去年ここへ来た時、九月山にも必ず水があるはずだ、と考えて、諸君に水源を探すよう任務を与えたのだ。その間

水源を探すためにご苦労だった。……

四皇峰（サファン）に登った総書記は下山の途次、工事中のある施設物を指して尋ねた。

「あれはなんですか」

「３兄弟の滝とその一帯を見渡すための亭です」

総書記は喜び、３兄弟の滝はどこにあるのか、行って見よう、と言った。

「まだ道路を作っていないので行くことができません」

総書記は惜しそうに、今後九月山にやって来るハイカーたちがみな３兄弟の滝の見物ができるよう道路を早く作ることだとして、**「見学コース上のすべての道路を早く完成しなければなりません」**と言った。

そして、九月山の名勝区域と水源地の調査にもっと力を入れて、すぐれた名所や登山の適地をより多く開発し、ハイカーたちがそれらを俯瞰して楽しめるよう名勝ごとに亭も建て、飲料水源ももっと探してみるよう、激励した。

総書記は龍淵（リョンヨン）の滝の前でも、ハイカーたちがここで休息し、澄んだ水を飲めるよう水質検査をきちんとして適切な対策を立てるようにと言った。

いつしか日が西に傾いた。

指揮官たちが、景色のよいこの龍淵の滝を背景にして記念写真を撮られてはと勧めた。

総書記は、今軍人たちが九月山を人民の憩いの場として立派に開発すべく汗水垂らして働いている、そんな建設場を横目で見な

がら写真を撮るのはよくない、九月山が人民の楽しい憩いの場として立派に作り上げられたら、その時に来て軍人たちと一緒に記念写真を撮ることにすると言った。

民族史に残る傷

1997年９月23日、金正日総書記は九月山（クウォル）の月精寺（ウォルチョン）を訪れた。

1000余年前に建てられた月精寺は、歴史が古く、かなり大きな寺だ、この建物が今も無傷で保存されているのは大したことだ、と言いながら歩みを移していた総書記は、仏像の前で立ち止まり、像にしげしげと見入った。

随員たちはどうしたのだろうかと思って仏像を見直すと、眉間に小さな傷があった。しかし彼らは、昔の仏像はみなそんなふうに作られたのだろうと独り合点して、歩き出そうとした。

ところが、総書記はなおも動こうとしなかった。

一行を案内していた講師（解説員）が、総書記の胸中を察して説明した。

「極楽宝殿と冥府殿の仏像の眉間には金の白毫（びゃくごう）が嵌め込んでありましたが、日本人がそれらを剥いで持っていったため、そこに傷が残ってしまいました」

人びとは驚き、憤慨した。

顔をそむけて遠くの空を見やっていた総書記は、月精寺の極楽宝殿と冥府殿の仏像の眉間の金の白毫を日本人が持ち去ったと

いうが、彼らはわが国を占領して多くの貴重な文化遺産を強奪した、と怒りを込めて言った。

やがてゆっくり歩みを移した総書記は、いつか日本に行って来た党中央委員会の一幹部が、日本のある民俗博物館に陳列されている歴史遺物の60％が朝鮮から略奪していったものだったと言っていたとして、こう続けた。

「われわれは、将来、日本帝国主義者がわが国から盗んでいった文化遺産をすべて取り返さなければなりません」

待った１時間

1998年6月１日午前、現地指導を終えた金正日総書記は、慈江（チャガン）道党責任書記に、午後勲功国家合唱団と軍部隊芸術宣伝隊の祝賀公演を観覧する労働者代表たちは何時頃到着するのかと聞いた。

「昨日、指示したとおり、道内の主要工場・企業の労働者代表を選んで送るよう手配しました。ところで…」

責任書記は言葉じりをにごした。

総書記は今回の道現地指導に際して、「苦難の行軍」突破戦で全国の先頭に立っている道内の労働者たちに、勲功国家合唱団と軍部隊芸術宣伝隊の公演を見せて、彼らに更なる力と勇気を与えようと計画していたのであった。

こうして祝賀公演は午後３時、熙川（ヒチョン）市の某連合企業所の文化会館で催すことに決められていた。ところが、いくら考えてみて

も遠方の一部労働者代表がその時刻に到着できそうになかったので、道党責任書記は困惑していたのである。

彼の口ぶりに不審を覚えた総書記は、どうしたのかと尋ね訳を知ってしばらく考えた。

道党責任書記は余計なことを言ってしまったと後悔した。何人かが公演に遅れたとしても是非もないではないか、と。

「将軍、公演を予定どおり３時に始めるように致します」

ところが、総書記は、彼らが３時まで到着できないようなら、公演を午後四時に始めようと言った。

「１時間も延ばしたら、将軍の午後の日程が…」

恐縮する道党責任書記をなだめるように、総書記は言った。

「これは江界（カンゲ）精神、慈江道の人たちの働きぶりの創造者である労働者たちを祝賀するために行う公演です。彼らが参加しない公演は意味がありません。忙しいけれども待って労働者たちがみんな集まってから公演を始めましょう」

「将軍、本当にありがとうございます」

軍隊が先に投げたボール

全国がバスケットボールブームに沸いていた時期の1998年の夏、人民軍の政治幹部たちがボールを持ってそれぞれ駐屯地域の学校を訪れた。

彼らは教職員たちに、最高司令官同志から贈られたボールだか

ら、生徒たちのバスケットボールの腕を上げるのに役立てて欲しいと言ってボールを贈与し、次のような話をした。

その年の８月27日、金正日総書記は、人民軍指揮メンバーを呼び、人民軍にバスケット用ボールを10万個ほど送るから、それらを全国の学校に贈与してもらいたい、と言った。

意外な言葉に彼らは驚いた。

当時は、人民軍はもとより、全国がバスケットボールに熱中していた頃で、どこでもボールの不足をかこっていた。そんな時に高級のボールを現在の供給網を通して配給すれば、横流しなどの不正行為が生ずる恐れが十分にあるだろうから、学校には人民軍がボールをじかに持っていって配るよう配慮したものと彼らは自分らなりに憶測した。

そんな彼らを見回して、総書記は言った。

――ボールをわたしの名で直接学校へ贈ることもできようが、人民軍の名で持って行けば、軍民関係がいっそう緊密になるだろうと考えて、みなさんを呼んだ。中隊政治指導員をはじめ部隊、区分隊の政治幹部たちが、それぞれ駐屯地域内の学校へ持って行き、ボールを意義深く贈与することで、「われらの学校、われらの軍営」運動をいっそう活性化し、軍民関係を一段と改善するすぐれた契機とならせるようにすることだ。……

こうして人民軍の政治幹部たちがボールを持って全国の学校を訪問したのであった。

その後、ボールの贈与行事が立派に行われたという報告を受けた総書記は、満足した。

「今年は、人民軍が軍民関係のボールを先に投げ、それが今、社会の手に渡りました。今度は社会がそのボールを人民軍に投げ返す番です」

これは単なる賞賛ではなく、軍民一致の美風も軍隊が先に開花させなければならないという、意味深い配慮だったのである。

「ただではない」

1998年10月１日、大紅丹郡（テホンダン）総合農場を訪れてジャガイモ栽培の実態を確かめた金正日総書記は、農場のジャガイモ研究所に立ち寄り、視察の途中、当郡内に複合微生物肥料の生産工場があるのかと聞いた。

郡の責任幹部が、複合微生物肥料の実験生産に着手してはいるが、技術者がいなくて困っていると答えた。

「ふうむ」

しばらく考えていた総書記は一人の随員に向かって、大紅丹郡が複合微生物肥料の生産を実験的に行っているが、技術者がいなくて困っているそうだ、ひとつ、われわれが助け船を出さなくちゃ、複合微生物肥料工場用輸入設備を大紅丹郡に回してあげようと言い、大紅丹郡では水肥と複合微生物肥料をもってするジャガイモ栽培法の確立に努めなければならないと強調した。

責任幹部は大喜びした。

「将軍、本当にありがとうございます」

「しかし、それはただではない。代価はジャガイモで払わせる」

厳粛な表情を見せてこう言った総書記は破顔一笑した。

みんなも愉快そうに笑った。

「ブタ宮殿」

1998年10月20日、熙川（ヒチョン）旅館に立ち寄った金正日総書記は、支配人以下全従業員が「苦難の行軍」期間、困難にめげず多くの実績をあげたとして、高く評価した。

野菜畑を見て歩いていた時、支配人が、あれは新型の温室豚舎です、一度ご覧になっていただけないでしょうか、と言った。

「支配人が見てくれというなら、見なくちゃ」

総書記は気さくに答えて、先頭に立った。

まわりの人たちがあわてて、そこは臭いがよくないから見合わせるように、と進言した。

総書記は、臭いがどうだと言うのだ、かまわないから見よう、と言って２号豚舎の中へ入った。

内部を注意深く眺める総書記に向かって支配人が、この豚舎は温室化された小ブタ用豚舎で、天井にはビニールフィルムを張り、ブタ小屋の上は野菜畑になっていて、空気が澄み温かくもあるので、小ブタが肺炎にかかる恐れがなくてよく育つ、排泄物は床下から外へ送り出されているので、舎内は常に清潔が保たれていると、説明した。

総書記は笑って、これもまた新しい方式だと言い、随員たちを見回した。

「豚舎がとても清潔です。まるでブタ宮殿のようです」

「大いに自慢すべきです」

1999年１月11日、国家科学院を現地指導した金正日総書記は、電子工学研究基地へ向かう途中、ある幹部に**「研究所のコンピューターはどんな機種のものですか」**と尋ねた。

彼はちょっと考えた。

いろいろなコンピューターをあれこれ比較しながら説明するには、かなり時間がかかるからである。

彼は、どうしたものかと思いながら、ともかくＳＡＮクラスですと答えた。総書記は、**「ああ、ＳＡＮクラスのコンピューターですか。なるほど」**とつぶやいた。

ある研究室に入り、室内を見て歩いていた総書記は、設計プログラム一式を備えたコンピューターの前で、**「このコンピューターのプログラム容量はどれほどですか」**と聞き、**「プログラム容量が四ギガバイトなら作業空間は残る四ギガバイトほどになるでしょう」**と言った。

総書記はついで、一青年科学者が操作しているコンピューターの前で、彼がある先進国で開発したハイレベルのプログラムを自力で解釈し、自分たちの研究に利用できるよう完成させたという

説明を聞いて、満足した。

「そのプログラムを一度見てみよう」

研究士はうろたえ、とまどった。総書記は、落ち着いてコンピューターを操作しなさい、メニューを見ましょうと促した。

緊張がいくぶんほぐれた研究士は、画面にメニューを顕示した。

「ライセンスを取り出しなさい」

……

「次、ソースを取り出しなさい」

……

研究士は指示どおり、そのつどコンピューターを操作した。

腰をかがめて画面を注意深く見た総書記は、これではなく画面を二つに分けて、一方には解読していないプログラムを、他方には解読したプログラムを対置させてみなさい、と言った。

研究士は言われたとおり、プログラムを画面の両側に対置させた。

総書記は顕示された内容を一行一行検討してから**「スクロール」**と言った。

次の画面が展開された。総書記は微笑して、**「実に大きなことをやりました」**と言って、研究士の肩を叩いた。

この日、長い時間をかけて幾つもの研究所と研究室を見たあと、総書記は別れを告げて車に乗ろうとした。その時、「将軍！」と、国家科学院の責任幹部が声をかけた。

ドアを開けようとして振り向いた総書記に、彼は何か言い出しそうにしたが、口ごもった。

総書記は、どうしたのです、早くおっしゃいなさい、と微笑し

て言った。

彼は思い切ったように口を開いた。

「あの……、将軍がわが科学院に来られたことを、将軍の今年最初の現地指導だと思ってよいでしょうか」

「そうです。なぜそんなことを聞くのです」

「将軍が新年最初の現地指導としてわが科学院に来られたことを世間に向かって自慢したいと思いまして……」

総書記は豪快に笑った。

「みなさんが、わたしが新年最初の現地指導に科学院を選んだと、世間に向かって自慢したいと言っているが、今年に入って最初の現地指導を受けたと大いに自慢してよろしい」

顔のほっそりした歌手

1999年１月11日、勲功国家合唱団の公演を見た後、合唱団の今後の創作方向について話していた金正日総書記は、ふと思い出したように尋ねた。

「ところで、合唱団の一部の人たちの顔が見えません」

革命歌劇『党の真の娘』で細胞委員長役を務めた歌手が入院していて、今日の公演に参加できなかったという返答に、総書記はかぶりを振った。

「それは承知しています。そのことではなくて、高音側２列目にいた顔のほっそりした歌手が見えなかったのです」

それが誰なのか、誰にも見当がつかなかった。

人びとは早速、高音側２列目にいたというほっそりした顔の歌手とは誰のことかと思って調べてみたが、誰もがみな首をかしげた。高音部の歌手たちはみな、高音という語感にはそぐわない、丸顔か平たい顔をしていた。面長な歌手もいたが、顔のほっそりした者はいなかった。

（一体誰だろうか）

それからかなり経ったある日、合唱団に新入りの歌手たちの実態に関する説明を受けていた総書記が、ある歌手について尋ねた。

「その歌手は数カ月前他の芸術団へ異動しておりません」

「名前は何でしたか」

総書記はその名を聞いて、**「ああ、高音側２列目にいた歌手じゃないか」**と言った。

みな驚いてその顔を思い浮かべてみた。確かにほっそりした顔であった。

仙女峰

1999年８月30日、金正日総書記はある養魚事業所を現地指導した。

養魚場周辺の地帯的特性を説明していた幹部は、ある山を指して、あれは仙女（ソンニョ）峰という山だと言った。

「どうして仙女峰という名がついているのです」

総書記は興味をそそられて聞き返した。

「昔、天上の仙女たちが、清い水が湧き出るここの泉で水浴びをしに降りて来た峰だとして仙女峰と名づけられたそうです」

総書記はおかしそうに笑った。

人びとは何がおかしいのだろうかと首をかしげた。

総書記は笑いながら、今はあんなはげ山になって、天女が舞い降りて来ても、どこに隠れて羽衣を脱ぐだろうか、と言った。

爆笑が沸いたがそれは瞬間のことで、笑いはすぐに止まってしまった。総書記が一言のユーモアをもって、植樹を怠っている自分たちをとがめたことに気づいたのである。

総書記は言った。

――そうだ、木をたくさん植えて天女が安心して水浴びができるようにすべきだ。先祖たちが仙女峰と名づけたあの美しかった山の名を、今われわれが風致を汚して名称を変えるような始末になっては大変なことになる。……

申しわけない思いでしょげている当地の幹部たちに向かって総書記は、今度作られた養魚場のまわりに木を植えてはいるが、それはまだ小さすぎるし、周囲の山ははげ山ばかりだから養魚場の風致が秀麗だとはとても言えない、養魚場の構内と周辺の山に木をたくさん植えて、この一帯を木々が青々と生い茂るようにしようと強調した。

〝ポンプ味噌〟

1999年10月28日のこと。金正日総書記は一部の幹部たちを呼び、すばらしい見学対象があるから行って見ようと言った。そこはある基礎食品工場であった。

作り出される味噌の味を見た総書記は、若い女性労働者に声をかけた。

「家庭で作ったものと較べて、工場の味噌の味はどうかね」

彼女は頬を紅潮させてにこにこし、澄んだ声で答えた。

「将軍、ここで作った味噌は家で作ったものよりずっとおいしいです」

「そうかい。家のものよりもっとおいしいと言うんだね」

総書記がこう言って大きく笑った。随員も作業中の労働者たちも面白そうに笑った。

総書記はふと、誰にともなく尋ねた。

「テンジャン（味噌）はなぜテンジャンと言うのかね」

思いがけない質問に、みな顔を見合わせるばかりだった。

総書記はあまり簡単なことなので、かえってすぐには思いつかないのだろう、と言ってこう続けた。

「テンジャンのテンはかたいという意味だから、かたいジャン（醤油）、つまりテンジャンなのだ」

総書記はこう言って朗らかに笑った。みんなつりこまれて笑った。

笑いがおさまると総書記は、だから味噌はかたければかたいほ

どいいと言い、続けて「**ところが、これまで工場で作られた味噌はあまりに水分が多く柔らかすぎるので、生ニンニクに付けて食べようとしても味噌が付かないから困ったものだった**」と語ってまたみんなを笑わせた。

それだけではない。以前、味噌があまりにも水分が多いのでポンプで吸い上げられている、として、軍人たちの間では〝ポンプ味噌〟などというジョークがはやったものだったと言って、からからと笑った。

それまで無邪気に笑いこけていた当の幹部たちは、はっとして、深い思いにとらわれた。

新築の基礎食品工場で上質の味噌が大量に生産されているのがうれしくて、兵士たちのジョークで痛めていた胸のしこりが取れたかのように、面白おかしく回想する総書記。……

「一日中こんな仕事をするのは大変だろう」

2000年１月28日、某軸受け工場を訪れ、作業場で、ベアリングの玉の分割作業に励んでいる若い女性組立て工の仕事ぶりをしばらく眺めていた金正日総書記は、

「**その仕事をわたしもちょっとやってみようか**」

と言った。その組立て工だけでなく、随員たちは驚いた。

総書記は彼らが引き止めるまも与えず、油のついた輪を手に取った。

それはベアリング組立ての最終準備作業で、輪の中に入った玉を同一間隔に並んでいる穴に分割して入れる作業であった。

総書記は玉を穴に入れようとしたが、どうにもうまくいかなかった。

「いやあ、これは容易じゃない」

総書記は笑って、随員の一人に、一度やってみないかと言った。彼もやはりうまくやれなかった。

他の随員たちも袖をたくし上げて試みたが同じことだった。ある者は輪を強く握って「えいっ、えいっ」と力んでみたが、その滑稽な仕草にみな大笑いした。

彼らの動作をにこにこと見ていた総書記は、どうだ、易しいように見えてもなかなか難しい仕事だ、と言って、組立て工に向き直った。

「ひとつ、わたしと一緒にやってみないかね」

彼女はあわてて手の油を拭おうとした。

総書記は、手に油が付いていたってかまうことはない、いいから早くやってみようと促した。組立て工の手に手を触れ合わせて、総書記は一振りしたが、やはりうまくいかない。

「将軍、このように…こうすればいいんです」

玉はたちまちのうちに穴に嵌まった。

「ふーむ、なかなかうまい。まるで玉が魔法にかけられたみたいだ」

笑ってこう言った総書記は、まじめな表情に戻って聞いた。

「一日中こんな仕事をするのは大変だろう」

「慣れていますので、それほどでもありません」

総書記は彼女の手を取り、これは単に技能に関する問題ではない、いかに熟練していても、一日中こんな作業を続けたら、夕方頃には腕が抜けるかのように痛むだろう、そうじゃないかねと言って、随員たちに向き直った。

――見なさい。わが労働者たちはこのように骨の折れる仕事をしていても平気だと言っている。労働者たちは家庭に電気が送られて来なくてもよい、工場にさえ電気が来ればそれまでだとして、ただ資材をくれと言っている。われわれ幹部はこのような労働者がいることに誇りをいだき、彼らの生活に気を配らなければならない。……

林産労働者の〝抗議〟

城干（ソンガン）林産事業所が位置する深い山あいに、一幅の絵を思わせる労働者村がある。

2000年８月31日、当地を訪れ、発電所や公共浴場それに遊戯場などまで備わっている林産事業所の処々を見て回る金正日総書記は、喜びを隠せず愉快な気分にひたっていた。

そんなところへ林産村の人たちが押し寄せて来た。

年配の１労働者が人びとをかき分けて総書記の乗用車の前に出た。見ると、車が泥水でひどく汚れていた。長雨時のことで、泥んこの道を走って来たせいである。彼はそれを見ると、たまら

なくなって、泥を袖で拭き取り始めた。頬が涙に濡れていた。

付近にいた随員があわてて近寄り、服が汚れます、車はまた泥道を行くのですから同じことです、およしなさい、と引き止めた。

労働者は〝抗議〟した。

「わしら労働者はな、将軍の車がこんなにも泥まみれになっているのを見ると、どうにもがまんがならんのだ。わしらの将軍はどういう方なんだ。先軍指導で国をお守りになり、今、わしら人民に楽園の道を開いて下さろうと険しい山々や峠を越えながら苦労なさっているのに、このわしの服がどうだと言うんだ。わしらの将軍が行かれる道のどこにもみな錦を敷いてあげたい。これがわしら労働者たちの心情ですよ」

彼は車輪に付いている泥まで手できれいに取り除いて静かに人びとの中に姿を消した。

夕方、随員からその事を聞いた総書記は、ハンカチで目頭を押さえ、しわがれた声で言った。

「なんとありがたいことだろう。考えてもみなさい。この世にわが国の人民のようにすぐれた人民がどこにいようか」

総書記は続けて、わたしは人民に必要な物をちゃんと与えられずにいるのに、彼らはわたしを心から思ってくれている、なんと申しわけないことだろうか、われわれは力を合わせていっそう発奮し、人民に一日も早く楽園への道を開いてあげよう、と力をこめて言った。

人民軍の功績

外国訪問から帰って幾日も経っていない2001年８月26日、金正日総書記は、人民軍軍人によって開発されたウルリムの滝を視察した。

かれた声　総書記はウルリム嶺に向かう道路の入り口で、出迎えた建設担当部隊の指揮官たちと挨拶を交わした。

九月山（クウォルサン）遊園地の建設に引き続き、ここで道路を拓き、名勝を開発するなど、大変だったろうとして労をねぎらった総書記は、腰に手を当ててウルリム嶺に向けてすっきりと伸びた道路を眺め、道路が大変立派だ、険しい山中に作った道路であるにもかかわらず、勾配もカーブも緩いうえ、幅もこれくらいなら広いとたいそう満足した。

部隊の１指揮官が工事計画図を前にして、道路の普請と名勝の開発状況を詳しく説明した。

説明が終わった時、総書記は尋ねた。

「喉がどうしてそんなにかれたんだね」

「え？」

彼はちょっととまどった後で答えた。

「将軍、わたしの声は元来こうなのです」

随員の一人が、生まれつき、そんな声の人がいるものです、と引き取った。

「みなさんは、生まれつきのしわがれ声と喉の病気でかれた声

を判別できなければいけません。……君のしわがれた声は、無理をして働き、喉に異常が生じたものです。喉を大切にしないとだめです」

「将軍、ありがとうございます。喉を……大切にします」

彼の途切れがちな声はうるんでいた。

最高司令官の感謝を　この日総書記は、今日、道路とウルリムの滝を見て満足した、わたしは、人民の幸福の創造者である人民軍将兵の献身的なたたかいによって、人民へのいま一つの贈り物が作られたことをたいそううれしく思うとして、こう続けた。

「ウルリムの滝の開発は、党と革命、祖国と人民にこのうえなく忠実なわが人民軍が先軍時代に達成したいま一つの偉大な功績です。祖国と人民は千古の樹林の中に姿をひそめていたウルリムの滝を発見し、人民のすぐれた憩いの場に作り上げた人民軍将兵の英雄的偉勲を永久に忘れないでしょう」

総書記の話は続いた。

――ウルリムの名勝は地勢が極めて険しい場所にあったために、当地へ足を踏み入れた人はほとんどいなかった。以前、朝鮮の名所や名勝には大抵寺があり、そこに僧たちが住んでいたが、ここにはそのようなものもない。妙香(ミョヒャン)山の名僧西山大師も金剛(クムガン)山には行っているが、ここへ来たという記録はない。このように遠い昔から人間の関心外にあったウルリムの名勝を軍人建設者たちが発見し、人民のすぐれたリゾートを生んだ。……

「最高司令官同志！　西山大師がいかに名高い僧であっても、

断崖絶壁に閉ざされたこのウルリム嶺の渓谷へどうして入って来れましょうか。将軍がここに道路を拓く大英断を下し、われわれにその任務を与えて下さったおかげで、ウルリムの名勝が生まれたのです。ウルリムの名勝は初めから将軍が探し出し、人民に抱かせた愛の贈り物です」

こう言う指揮官に向かって総書記は、いやこれはあくまでも人民軍将兵の功績だとして、こう言った。

――人間が足を付けることさえ困難なこんな所に道路を拓くのは、最高司令官の命令とあらば空の星さえ取って来るという覚悟ができているわが人民軍将兵ならでは及びもつかないことだ。ここの道路とウルリムの滝は、わが建設者たちの思想の力によって世に生まれたと言っても過言ではない。わたしはこんな立派な軍人たちのために、すべてを捧げる決心だ。……

こう言って総書記は道路の建設とウルリムの名勝の開発に参加した全人民軍将兵に、最高司令官の名で感謝を送った。

「それは当然です」

2002年７月19日、朔州（サクチュ）食品工場を現地指導し、生産工程を見て歩いた金正日総書記は、工場で作った味噌、醤油の陳列室に案内された。

工場の幹部は、自分たちの工場で生産した醤油と味噌は味が大変いいと誇らしげに言った。

「そうかね」と反問した総書記は随員たちに醤油と味噌の味を見てみるようにと言った。

味を試した人たちの評はみなよかった。

ところが、その一人が、この陳列室の味噌は発酵工程場でなめてみた味噌とは味が同じでない、陳列室のこの味噌の方がもっといい味がすると言った。

道の責任幹部は首をかしげた。

（どうした訳だろうか。まさか他工場の製品を持って来て陳列しているなんてことはなかろうに）

居合わせた人たちもみな同じような思いにとらわれた。

そんな彼らを見回した総書記は、**「それは当然です」**と言い、味噌の容器を指して、その訳を話した。

「発酵工程場の味噌はまだ熟成しておらず、製品陳列室の物は十分に熟成しているのだから味が違うのです。熟成した味噌の味は当然よいわけです」

こう言って道の幹部たちを見回した総書記は、後日味噌一樽を忘れずに送って欲しい、それでおいしい白菜の味噌汁を作って食べたいものだと言って、からからと笑った。

「小白水にキジがいるのか？」

2002年10月7日、三池淵（サムジョン）第１旅館を視察した金正日総書記は、中央ホールの大型風景画『小白水（ソベクス）の歓喜』の前で歩みを止め、絵

がなかなかよいと言って、しばらく眺めた。

ところが具体的に見ると、風景画にはシカとキジが描かれてあった。総書記は誰にともなくつぶやくように聞いた。

「小白水にキジがいるのか」

この風景画は長い間、宿泊者たちの賞賛を得て来たものだったが、小白水にシカとキジが棲息しているかどうかについて疑問をいだいた者は一人もいなかった。

総書記は、この絵は小白水に行ったことのない画家が描いたものだとし、こう言った。

「小白水の谷にはマンシュウアカシカが出没することはありうるが、普通のシカとキジはない」

そして、こう続けた。

――美術家は現実を無視してはならない。以前、ある創作社で小白水の風景を描いた美術作品を見たことがあるが、そこにはシカとキジばかりかカモが3羽も描かれていた。それでわたしは画家たちに、カモが沼から一体どこへ飛んでゆくのかね、困ったことになったものだ、と言ってやったことがある。……

総書記の言葉にみんなどっと笑った。

その後、大型風景画に描かれていたシカとキジは姿を消した。

〝黄金山〟に大豆はない

2002年10月25日、昌城（チャンソン）食品工場を現地指導した金正日総書記

は、食品工場の原料はどこから得ているのかと聞いた。

「昌城郡の山地に産するヤマブドウ、サルナシの実、オオザンザシ、五味子などの木の実を採取して加工しています。今年はドングリを600トン採りました」

工場の幹部の答えに総書記は、それはなかなかいいと言って満足した。

総書記は、工場の前庭に展示されている基礎食品生産工程図の前で足を止めた。

「これは何の工程図ですか」

「基礎食品生産工程図です。最近、当工場に基礎食品作業班を新設しました」

一幹部が誇らしげに答えた。総書記は、この工場で基礎食品を生産するというのは理解がいかない、基礎食品作業班は何を生産するのか、と聞き返した。

「味噌、醤油、食用油の生産をすることになります」

「味噌、醤油、食用油を生産するとなると、大豆はどこから入って来るのです」

「郡内で幾らか栽培し、道から20トン割り当ててもらうことになっています」

総書記は、昌城郡のように大豆の自給が困難な地域に基礎食品生産工程を設けるのはよくない、昌城郡は耕地の少ない山間の郡だ、昌城郡のような郡ではいくら頑張っても、基礎食品生産に要する大豆を確保することは難しい、にもかかわらず、何をあてにしてこんな山間の郡に基礎食品生産工程を設けたのか理解でき

ない、昌城郡に豊富な山の実に依る食品生産工程をよりいっそう強化するべきであって、大豆を原料とする基礎食品生産工程を設けたのは昌城の実情に合わない、と言い、こう続けた。

「金日成同志は昌城郡の山はヤマブドウ、サルナシの実、ヤマナシの実など地方産業工場の経営に適した原料源が豊富だから〝黄金山〟と名づけたのです。その〝黄金山〟に大豆はありません」

安仏寺のイチョウの木

金野郡東興里の谷に安仏寺という寺があり、その庭には巨大なイチョウの木が立っている。

先軍指導中の2003年４月８日、金正日総書記はこの古寺に立ち寄り、イチョウの木を見た。

安仏寺は高句麗時代の516年に造営された寺で、極楽宝殿（大雄殿）を中心に、当初は７棟の建物が配されてあったが、不慮の火災で焼失し、1393年と1843年の二度にわたって再建された。現在の建物は1843年に改築されたものである。

安仏寺の内外を丹念に見て回り、丹青を原状どおり、古典的な味わいが出るように描き直すことをはじめ、文化遺跡・遺物の保存上歴史主義の原則、写実主義の原則をしっかり守るよう強調した総書記は、寺の屋根に枝を垂らしているイチョウの木の前で立ち止った。

「この金野イチョウの木は、高さ41メートル、上方胸部の周は15メートル、根方の周は18・２メートル、その直径は４・６メートルで世界最大のイチョウの木だと言われています」

寺の管理人は続けて、これは516年の安仏寺の造営時に移植した木だと言われており、その時から数えても樹齢は1500年をはるかに超える、東興里の沿革史には2000年と記されていると説明した。

すると、樹齢は1500年か、それとも2000年か？……

管理人の話しぶりには、総書記がお越しになった機会に、どちらが正しいか判断していただけたらという期待がこもっていた。

そんな気持ちを察した総書記はからからと笑い、わたしに考証してもらいたいと望んでいるようだが、自分にそんなことはできないとして、こう続けた。

「金野イチョウの木が実際何年生きた木であるかということは、専門家が来て確かめなければなりません」

総書記は、頭をかいている管理員に向かって、長い歳月育ったケヤキの古木は見たことがあるが、こんなに大きなイチョウの木を見るのは初めてだ、あまりに珍しい木で、わたしに見せたがっていたそうだが、今日来ていなかったら、こんな珍しい木を見逃すところだった、と言い、この木からギンナンがどれほど採れるのかと聞いた。

「年に300キロほどです」

総書記は、ほう、すごいものだと感嘆した。

この時、随員の一人が、金日成主席がすぐる祖国解放戦争（朝鮮戦争）当時、敵機の激しい爆撃にこのイチョウの木が被害をこ

うむるのではと案じて、洪命熹（ホンミョンヒ）副首相を送り、木の保護対策を講ずるようはからったということを話した。

国の宝をあんなにも大事にしていた主席のことが思い出されてか、総書記は粛然として襟を正した。

やがて、安仏寺の庭を出て小川にかけられた橋のたもとへ来た総書記は、歩みを止めて後ろを振り向き、ここから金野イチョウの木を見るといっそう雄大に見える、木が実に大きいと言った。

「はい、そうです。金野イチョウの木があんなに大きいので、１里や２里先からも見えます。葉が生い茂ると、木の下からは空が見えません」

管理人の説明に総書記は大きくうなづき、確かにあのイチョウの木は大きい、何里も離れた所からも見えると言うが、もっともなことだ、金野イチョウの木の樹齢が2000年だという記録があるのに、どうして案内板には1500年と書かれているのか、と質問した。

「現在までは1500年と考証されているのでそうしています」

この時、外国旅行を多く行っている随員が、金野イチョウの木はなんといっても世界で一番大きいと思う、と言った。

総書記はうなずいて、

「古い記録にこの木が2000年育ったとされているのだから、案内板にもそのように書くのがよいでしょう」

と言い、2000年前に植えられたと言っても疑いをはさむ人はいないだろうと付言した。

この日、総書記は、安仏寺の近くに休養所を建てて、苦労の多い農民たちをゆっくり休ませるようにするとよいと指摘し、出発

を前にしてこう言った。

「古い歴史を持つ安仏寺と金野イチョウの木の管理に万全を期することです」

その後、植物学者たちが改めて考証したところによると、金野イチョウの木の樹齢は2120年だと確認され、600余年の年を取り戻すことになった。

麻服と毛織りの衣服

2006年11月12日、金正日総書記は竜城（リョンソン）機械連合企業所を訪れ、新設のコンプレッサー職場で国産の「ＣＮＣ亀城（クソン）６Ａ」旋盤を注意深く見て満足し、この旋盤は、各種の部品をプログラムによって自動的に加工することができるので機械工たちに喜ばれていると言うが、もっともなことだ、当職場内の数十台もの加工設備にすべてデジタル表示器が装置されたことも大きな成果だとたたえた。

組立て場には、新型コンプレッサーが広い空間に幾つもの列をなしてずらりと並んでいた。ここで、規模と形態、能力の異なるさまざまのコンプレッサーについて、用途と構造・作用原理、技術的特性の詳しい説明を受けた後、総書記は新設の精密加工区域に向かった。

新型コンプレッサーの流れ生産区域にある設備のほとんどは、高レベルの精密最先端設備であった。中には国際市場で１台の価

格が100万ユーロを超えるものもあった。

総書記は、先進資本主義諸国が以前は特殊設備の輸出をココムの名で統制したが、今はワッセナー協定なるものをもって２重用途製品だのなんのとこじつけ、朝鮮のような革命的で反帝的な国に対し禁輸措置を取っている、しかし帝国主義と追随勢力がいくらあがいても、朝鮮封じ込め政策は長続きしないであろうとして、こう続けた。

「今日、竜城機械連合企業所を見て回ってとても気分がいい。新製品のコンプレッサーもよく、コンプレッサー生産専門職場を現代的に作り上げたのもいい。今や竜城機械連合企業所は毛織りの衣服を着たと言えます。生産をたゆみなく活性化し、二度と麻服のレベルに逆戻りしてはなりません」

このような人が愛国者だ

2007年２月６日、長淵（チャンヨン）湖養魚場を視察した金正日総書記は、「囲い網式ニジマス養殖」場の全景図と「淡水モクズガニ棲息場形成図」の前で養魚の展望計画についての説明を受けた。

「今後、稚魚を一定の大きさに育てたうえで、囲い網の中または湖に入れて養殖することになります。他方、湖水が海に流れ込むこの河口に湾を造成して淡水モクズガニの棲息場を作り、子ガニを育てて武渓湖（ムゲ）と東淵（トンヨン）湖に入れる計画です。同時に産卵期に川をさかのぼって来るサケ、ボラ、ウグイ、マスをここで産卵させた後、成魚

を捕って人民に供給し、孵化した稚魚は放流して数年後成魚になって戻って来れば、同じようにして捕ることになります」

総書記は、展望計画があまりに夢のようで信じ難いほどだ、君にはほらを吹く癖があるのじゃないか、と笑いながら言った。

まわりで哄笑が起きた。

魚が大量に群れ泳ぐ養魚場の未来像を描き見ながら、楽しげにジョークを飛ばす総書記。……

その後、採卵場から新設の稚魚養魚池に至るまで残らず見て回った総書記は、湖に天然飼料はあるか、ヘドロが堆積しているかと質問した。湖に浮遊生物や浮水植物、それにシラウオなど小魚が多く、ヘドロ中には有機物が多量含まれているという説明に、総書記は、それこそ大変な天然飼料だ、これほど天然飼料に恵まれた所は他にはないだろう、このような湖で養魚を囲い網でもし、放流法も適用して行うようにしたのは奇抜な着想だ、誰が考えたのか、天然飼料をもって養魚を成功させようとして傾けた努力と情熱は感嘆すべきだとたたえ、こう言った。

「自分たちの住む土地の自然地理的条件を利用して人民生活問題の解決に取り組み、頭を使い、工夫をこらし、情熱を傾ける人がほかならぬ愛国者です」

〝悪夢の時間〟

芸術公演『祖国の青空』（黎明）のリハーサルが行われた2007

年２月24日の夕方、金正日総書記はリハーサルを指揮した幹部を呼んで、リハーサルの結果はどうだったかと尋ねた。成功裏に行われたという返答に、製作者たちがわずか数日で修正作業を終えたとしてその労をねぎらい、リハーサルはどの時間に行ったのかと聞いた。

「午前11時に始めて12時に終えました」

「リハーサルを午前に行ったのですか」

総書記は驚いて反問し、あなたたちには声楽についての初歩的な常識もないととがめた。

「午前11時頃は、歌手の声が一番悪い時間です。午前中は、発声練習を３時間行っても、声がきれいに出ないと言います。それで、歌手たちは午前11時を悪夢の時間だと言っています」

（悪夢の時間！）

リハーサルを指揮した彼自身も初めて聞く言葉であった。もちろん彼も、午前中は午後に比べて発声の不利な時間だという程度の常識がなくはなかった。しかし、その時間が悪夢の時間だとして嫌われているということまでは知らなかった。

総書記の指摘は続いた。

――世界的に見ても、公演はすべて夕方にし、午前には行わない。音楽芸術を指導する人ならそれくらいの常識はわきまえていなければならない。……

強者は挑戦者を恐れる

2008年５月４日、高山(コサン)果樹農場を訪れた金正日総書記は、展望台に立って広大な果樹園を見はるかしながら、実にすばらしい、たいそう立派だ、これからは年々果物の大量生産が可能になった、と満足した。そして、独自に苗木の生産に取り組み、ここ10年ほど丈の低いリンゴ畑の造成をはかったというが、本当によくやった、農場従業員たちの疲れを知らぬ敢闘精神を高く評価する、従業員たちにわたしの挨拶を伝えて欲しい、と言った。

「ありがとうございます、将軍」

総書記は喜ぶ支配人にさりげなく尋ねた。

「高山果樹農場は今どこを競争相手としているのです」

思いがけない質問に、郡の幹部たちは顔を見合わせていたが、支配人はすかさず答えた。

「将軍がクァイル郡を現地指導された際、クァイル郡と競争するほどの対象がなければならないとおっしゃったと聞き、わが高山郡がクァイル郡に挑もうと決心しました」

総書記は、果樹園の面積からすればはるかに規模の大きいクァイル郡と競争するとは大した意気込みだとして、**「強者は挑戦者を何よりも恐れるものです。支配人は事業を強力におし進める革命的気質があり、力量もある勇敢な働き手です。幹部は意欲に富み、展開力がなければなりません」**と言い、それでも北青(プクチョン)郡の果樹農場を競争相手に選んだ方がいいのではなかろうかと聞いた。

「将軍、北青はわれわれとはもはや比較になりません」

爆笑が起きた。

総書記は笑って、よろしい、それならクァイル郡と競争してみなさい、と賛成した。

「分かりました。クァイル郡を負かしてみせます」

またも波打つ愉快な笑い声。……

笑いがおさまると、総書記は、自分は当地経由で鉄嶺(チョル)を越え前線を行き来しながら、軍人たちや人民にどうすればもっと多くの果物が行き渡るようになるだろうかと思い続けた、高山果樹農場が新世紀にふさわしく面目を一新したのを見ると、気分が実にいい、江原(カンウォン)道党委員会と高山郡党委員会が農場づくりを熱心にあと押ししているようだが、この際、わたしも農場に力を貸す必要がありそうだ、農場幹部たちの意気込みと気質を見ても援助しなくちゃね、と言った。

屏風台地ヤギ牧場にて

屏風さながらに山に取り囲まれた台地だとして屏風(ビョンプン)台地と呼ばれている咸州(ハムジュ)郡の人里離れた山あいに、大きなヤギ牧場が生まれた。

2008年８月７日、金正日総書記は当牧場を視察した。

より高いレベルで　全景図の前で牧場建設の経緯と敷地面積、

諸分場と現有ヤギ数などの実態について詳しい説明を受けた金正日総書記は、ヤギが1万頭以上でないと大牧場とは言えない、と残念そうに言った。

郡の幹部たちは顔を見合わせた。

この時点で牧場は数千頭のヤギを飼育する20余の分場とヤギ乳加工室、学校、商店、便益サービス施設などを擁し、チーズ、固形乳、ヨーグルト、その他の乳製品を生産する、かなり大きな牧場とされており、放牧道路も延べ40キロ近くの長さに達していた。それで、国が「苦難の行軍」、強行軍を余儀なくされていた時期に、刻苦奮闘して郡営のヤギ牧場を建設し、ヤギの頭数や乳の生産量において他の牧場を大きく凌駕するに至ったことを彼らは誇りにしていたのであった。それにもかかわらず、牧場の規模が大きくないと言われたのだから、驚かざるを得なかった。

総書記が立ち寄った東峰(トンボン)分場の乳加工室では、乳の匂いが濃く立ちこめ、チーズ、固形乳、ヨーグルトなどの乳製品がうず高く積まれていた。

「乳製品はどこへ供給しているのですか」

一幹部が、託児所、幼稚園、それに邑地区の住民に供給されているとし、こう付け加えた。

「ところが将軍、地下貯蔵庫には、チーズが一杯積まれています。住民たちは固形乳は好みながらも、チーズは匂いが鼻につくとして敬遠しています」

総書記は笑った。

――匂いを楽しんで食べるのがチーズだ。匂いがないとチーズ

ではない。……ヨーロッパの人たちはチーズを好むが朝鮮人はまだチーズを好むまでにはなっていない。チーズを農村の住民たちがあまり買わないというが、都市の人たちさえさほど好まないものを農村の人たちが喜ぶわけがない。……

笑って聞いている人たちを見回して、総書記は続けた。

「咸州郡で屏風台地ヤギ牧場を建設し、乳製品を郡内の託児所と幼稚園、それに邑地区の住民にだけ供給するようではまだまだいけません。ヤギ牧場を活性化し、咸州郡の人たちがみな乳製品を食べられるようにしなければなりません」

一同は、総書記が牧場全景図の前で、ヤギが１万頭以上でないと大牧場とは言えないとして残念がった理由が分かった。彼らは、子どもたちや邑地区の住民にだけ乳製品を供給することで満足していたのであるが、総書記は全郡の住民を考えていたのであった。

アイディアはいいが　８キロ余りの峠道を登り、標高1000メートルの山頂に立った総書記は、山麓に広がる牧場の全景を俯瞰した。

ここで郡党責任書記が、牧場従業員の間から、乳製品の生産が増大している反面燃油に事欠いていることを考慮して、馬を数頭入手して乳製品を運び出してはという意見が出されている、と報告した。

人びとはみな、郡の実情を踏まえた適切な提案だと考えた。ところが総書記はかぶりを振った。

「郡党責任書記がヤギと乳製品の数が増え、国の燃油事情がきびしいからと、馬を数頭入手して乳を搬出してはと考えているよ

うだが、アイディアはいいとしても、乳を馬車で運び出してはいけない。そうすれば運搬中乳が変質する恐れがあります」

総書記は、数十キロもの放牧道路を馬車で運ぶべきではない、生産された乳は自動車で搬出しないといけない、自動車を十分に具備し、燃油は計画化して供給することだ、と念を押した。

この日、総書記は早暁牧場に到着し、小さな分校や商店ももれなく視察した。

太陽が高く上がっていた。

別れに際して総書記は、ヤギの頭数を思い切り増やし、ヤギの飼育と乳製品の生産に力を入れて、人民の暮らしを潤すことに積極的に寄与する一方、深い山中で党の意図を貫くために黙々と熱情を傾けている従業員たちの面倒をしっかり見るようにとくり返し強調した。

「〝南無阿弥陀仏〟を唱えなくちゃ」

一億数千万年前つまり中生代に形成された龍岳（リョンアク）山は、その連峰があたかも天空に飛び立つ龍を思わせるとして、古くから龍岳山と呼ばれ、景観のすぐれていることで「平壌金剛（ピョンヤンクムガン）」とも言われている。

2009年１月17日、龍岳山を訪れた金正日総書記は、山を開発し、人民の遊園地に変貌させた建設者たちの労をねぎらい、遊園地をよりいっそう立派に作り上げるようにと言った。

この日、法雲庵（ポウン）に寄り本殿の内部が立派に手入れされ、丹青もよくできているとたたえた総書記は、仏殿の中央に座する阿弥陀像を眺めた後、燭台に点されたろうそくに目をこらし、昔から寺院では黄色いろうそくを立てるしきたりがある、ところが、このろうそくは白い、黄色いものと取り換えなければならない、と言った。

この時、赤い袈裟をかけた住持が、将軍の来駕は本寺の大きな光栄だとして、念仏を唱えてみたいと言った。随員たちは、思わぬ申し出に唖然とした。ところが総書記は、念仏だとね、よろしい、ひとつ聞いてみよう、と笑って言った。

住持は木魚をとんとん叩きながら念仏を唱え始めた。仏教とはまるで無縁の随員たちは、訳の分からぬ念仏がいつまでも続くことにうんざりした。一人がたまりかねて、住持の脇を突っついた。総書記は、仏教の儀式を邪魔してはいけない、最後まで聞こうと言って、彼を制した。

やがて、念仏を終えた住持は、木魚を下におろした。

「終わったのかね」

「はい、終わりました」

「それなら木魚を置く前に〝南無阿弥陀仏〟を唱えなくちゃ」

住持は、「あっ、まったく」と言って頭をかいた。感激と興奮にぼうっとなり、つい忘れてしまったのである。みんな声を立てて笑った。

総書記の後について外へ出た住持は、ここには法雲庵本殿をはじめ四棟の建物がある、こちらのトクソン閣は僧たちがひきこも

って経典をそらんじた建物だと説明した。

総書記は、**「ああ、集中学習！」**と言って朗らかに笑った。またも爆笑が起こった。

チョウザメは海へ

2009年６月21日、ある養魚場を訪れた金正日総書記は、深い感慨にふけった。そこは、国が「苦難の行軍」を続けていた頃、総書記の肝煎りで建設された養魚場であった。

無量の思いで見入っていた総書記は、以前はここでニジマスを主に養殖したが、近頃はチョウザメを飼っている、わが国でチョウザメの養殖に成功したのはなんとすばらしいことだろう、以前はチョウザメの養殖は夢にも考えられないことだった、と満足して言った。

総書記はこの日、人民軍の指揮メンバーとの談話席上でもチョウザメを話題にし、なんとしてもチョウザメの海中養殖を実現しなければならないとして、こう続けた。

――一日も早く人民にチョウザメの魚肉とキャピア（腹子の塩漬け）の味を見せてあげたい。われわれは「苦難の行軍」の時、食糧事情がきびしくて草の根で空腹をしのぎながらも、ひたすら自分たちの持ち場と社会主義を守り抜いた人民に、いかに高価な代償を払っても、いっときも早く、ひとの羨むほどすぐれた生活条件を提供しなければならない。……

一同は、あの「苦難の行軍」、強行軍時の苛酷な日びのことを今更のように思い返して、粛然とした。

草の根、〝代用食品〟……

前線視察の日、道端に萌える若草を見て車を止め、そのようなもので飢えをしのぐ人民を思って胸を痛めた総書記！

あの苦難の日びの苦悩が今もなお胸にわだかまっているのか、総書記の声は高ぶった。

チョウザメは海へ、朝鮮は世界へ。……なんと誇らしい現実でしょうか。万難に打ち勝って強盛大国への分水嶺に立つことになった今日、わたしは、試練が重なり曲折も多かった過去を振り返り、革命はまさにこのような面白味があればこそ行うのではなかろうかという自負と、人民のためにもっともっと有益なことをしなければという思いがいっそう強くなります。すべてを人民のために！　これがわたしの活動の根本的原則であり、生の目標です。

愛国者も英雄も多い国

2009年９月16日、金正日総書記は幹部たちを前にして、こう語った。

――現地指導中に見ると、すぐれた幹部、立派な人たちが実に多い。わが国は愛国者が多く、英雄も多い国だ。いつも言っていることだが、朝鮮人民はまったく立派な人民だ。……

追憶にふけりながら一同を見回していた総書記は、話を続けた。

――今くりひろげている150日間戦闘には、定年退職した人たちも競って元の職場に戻って来て、戦闘に加わっている。白川(ペチョン)郡では独力で礼成江(レソンガン)6号発電所を建設しているが、これには女性たちも決起して突撃隊を組み、発電所の建設を押し進めている。香山(ヒャンサン)郡の家庭主婦たちは名勝の開発を支援し、下毘盧(ハビロ)の入り口から二仙男(イソンナム)の滝までの登山路の普請を助けて、セメントや骨材を背負って運んでいる。このような点を見ただけでも、わが国に社会主義の本来の姿が息づいていることをはっきりと見てとれる。今、朝鮮人民の精神状態は非常によい。わが人民は、党から言われたことに一意専心している。……幹部たちは常に大衆を尊重し、大衆に依拠して活動しなければならない。大衆から遊離した党などありえない。金日成同志はあのきびしい抗日革命闘争時代、魚が水を離れては生きられないように、遊撃隊は人民を離れては生きていけないと強調して、遊撃隊員たちが人民の利益を重んじ、人民に依拠して戦うよう指導した。人を捨てるのは易しいが、立派に育て上げることは難しい。それゆえにわが党は、幹部たちが大衆観点を確立し、党の大衆路線を貫くよう求めているのだ。……

しばらく言葉を切っていた総書記は、党の大衆路線を確実に貫かなければならない、そうしてこそ大衆との活動を偏向なく立派に進めることができる、これはわたしが長年革命と建設を指導する中で得た教訓だとして、こう続けた。

わたしは常に、左を見ればわが兵士たちがおり、右を見ればわが人民がおり、中央を見ればわが幹部たちがいると考えながら活動しています。幹部たちは自分たちを党の永遠の同行者、忠実な

支援者、すぐれた道づれとして、白頭(ペクトゥ)山で開かれたチュチェの革命偉業を最後まで完成させていかなければなりません。

48年後に撮った記念写真

平壌(ピョンヤン)紡織機械工場は、金正日総書記が金日成総合大学在学中生産実習を行った工場である。

2009年９月29日、48年ぶりに当工場を訪れた総書記は、紡織機械部品の展示場に案内された。

よほどの工場でないと到底加工不能な超精密度を要する部品、とりわけそれまで工業先進国から輸入していた部品までずらりと並んでいる展示品に目をこらし、これらはみな当工場の製品かと聞いた総書記は、**「大したものだ、実に大きな事をやってのけた」**と、喜びにあふれて言った。

数年前、強盛国家の建設に自分たちも一役買おうということで、工場では一切の織機を先端水準の物に取り換えることを決意したものの、いざ取り掛かることになると逡巡せざるを得なかった。

先端水準の織機とは、現代紡織機械工業の精粋とされる弾性レピア織機をさしているのである。外国の製品を輸入するとなれば、莫大な外貨を要することもさることながら、それらを売ろうという国すら見出し難いのである。

そこで、自力で製作することを決心したのであるが、立ちはだかる隘路や困難は一通りでなかった。まず設計図がなかった。苦

心して設計図を作成したものの、部品の最精密加工用工作機械がなかった。だからと言って、朝鮮戦争休戦後の1950年代中頃、旧式の工作機械と手労働に頼ってトラクターやトラックを作ったような、そんなやり方で最精密部品を生産することはもちろん論外であった。

それでもなんとかしてみようと、何年も失敗に失敗を重ねながら粘り強く取り組む技術者や労働者たちの闘志と愛国心を高く評価した総書記は、国の経済事情がまだまだ困難であったが、数種の高性能ＣＮＣ設備一式を工場に贈り、隘路の打開を助けたのであった。

感慨にふける幹部たちに、総書記は言った。

「当工場が自力で弾性レピア織機を製作するなど、大きな事をやり遂げました。わが国が弾性レピア織機の生産に成功したことは、国の紡織工業の発展上一大転換をもたらした革命です」

工具職場に足を向けた総書記は、四八年前に行った生産実習の日びを振り返りながら、当時利用した宣伝室と更衣室を見たあと、思い出の深い26号旋盤の前に立った。

「将軍、工具職場におられた時の将軍の写真がわたくしどもにはないので、工場を訪ねる見学者たちが残念がっています」

工場幹部のこの言葉に、総書記は、**「工具職場の前で記念写真を撮りましょう」**と言った。

こうして48年の歳月が流れたこの日、総書記は意義深い記念写真を工場に残したのであった。

ＣＮＣに宿る偉人像

ＣＮＣという語が出現したのは1970年代後半期である。手工業的道具に毛のはえたような簡単な工作機械から半導体素子による制御装置をもって構成されたＮＣ機械へと進み、それが遂にコンピュータープログラムによって操作されるＣＮＣ機械へと飛躍する、機械製作工業における一大変革が生じたのであった。

朝鮮の科学者、技術者は1980年代初め、一部工業先進国においてのみ作られていた一定の条件を備えたＣＮＣ工作機械の製作に成功し、ここに朝鮮のＣＮＣ機械工業は画期的な進歩を遂げることになったのである。

しかし、機械工業部門の働き手たちも当時はまだ、ＣＮＣの真価をほとんど理解していなかった。ＣＮＣのすぐれた性能を正しく認識するためには多くの時間が必要であった。つまりそこには一定の啓蒙段階が存在しなければならなかったのである。ＣＮＣ機械の生産数がごく限られていたことに、その主因はあった。

そこで、金正日総書記はＣＮＣ化の全国的発展・普及をはかり、国の科学者、技術者の最先端突破戦を陣頭に立って指揮した。

そうした中で多くの逸話が生まれたが、ここに、2009年10月31日にあった出来事を紹介する。

支配人の告白　この日、総書記はＣＮＣ化を実現したある工場を現地指導した。

当工場は、1990年代中頃の「苦難の行軍」の時期、国家資金の枯渇で経済的に大きな試練を経ていた時であるにもかかわらず、ＣＮＣ化の実現をはかり、国に残されていた資金の全額をこれに投ずる大決断を下した総書記の感動的な歴史の追憶がこもった工場であった。

総書記の決断は実を結び、工場の広大な区域がＣＮＣ化され、ここに総合生産システムの実現を果たすに至ったのである。

2年ぶりに来たが、見違えるばかりに変わったとして、現場を見て歩く総書記の感慨はひとしお大きかった。

精密度はどうか、不良品は出ないか、労働力はどれほど節減できたか、現代化がなった今、機械の稼動状態は良好かと、いちいち確かめた後、総書記は言った。

「どうです。以前の作業場と今日のこの作業場はなんと対照的ではありませんか」

この時、支配人が切々とした口調で話し出した。

「将軍、わたしは今日、必ずお話ししたいことがあります。将軍があのきびしかった『苦難の行軍』時、われわれの工場においでになった時のことです。あの日、将軍はＣＮＣをやれとおっしゃいました。ところが、わたしたちはＣＮＣという言葉の意味が分かりませんでした。それでも将軍のお言葉ですから、わたしは訳の分からぬまま、後先も考えずに『はい、ＣＮＣをやります』と答えたのですが、ＣＮＣがなんなのかさっぱり分からず閉口しました。狼狽したわたしは、すぐさまＣＮＣ機械を作っているという〝蓮河（リョンハ）機械〟にすっ飛んで行きました」

「そう、あなたはなかなか正直だ。わたしがＣＮＣを導入せよと言った時、あなたはなんのことか分からず、ぽかんとしていましたっけ」

総書記は豪快に笑った。

「それでわたしは蓮河機械管理局へ行って聞いてみたのです。『将軍がおっしゃったお言葉だが、ＣＮＣとは一体なんだ』とです。すると、彼らは丁寧に説明してくれました。そこでわたしは初めて、ＣＮＣが何かを理解できたのです」

こう言った支配人は、身づくろいを正し、総書記に改めて挨拶した。

「将軍、本当にありがとうございます。何も知らなかったわたしたちをこんなに……」

笑顔で始めた話が涙をもって継がれた。随員たちの目も潤んでいた。しばらく沈黙が続いた。

総書記は目に涙をたたえている支配人に言った。

「ところが今はりゅうとした支配人になりました。歌をうたうまでになったのですからね。ＣＮＣの歌ですよ。ＣＮＣの歌を一度うたってみませんか」

「将軍、ＣＮＣの歌は実にすばらしいです」

「この次あなたに会う機会があったら、ＣＮＣの歌をうたわせてみます」

みんなからからと笑った。

この時、道党責任書記が口を添えた。

「あの日は、本当に寒心に堪えないというほかありませんでし

た。それに寒さもなんとひどかったことでしょう。将軍が吹雪をついて工場に来られた時は、1998年12月でした。それから今日まで10年11カ月が経過しています。その間、工場はこんなに立派に変貌したのです。将軍、あの日のことが本当に忘れられません」

彼の声は潤んでいた。

「将軍、わが国でのＣＮＣ技術による生産工程の現代化は、この工場から始まりました」

「あの時、工場には実際何もありませんでした。……」

他の人たちもこもごもに心情を語った。

歴史がいまだ経験しなかった貴重な思い出であり、他のいかなる所でも聞けない、ＣＮＣ征服者たちの吐露であった。

ＣＮＣの〝いとこ〟　この日、総書記はいま一つの工場を現地指導した。

出迎えた幹部たちと挨拶を交わした総書記は、彼らの案内で生産現場を視察した。そこには工場が自らの手で作り上げた新型の機械が稼働していた。

それらは、９年前の５月、当工場を現地指導した際、運転中の機械を見た総書記が、今はこれより進んだ新世代の設備が出現しているはずだが、と言った指摘に基づいて工夫し、製作したものであった。工場の労働者と技術者たちが力を合わせて作ったという説明を聞いた総書記は、その機械で作り出されたばかりの製品に手を触れた。

「あっ将軍、熱いです」

このあわてた声を意にも介せず、製品をなでながら総書記は、新しい機械の長所が何かを詳細に聞いた。

製品の生産速度が非常に速く、この１台が以前の機械６台に匹敵するとして支配人は、この新しい機械を３台製作導入した結果、古い機械18台が不用になりました、それらは国に納めますと言い、こう続けた。

「この設備を作ることができたのは、将軍がわれわれの目を開かせ、ヒントを与えて下さったからです。われわれは、他部門の工場がこの機械を要求するなら、作ってあげます」

総書記はそう言う彼に向かって言った。

「これも半ＣＮＣだ。ＣＮＣの〝いとこ〟」

このおどけた言い方に、みんな吹き出した。

昔の地主が目を回すことだろう

2009年11月１日、平安（ピョンアン）北道泰川（テチョン）郡銀興（ウンフン）協同農場を訪れた金正日総書記は、この農場に来るのは三度目だ、2000年１月に来た時は、耕地整理を終えたばかりのハンドゥレ原を見て回った、あの日は非常に寒かった、去年の７月にも来て見、今度また来たが、その間、農場は実に大きく変貌した、と満足して言った。

総書記は、稲、トウモロコシ、ジャガイモなど、本年の農産物展示品を見ながら、銀興協同農場の穀物生産高が去年に比べて160％増したと見積もられているとは大したものだ、沙里院（サリウォン）市媚（ミ）

谷(ゴク)協同農場をはじめ社会主義競争運動に参加した他の協同農場が銀興協同農場の実績を知ったら、人知れず慨嘆することだろう、この協同農場が今年、党の農業革命方針に呼応して、チュチェ農法の要請どおり田畑の地力を高め、科学技術的要請に即して農事を念入りに行った結果、驚くべき生産成果を挙げた、とたたえ、喜びにひたる幹部たちを見回して、語を継いだ。

「変貌した今日のこの銀興協同農場へ来て見れば、誰もが驚き、感嘆することでしょう。以前わたしが耕地整理を完了したハンドゥレ原を見て、昔当地に住んでいた地主が来たら、自分の土地がどのあたりにあったか見当がつかないだろうと言ったが、もし今ここへ来て見たら、びっくり仰天して目を回すことでしょう」

総書記の面白おかしい表現に、みな顔をほころばせた。

この時、農場の幹部が、農場で挙げた成果はすべて将軍のすぐれた指導のたまものです、と言った。

総書記はかぶりを振り、これは、銀興協同農場の幹部や農場員たちがわが党の農業政策を体して愛国的献身性を発揮し、そのうえで得た貴重な実りです、今年の農事で大きな成果を収め、村づくりにも励むなど苦労の多かった協同農場の幹部と全農場員に感謝します、と述べた。

「大きな顔をすることができる」

2009年11月６日、定平(チョンピョン)郡が自力で建設した金津(クムジン)江旧倉(クチャン)青年

発電所を視察した金正日総書記は、展望台に立って広大な人工湖と長さ数百メートルものダムを見渡し、実に気分がいい、咸鏡(ハムギョン)南道が人知れず大きな事をやった、大したものだ、今年はどこへ行って見ても、驚くべき躍進や革新がぞくぞくと起こっている、それこそ激変の年だ、と満悦して言った。

道の一幹部が、定平郡が金津江６号青年発電所についで金津江旧倉青年発電所を建設し、電力の生産能力を二倍に引き上げたと、報告した。

総書記は、１個の郡が独自にそれほどの電力生産能力を造成したことは大したものだ、人間は決心さえすればできない事がない、として**「人間の力は何にもまして威力があり、実に恐ろしい」**と評した。

発電機室の前庭にある金津江の段々式発電所建設展望図の前で総書記は、それまで竣工した発電所と建設中の発電所についての説明を聞き、こう言った。

――金津江にもっと多くの発電所を建設することだ。金津江の全長が100キロメートルほどだというが、これまで３カ所に発電所が建てられている。金津江に更に咸興(ハムフン)２号青年発電所と咸興１号青年発電所を建設して電力生産能力を一段と高めるなら大変なものになる。金津江は電気の川のようなものだ。金津江の名を電気江と変えなければならんようだ。……

総書記はついで、この郡で考案したというローム豆炭とローム練炭、菌体蛋白飼料を見た。

ローム練炭とローム豆炭の成分とその比率についての説明を

詳しく聞いた総書記は、実に興味がある、定平郡に来てすばらしい物を見ることができた、と非常に喜び、火つきがよく、火力も強いというからには家庭用燃料に広く利用すべきだとして、こう続けた。

「ローム豆炭は定平郡の特許だと言えます。定平の人たちはこれで大きな顔をすることができるでしょう」

人びとは笑いさざめいた。

総書記は、定平郡の幹部たちが人民への献身的奉仕精神をもって思索を重ね、工夫を深めて、人民生活の向上に役立つすぐれた発明をした、全国すべての幹部が定平郡の幹部たちのように人民の真の忠僕にならなければならない、と強調した。

「分かりました。人民のためにもっと多くのことを致します」

「将軍、ありがとうございます」

幹部たちの一様な誓言であった。

「ここの製品はみなわたしが買おう」

2009年12月16日、羅先大興(ラソンテフン)貿易会社を視察し、諸加工工程を深い関心をもって見て歩いた金正日総書記は、案内する幹部を振り返って聞いた。

「次はどこですかね」

「松茸酒の加工場です」

現場へ案内された総書記は、熟成タンクをしばらく眺め、つい

で酒包装室の包装工程に目をこらし、瓶洗浄機、酒注入機、縫合機などの作業工程を見るとすべてオートメ化されている、酒の包装室にＣＮＣ技術は導入されていないが、オートメ化はなされている、として喜び、こう聞いた。

「現在、酒の在庫量はどれほどですか」

「今のところ2000瓶です」

総書記は、原料は現在どれほど準備されているのか、幾瓶分に相当するか、一日の生産量はどれほどか、熟成タンクの能力はいかほどかといちいち確かめた後、こう言った。

「ここの製品はみなわたしが買いましょう」

そして、瓶を一本取り上げて聞いた。

「この酒のアルコール分は何度ですか」

「30度です」

総書記は随員の一人に酒を試飲してみるようにと言った。味を試した彼は、松茸の香りがすると報告した。

総書記は、会社が150日間戦闘と100日間戦闘期間に作った製品をみな平壌（ピョンヤン）へ送るようにと言った。

「そう致します」

当幹部はこう答えながらも、けげんな色を隠せなかった。

この時、道の一幹部が、ここで生産した酒を随員のみなさんに味わってもらってはいかがでしょうか、と勧めた。

総書記はかぶりを振り、それより平壌に残らず送り、平壌市民に飲ませる方がいい、商標は今のままにして送ることにしよう、全国的なこの激変の年に、150日間戦闘と100日間戦闘をくりひろ

げて多くの商品を生産しているのだから、それらを平壌のデパートに運び込んで積んでおき、市民に提供することで、首都がいっそうの活況を呈するようにしよう、と言った。

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国
ㄱ－5835072

E-mail：flph@star-co.net.kp
http：//www.naenara.com.kp

ISBN 978-9946-0-1266-7

9 789946 012667 >

朝鮮・平壌

チュチェ104(2015)